
俺の異世界譚

ズック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の異世界譚

【ZPDF】

Z7979G

【作者名】

ズック

【あらすじ】

普通の高校生、浅木勇輝あさみ ゆうきはいきなり異世界へと飛ばされてしまつ。なぜ異世界へと飛ばされたのか？はたして勇輝は元の世界へ帰ることが出来るのか？これは、普通じゃなくなつてしまつた少年の異世界での物語……。

Page 0・プロローグ（前書き）

これは作者の初めての作品です。
御見苦しこりが多々あるとは思いますが田を通じてやつて下さい。

何を言つていいか分からぬと思つが聞いてくれ。

唐突ではあるが、俺は、森の中にいた。

自己紹介から始めようか。俺の名前は浅木 勇輝、今年で17歳。身長はまあ平均くらい、黒髪黒眼で、体格も、学校の成績も、運動も、（言いたくは無いが顔も）良くも悪くも無い平凡な高校生、だつた。

両親と姉と俺の、これもまあ普通の家庭で、別に小説とかでよくあるような幼い頃に事故にあつたとか、可愛い幼馴染がいるとか、そんなこともなかつた。

俺は今田……と言つていいのか判らないが、いつも通り学校へ行き、いつも通り授業を受け、いつも通りそこの仲の良い友人たちと話して、いつも通り一人で帰つて来る筈であつた。（帰り道が同じ奴がいないんだよ……）

だけど、そんな帰り道の途中、漫画やアニメであるような魔法陣？
が突然目の前に現れて…

次に視界に飛び込んできたのは、今俺の眼前に広がる森だった。

「うー、どうだよ?」

地面に座り込み、樹にもたれ掛かりながら言つてみる。

気持ちを落ち着かせる為というのもあるが、大部分は不安を払う為に発した。

当たり前だ。いきなりこんな森の中に独りにさせられて不安にならない人間はない。

というか、不安なのはさつきからやけに犬の遠吠えの様な声が聞こえるからなんだが……

「さつきより近い気がするんだよなあ……」

オオーネン、とこれで数えただけでも7回田の遠吠えしき声。少なくとも一回田や2回田と比べる必要がないほど近くで聞こえる。

うむ、怖いな。

正直パニック寸前なんだが、どうにか騒ぎ立てるのは抑えてこる。騒いだら死ぬような気がするんだよね。

Be cool -俺。coolじゃないぜ?

それは雑見な沢の主人公の得意分野だ。間違つても俺ではない。

「ふう

馬鹿なこと考えてたら少しばかり落着いたな……

まずは現状確認。

「」は？」

よくわからん森の中。

今何時？ 携帯は午後8時だけじそこまで暗くない。恐らく午後5～6時。

持ち物は？

カバンが無くなっているから、言つとすれば財布と携帯。当然のように圈外だけじ。

服装は？

学校の帰りだったから学ラン。少し汚れてる…現状を打破出来るか？ お手上げ。助けが無い限りここで俺の人生は終わり。

……なんの解決にもなってないな。絶望感が増しただけ、溜息しか出ないつづーの。

「」にしてもどうしようもないしな、移動してみるか

言つて、自分を奮い立たせる。それでもしないと動けなかつた。立ち上がりて辺りを見回す。

少し時間を状況確認に掛け過ぎたようだが、さつきよつも暗くなつてゐる。ものすごく不気味だ。

特に樹々の葉が揺れる音しかしないだなんて！？

瞬間、左の茂みから何かが飛び出してきたのが横目で見えた。

「ああああーーー！」

声を上げ、左腕を全力で振るつ。

手刀と呼ばれる部分に鈍い衝撃と痛み、それを頭で理解するよりも

先に俺は駆け出していた。

馬鹿か！俺は！？

遠吠えのことなどすっかり忘れていた。

全く動かない俺は、奴らにとつて格好のエモノであつたろう。聞こえていた遠吠えが威嚇とかならまだいいけど、仲間を呼ぶものだとしたら……

刹那、全身を貫くような悪寒。

地面に太く木の根が這つているのが見えるが気にしてはいられない。転がるよつに前へ跳ぶ。

そのまま鮮やかに前回り受身…とはいからず、思いつきり木の根に背中を打ちつけた。

くそ、学ラン泥だらけになつまつじやねえか。

酷く場違いなことを考えているとは思つが、気が動転しているんだろつさ。

前方から音が聞こえる。ビツややら追跡者は俺を飛び越えてしまつたらしい。

咳き込みながら体を起こすと、茶色と灰色の毛が混ざつた、大型犬より一回りほど大きな狼のような生き物がこちらを見ている。

二度も逃げられたのが悔しいのだろうか。目の前の追跡者、改め捕食者は低く唸り声を上げ、前足に体重をかけている。あの状態ならいつでも飛び掛つてこれる筈だ。

対する俺はまだ立ち上ることも出来ていない。それどころか足が震えている。

さつき殴つた左手が熱い。

怖い。

今まで平和に過ごしていた分、余計に。
明確な死が目の前にあるということが、恐ろしい。
泣きそうだ。むしろもう、ちょっと涙目である。

かさり、と後ろから何かを踏んだような音が聞こえる。
前を警戒しながら、恐る恐る視線だけそれなりに向けようとする。
無理。

体も回さなければ見ることは出来ない。

そんなことが出来るならとつぶに立つて走り出している。

後ろを見るとは出来ないが、きっと田の前にいる奴の仲間である
と予測し、こいつらに食い殺される未来を想像して、叫び声を上げ
よつとした直後

「少しだけ、目を閉じていて」

俺の頭に何かが乗る様な軽い感触と共に、優しげな声が掛けられた。
少女だ。

暗くてよく見えないが、声と背丈で大体そうあたりをつける。
森は歓迎するかのように薄つすらと月明かりを射し込ませ、少女は
月明かりの下、ゆっくりと狼へと向かつ。
彼女は丸腰である。

「お、おい……」「お、おい……」

殺されるが、と言いかけ、少女はそれよりも早く

狼の首を断ち切つた。

これが俺と、ここから始まる物語に深く関わる少女の出会いであつた。

サブタイトルの通りです。

風が森を通り抜ける。ざわざわと木の葉が揺れる音がするがそんなものは気にならなかつた。

少女の周りだけさつきよりも明るくなつてゐる。

月明かりに照らされて、彼女の肩の下まである蒼い髪が微かに揺らめいてゐる。少女はこちらに振り向き、俺と眼が合つと柔らかく微笑んだ。

……綺麗だな。

つて、違うー俺は断じて口リコソなんかじゃない！

首を思いつきり左右に振つて、先ほど考えてしまつたことを忘れようとする。

少女が不思議そうにひらひらを見ているのが見えるが、そんなものは無視。

眼を閉じて、煩惱退散 煩惱退散。

「あの、大丈夫？」

声に反応して眼を開けると、至近距離に俺を助けてくれた少女の顔がある。

髪と同じ色の、空の色の様なつぶらな蒼い瞳。すっきりとした鼻。整つた顔。

「あ、ああ。ありがと」

もつとひやんとしたお礼が言いたかったのだけれど、まださつきの恐

怖は完全には抜けておらず、そんな言葉しか返せなかつた。せめて立ち上がりうとは思つうが、足はまだ震えている。

「まだそこここで。囮まれてるから」

俺が立ち上がりうと悪戦苦闘している最中、彼女は辺りを見回し言葉を放つ。
囮まれてる……？

「わっしきの魔物は遠吠えで仲間を呼ぶんだよ」

ああ、そうかい。すゞしく嬉しくない情報をありがとう。
足だけでなく全身に、震えが広がつてゆく。どうにかして止めたい
とは思うが、無理。
怖くて、恐くて、「ワクテ。自分の体じゃないみたいで、震えを止
めることが出来ない。

ガチガチと歯を鳴らして俯く。体はどうぞ冷たくなつてこつてる。

そつと、頭にわっしきと同じ軽い感触がある。

「大丈夫、私が護つてみせるから」

……ああ、こんなところで震えている俺が馬鹿みたいじゃねえか。
女の子に護つてみせるから、なんて言われるのは格好悪いな。
こんなこと思つてようが体は動かないんだけどさ。震えはもう、な
い。

だから俺の頭に手を乗せて立つている少女を見上げ、精一杯強がつて言つ。

「女の子が怪我とかすんじゃねーぞ。」

少女は一瞬キヨトノ、とした顔になり

「そういうことは君が私を護れるくらい強くなつてから言って欲しいな？」

などと、邪氣を感じない綺麗な笑顔で返された。

ちくしょう、人の心配は素直に受け取れつつうの。恥ずかしいだろうが。

何でだらうな？ 彼女といえば何も恐くない。

さつきまであんなに震えてたのに、あんなに心が押し潰されそうだったのに。

彼女の言葉はストンと胸に収まる。

今、少女は俺ではなく周りの木々の影から姿を現した狼に注意を向けながら何かを呟いている。

俺の前方だけでも4匹、囲まれていることは大体その倍。たつたそれだけ。

狼の包囲網の中心に俺と少女がいる。包囲網の半径は俺の目測でおよそ8m くらい。

彼女は俺から見て正面に向かつて1歩、左足を踏み出し半身となる。脚を曲げて重心を下げる、刀を持っているかの様に両手を胸の右辺りで横に構える。

様に、と表したのは彼女が何も携えていないから。いや、携えてはいる。ただそれが、俺には見えないだけで

不可視の刃が閃く。

左へと薙いだ斬撃は空間ごと狼を2匹、真横に断ち切る。

そのまま勢いをつけ回転、俺の頭上を通りぬけに振り抜き、ひゅう
ど4分の3回転したところで止まる。

重い音が2つ。後ろから2匹迫っていたようだ。

次いで俺の左右、彼女からすれば前後から2匹同時に迫って来る。
遅れて俺の前から1匹。

だけど相手は獣。駆け引きも何も無くただ迎え撃つだけ。
同時に飛びかかって来る。

左へ1歩、彼女はずれる。それだけで獣達の挾撃は失敗に終わる。
1匹の首をすれ違いざまに斬り落とす。田の前でやるな、生々しき
ざる。

振り向きもつ1匹は着地直後に袈裟に斬る。

踊るよひご、^{よひ}舞うよひご、^{よひ}祈るよひご、^{よひ}彼女は獣を屠^{ころ}つてゆく。

「ふう」

少女は息を吐きながら見えない刀を一振り、付いた血を払っている。
気が付いたら終わっていた、としか言いようがない。
今更辺りにぶちまけられた血の臭いが鼻を突く。

「怪我は、無い？」

確かに護られている間に怪我はしていないが……

俺は何やらぼんやりしている視界で左手を見て、次いで背中からの
鈍い痛みに顔を歪める。

「お前さんの田じゅう怪我には見えないんだな、これは

左手を彼女に見やすいよう上げようとするが力が入らない。
血を流しすぎたかな……視界に霞がかかつてきた。

目の前に彼女の顔があるんだが、輪郭がはつきりしてない。

「 ょつとー 大丈 !? し かり て!」

何言つてるのか分からねえよ。いきなり真っ暗になつて何も見えないし。

死因は多量出血かねえ?

あ、お礼言つて忘れてたな……
ここから俺の記憶は、ない。

Page 1・助かつた！腹減った！

誰かが呼んでいる。

家族でも友人でもない、誰か。

何かを言っているのだけれど、それを理解することが出来ない。

「

「

男なのか女なのかも分からない誰か。

だけど俺はこの声を聞いたことがある。

いつだったか覚えていない。

俺はこの人にとって、大切なことを言われた気が

目を開けると真ん前に少女の顔があつた。

開いた窓から気持ち良い風が入ってきて、カーテンと俺の前髪を揺らす。

「くつ、くくくくつ」

笑うのを我慢しているくぐもった声が聞こえる。

すげえ恥ずかしい。

何がって、思いつきり叫んでしまったことが。

普通は怒られるだろ？が何といつか、いひ、変な叫び声でそれがツボつたらしー。

「おい、笑うなら笑え」

ベッドで上半身だけ起こして横の椅子に座っている人物をジロリと睨む。

余計に恥ずかしいだろうが。

俺の自業自得ではあるが、それでも顔を俯かせて肩を震わせている、後ろ向きのアホ毛がついた蒼い髪の少女 鈴谷 あおかわ すずたに といふらしこ に恨みがましい視線を向けるのをやめなかつた。

「はあ。じめんじめん」

ゆづやく一息ついたか。じこつ10分ぐらこ笑うのを我慢して肩を震わせてやがつた。

いつもの友人たちの誰かなら殴つてでも止めさせるけど、女の子だし、恩人もあるわけで。

結局止まるのを待つしかなかつた。

「じゃあ何から聞きたい？」

少し顔を緩ませて鈴谷が聞いてくる。やつぱつ殴つてやつつか、こここつ。

いやいや、じこちこち反応してたらこつまで経つても話が進まん。

やつだな…

「あの後、どうなったんだ?」

あの後とは俺が氣絶した後のこと。

「そつか、そこから話なきゃいけないね」

話によると、鈴谷は俺の左手にちょっとした治療をして、背負つて近くの町まで運んでくれたらし。

そのまま治癒院（？）へ直行。治療費用も立て替えてくれたとのこと。鈴谷には頭が上がる。

治療してくれた人が言うには、結構危ない状態だった、らしい。

「じゃあ何で俺生きてんだよ?」って聞くと、どうやら魔術って言うものがあるらしい。うさんくせーとか思いながら聞いてたら鈴谷に真顔で「魔術、知らないの?」とか聞かれた。割と一般的なものなんだとか。

俺が知らなかつただけでもしかしたらあつたのかもしないけど、少なくとも俺の周りで聞いたことはない。だけど鈴谷は知つて当たり前のようになつてきた。

だから、ちょっと聞いてみたんだよ。「日本、アメリカ、ヨーロッパ。どれでもいいから聞いたことがある?」って。

案の定、鈴谷は横に首を振つた。

まあ、魔術なんて単語が出た時点で覚悟はしていたけど、それでもそんな覚悟だなんて無駄に終わつた方が良かつた。

……異世界、つてやつかねえ?

多分、あの時の魔法陣みたいなのが、あつち（俺のいた所）とこつち（鈴谷がいるここ）を結ぶ門^{ゲート}みたいな物で、事故なのか意図的な

のかは分からぬけどこっちに飛ばされた、と。
推測でしかなければ大体こんな感じだろう。

「ねえ浅木君、ちょっと聞いてもいい?」

鈴谷が真面目な顔してゐる。

何だろうか?

「**昼**飯は何がいい?」

くう、と俺の腹が鳴く。タイミングいいな、俺の腹。
もつそんな時間なのか。この部屋時計が無いから分からなかつたな。
ベッドから降り窓に向かつ。

ここは2階の一室らしい。地面が少し遠い。

なるほど、窓から身を乗り出して空を見上げると、そろそろ太陽が
真上に来るような感じである。

キヨロキヨロと見回してみる。

どうやら俺が寝かされていた建物は表通りに面しているようだ。
大人が両手を広げても5、6人は並ぶことが出来そうな道が左右に
続いていて、昼だというのに少なくない人数が歩いている。

「どうしたの?」

後ろから鈴谷が声をかけてくる。

「いや、昼なのに結構人が歩いてるな、と思つてさ」

鈴谷の方へは向き直らず、外を見ながら言葉を返す。

向かいの店の看板らしきものを見ると漢字でただ一文字“漢”と書

いてあつた。

建物の外觀を見ると真つ白な壁に“漢”とでかでかと書いてあるだけだつた。

……何の店なんだろうな、あれ。

「ここの通りは結構何でもそろつてるからね。お昼時ならレストラン目当ての人たちじやないかな？」

へえ、そうなのか。

でも向かいの店はレストランって雰囲氣じや あないよな。
すげえ氣になる……。

「ちなみに向かいは今人氣のレストランだよ？ 行つてみる？」

マジかよ！？

そこもレストランなの！？

しかも人氣があるの！？

好奇心は猫をも殺す、といふ諺じことわざもあるが、人間好奇心には勝てない
のだよ。

「昼飯はそこがいい

いいよー、と鈴谷の返事。
どんな店なんだろうな？

この時はまだ、俺に降りかかる災難を知るよしもなかつた……。

Page 1・助かった！腹減った！（後書き）

更新速度が遅くてすみません。

1週間に1度出来れば良い方なのでじつは承下さい。

Page2・恐怖のレストラン“漢”！

俺たち一人はピクピクと指先を動かすことしか出来なかつた。

「大丈夫？ おしほり持つてきたわよお？」

従業員の1人が声をかけてくる。

その気持ちは嬉しいが、あんたも今は恐怖の対象なんだよ……。

従業員はおしほりをテーブルに置き、厨房へ戻つて行く。

いや、うん。

確かに俺が行こうとは言つたよ。

好奇心に負けた俺が悪いのも分かつて。

でも鈴谷、先にこここの店の特徴を言つておいて欲しかつた……。

「あらん？ 御注文はお決まりいん？」

「いらっしゃいませえん。何名様かしらん？」

「またのじ利用、お待ちしてますわん」

この店、従業員が全員オカマだった。
少しだけ時を遡るさかのぼる

「あつはつはつはつはー！」

女性の笑い声が店内に響き渡る。

俺の右隣で大笑いしてるのは俺たちがいるレストラン“漢”の店長、フレアさん。

日本人でも有り得ない様な真直ぐ腰まで伸びた綺麗な黒髪とツリ目がちの黒目、火が付いていない煙草を咥えているのがトレーディングの美人さんである。

ちなみに服装は紺のジーンズと黒い長袖のシャツ、その上に漢と書かれたエプロンをつけている。

で、なんで大笑いしているかというと俺たちの状態が原因だらう。

「あの、笑つてないで助けてよ……」

鈴谷が消え入るような声でフレアさんに助けを求めているが効果はない。

何というか、今の俺たちを表す言葉は一つしかない。

オカマに埋もれている。

2人や3人ではなく総勢12人のオカマに顔や体を触られている。少し見方を変えればただの変態集団である。

「結構いい体してるわねえ、ボウヤ」

「でも私たちのカラダの方がすごいわよん？」

「いJの子になら私は捧げてもいいわねえん……」

周りのオカマたちが何か言っている。

なんというか、普通に狙われていた。

つーか体を触るな捧げるとか言つた田の前で服を脱ぐんじゃない！

最初はよかつた。

鈴谷とこの店長、フレアさんは知り合いでたらしく、店に入つて顔を合わせた時には久しぶりー、みたいな会話をしていた。で、そこから急展開。フレアさんが近くにいた従業員に鈴谷の碎せがれが来たぞ、などと言つたらいつの間にか店の一番奥の席に座らされもみくちやにされ、さきほどの会話がなされ、畳頭に至る。短い説明だとは思つが実際こんな感じだつた。

「あー、悪かつたね。」

ぐつたりとした俺たちにフレアさんが声をかけてくる。

昼飯食いに来たのに、何も食わずに疲れ果てるつてどひこひことだよ……。

少しだけ体を起こす。

俺の前で突つ伏している鈴谷は最早体を起こす気力も無いのだろうか、右手だけふらふらと何かを探すようにテーブルの上をめまとい。

下手したらトラウマになるよな、あれは。

とりあえず田の前でふらふらといつとおしい鈴谷の右手に、先ほど持つて来てもらつたおしゃぶりを投げつけむ。

キヤツチ、そして俺の顔面にリリース。

べしゃり、とテーブルへおしほりが落ちる。

……元氣あるじやねえか。

「ふーちゃん、誰あの人たち……」

少しだけ顔を上げて鈴谷が尋ねる。

ていうかふーちゃんって……フレアの“ふ”だけ取ったのか。
なんて安直な。

「あいつらは全員元傭兵でね、あんたの父親を目標にしていた奴ら
や」

ふーん、傭兵ねえ。

まあ森にあんな凶暴な動物もいるから必要なんだろうな。
でも、あの人たちに守られたくないな……。

オカマたちにもみくちゃにされている時に聞いたが、鈴谷の親父さ
んは傭兵や魔術師の間では結構有名な人なんだとか。

ちらり、と店内を見回す。

人気があるというのは本当のようだ、オカマたちがせわしなく店内
を行ったり来たりしている。

「綺麗な魔力だと思つたら傭兵さんだったのか……」

綺麗な魔力？

カラダハキレイデシタヨ？

……つは！危ねえ、変な世界に連れて行かれたところだった。
変な妄想を消すために鈴谷に向かつて問い合わせてみる。

「なあ、魔力に綺麗とか汚いとかあるのか？」

そもそも魔力って見えるもんなのか？

「ん？ 少年は魔術師じゃがないのか？」

問い合わせた鈴谷ではなくフレアさんから言葉を返される。
声がした方を見るといつの間にかフレアさんの背後に田を見開いた
オカマたちが集まっている。

お前ら仕事はどうした。

「あー、そつか。浅木君は魔術知らないんだっけ」

よつやく体を起こした鈴谷が言つてくる。
まあ、そんなもんが無い世界にいたしな……。

「……」

フレアさんは膝を組んで右手をアゴに当てる何やら考え込んでいる。
美人はこういう姿も絵になるな。

「軽く説明するね？ 綺麗、汚いっていうより澄んでる、濁つて
いるって言つたほうが表現的には合つてるかな」

鈴谷はどこから取り出したのか、ペンで紙に魔力、と書いている。
あんまり変わらん氣もするけど軽く頷いておく。

「それでね、これはまだちゃんと解明されてないんだけど魔力って
いうのは循環するんだよ。人の体でも、動物の体でも、世界という

大きなくぐりになつても。人は循環させる過程で自分たちが扱いや
すいように無意識に魔力を変換させちゃう

悪いことじやないんだけどね、と言いながら鈴谷は紙に世界という円と、その中に木と人と犬？の絵を描き、魔力が循環しているよう外側から内側へ、内側から外側へと矢印をつける。

「簡単に言えば魔力つていう透明な水に自分の色の絵の具を足すんだけど、魔力の制御つていうか、扱いが下手だと体の内から外に出すときに濁つた感じで出て来るんだよ。だから澄んだ色を纏つていふ人はちゃんと修練を積んだ人が大半で、ここの人たちは修練は欠かさなかつただろうから、澄んだ、綺麗な色の魔力を纏つてる」

命に関わるからね、と最後に付け加え鈴谷はペンを置いて肩をくめた。

途中までちゃんと説明に使われていた紙は、今はただの落書き用紙になっていた。

「要するに濁り具合で真面目に修練してるか分かつて、ここの人たちは澄んだ魔力を纏つているからちゃんとした実力を持つている人たちってことか」

「ん、まあ眞面目に修練しても壊滅的に才能が無い人とかは濁つたままだつたりするけどそれは例外だし、相手の実力を計る目安にはなるよ」

「へえ、あのオカマたちは実力者で澄んだ色を纏つていい、ねえ……。一瞬、カラフルなオカマたちを想像してしまいテープルに伏せて悶絶する。

くう、と俺たちの腹から音が聞こえる。

そういえばまだ何も食べてないんだったな。俺は注文するためにフーレアちゃんに向き直つて口を開けようとした

「少年、何あんたは『リリ』いるんだい？」

有無を言わせない声音で問いかけてくる。

Page 3・きっかけと決意

空気が張り詰めている。

それは俺の隣にいるフレアさんからの重圧が原因。プレッシャー

なんで俺がここにいるのか、ねえ？

そんなもんこつちが知りたいわ。

鋭い視線に気圧されるが、負けじと睨み返す。

「ここは魔術師のための町でね、周囲の森の入り口に結界が張つてあつて、魔術師しか通れないよつになつていてるんだ」

要するに魔術師ではないと言つた俺がここにいるのはおかしい、と。関係ない人を拒む結界ね、魔術って便利だな。

俺だったら部屋の入り口に張つておくね、主に家族が勝手に入らないうように。

「蒼、あんたも分かつてたんだろう？ 何で連れて来たの？」

む？

そうだ、鈴谷は分かつて一緒にいたんだよな。

何でだ？

「……放つておけなかつた」

「なんだつて？」

「放つておけなかつたんだよ！ 森にいたから魔術師だと思つてたらベアウルフに襲われて逃げ回つてるし、そのまま殺されそうにな

つちやうし！ そりゃあ怪しいとも思つたさー。 だけど！ そんなことよりも田の前で人が死ぬのは嫌だし、 もつ友達だもん、 見捨てられないよ……」

叫び、 そして消え入るようにながめながらフレアさんを見据えていた。

目の端に少しだけ涙を浮かべながらフレアさんを見据えていた。

まあ、 な。

死なれるのは恐い。

ただ、 鈴谷の定義が人より少し広いだけの話だ。

知り合つて間もない俺を友と呼ぶのだからどれほどお人好しなのかとも思うが、 その言葉は今の俺にとつては嬉しいものだ。

だから

「ありがとう鈴谷、 もうこいよ」

俺がここにいなければいいだけの話。

わざわざ命の恩人の立場を悪くしてまでここによつとは思わん。

「簡単に引き下がるんだね」

「鈴谷に迷惑を掛けたくないんでね」

即答して立ち上がる。

それにここで説明しようにも俺自身、 どうせつけてここに来たのか知つてゐる訳じやないから納得のいく説明なんて出来ないしさで、 他の所に行くにしたつて森の中を通らなきゃいけないんだよな……。

「なあ、誰か近くの町まで連れて行ってくれないか?」

フレアさんとオカマたちを見る。

この際オカマのうちの誰かでもいいから一緒に来てくれ。俺一人じゃ道が分からないうえに確実に死ぬだらうからな。

「……いいわ。うちの「私が一緒に行くよ」蒼!-?」

鈴谷も立ち上がっていた。

なんでそこでお前が出てくるんだよ!-

お前に迷惑掛けたくないから行くのに!-

俺がこの空氣に耐えられないってのもあるけど!-

「ちゅうじ良かつたんだよ。私もそろそろこの町から出るつもりだ
つたし!」

「……暁さんを探しに行くの?」

?

アキラって誰だ?

「それもあるけど、夢があるからね」

行こう、と顔をかけてさつと正面を出ようとする鈴谷。
慌てて追いかける。

後ろから呼び止められたので、上半身を捻つて見ると、フレアさんがこつちに緩く何かを投げていた。

「待ちな少年」

片手で受け止めるトジャラリ、と音がする。
多分、お金が入った袋。

「密に対しても何もしてやれなかつたからね。少しだけど持つて行きな」

俺には価値は分からぬがオカマたちがフレアちゃんに何か言つてゐる
から、結構なもんなんだろう。
フレアさんにおちやんと向き直り、深く頭を下げてから既に行つてしまつた鈴谷を追う。

「蒼を頼むよ」

店から出る時に小さくだけビ、確かに聞こえた。

店の前で鈴谷は待つていてくれた。

「遅いよ、浅木君」

鈴谷は笑いながら言つてくる。

朝俺たちがいた、向かいの家に歩き出す。

10秒ほどで玄関に着き、家に上がる。

「なあ、本当にいいのか?」

付いて来てくれるるのは嬉しいが、俺の為にこいつを引っ張りまわすことはしたくない。

「いいんだよ。本音を言えば何かきつかけが無ければずっとここにいたかも知れないから」

私は君を利用しているのと一緒に、などと付け足して言うが利用されているだなんて思えないし、思わない。
荷物持つてくるから待つて、と鈴谷は2階へと上がりしていく。
持つてくるつてことは一応準備はしてたんだな。上で物音がしている。

旅に出るようなもんだからな……。

あ、そういうえば。

「アキラって誰なんだ？」

大きな鞄を持って降りてきた鈴谷に聞く。
夢も聞いてみたいが今は後でいいや。

さて、アキラね。名前からして男だよな。
彼氏か、彼氏なのか！？
お父さん許しませんよ！？
どこの馬の骨とも知れない奴につちの娘はやれません！

馬鹿なことを考えてるとほ思いつつ言葉を待つ。

「ああ、私のお父さんだよ」

調子に乗つて申し訳ありませんでした。
マズイ、土下座したいくらい恥ずかしい。

何がお父さん許しませんよ、だ。相手はそのものじゃねえか。

「私が小さい頃に出かけたまま帰つてこないんだよ」

「……」

重いな……。

鈴谷は笑つてゐる。

なんでこいつは笑つてられるんだ?

「大体考へてゐることは分かるけどね、ふーちゃんとか優しかったから寂しくもなかつたんだよ」

「あ、フレアさんといえば」

先ほど投げ渡された物を鈴谷に渡す。

「少ないけど持つて行けッセ」

「……！」

驚いているから、やつぱり結構な額だと思ひ。

俺に頼む、つて言つたぐらいだからな。よつぱり心配してゐるんだうつ。

旅立つ子を見守る親、じやけよつと失礼だから旅立つ妹を見守る姉といったところかな。

「ふーちゃん、ありがとう……」

さて、感動的な場面なんだが何も食べてないんだな。

だから人の生理現象なんだから仕方ない訳であつて。

ぐうう、と大きな音が俺の腹から響く。

顔が熱い。きっと俺の顔は真っ赤であろう。

恐る恐る鈴谷を見ると、向こうも顔を真っ赤にしてこちらを見ていた。

ブルータス、お前もか。

「つふ、あははは」

「くつ、くくくく

耐えられずに俺たちは笑い出す。

「何か食べて、それから出発かな」

「ああ、よろしく」

どんな旅になるかは分からないけど、少なくともここつが一緒になら
退屈なんてなさそうだ。

「むむむむむ、む~?」

匂過ぎとこいつともあつて、明るい森の中歩きながら唸る俺。
それを3歩ほど先から変な田で見る鈴谷。

集中集中。

俺がまだ理解しえないものが右手の掌に集まつて行くイメージ。
……來た!

「へつやあああー」

『氣合』と共に右手を前に突き出すが別に何も起こらなかつた。

「はあ……」

おこ、溜息を吐くんじゃない。悲しくなるだらつが。

町を出てから20分後の出来事である。

さて、何をしているかは少しだけ時間を遡つて説明しよう。

鈴谷と俺は適当に作ったサンドイッチを食べて、町の外へ出た。

町の外に出る為に鈴谷は少し着替えていたが、白いポロシャツのよ
うなものと膝上5センチ程度の青いスカートだつた。
本人曰くスパッツを穿いているからスカートでいい、だそうだ。

どのくらい掛かるのか聞いてみたところ森を出るのに30分、そこ
から近くの町まで行くのに30分。合計1時間。
流石にそんな時間を無駄にはしたくないから田下、一番気になつて
いることを聞いてみた。

「なあ、俺も魔術を使えるよ!になれないかな?」

「ん~? なんで急に?」

ひょい、とそれほど高くない段差を飛び降りて言葉を返していく。
俺も鈴谷に続くが着地音が明らかに重い。

急つて訳じやない。言つタaimingが無かつただけで、この世界に
魔術があると理解した時に本当は聞きたかった。
自分の身を守るためにもあるけど、もつと馬鹿らしい理由。
だってカッコいいじゃないか、魔術師だなんて。

「まあ、ずっとお前に守られてるのも気が引けるし、何よりも格好
悪いしな」

本音は言わずに当たり障りのないことを言つておく。
くるり、と振り返つてくる。
そんなことをしたら危ないぞ。

「うん、確かに私もそんなに強い訳じやないからさよりどこいかも
ね」

お？

「じゃあ……」

「使えるかどうかは努力（と才能）次第だけど私の知っていることは教えてあげる」

ガツツポーズ。

よっしゃ！

なんかボソッと言つてた気もするけど無視！

「じゃあ軽く説明するね」

「頼むよ」

軽く伸びをしながら鈴谷は俺の一歩前を歩く。木の根が張り出したりもしているが軽く飛び越えて行つてゐる。

「ん~、基礎から説明しなきゃいけないんだから……。そうだね。魔術には“属性”があつてね、1人1人属性は違うんだけど大切なのは『自分の属性以外は例外を除いてほとんど使えない』ってこと

どんなものでも使えるわけじゃないのか。

合体魔術！とかやつてみたかったのに。残念だ。

説明をしながらでも鈴谷の速度は落ちることなく森の中を歩いて行く。

「色の話をしたときに『自分の色』って言つたでしょ？あれはち

やんと言つと自分の属性の色なんだよ。」

「属性の色?」

あれか、炎は赤とかそんな感じか?

「うん、例えばふーちゃん。ふーちゃんは純粹な“火”の属性だから真つ赤なんだよ」

「純粹な、つてのは?」

「ああ、ごめん。別に属性は1人1つって決まってる訳じゃなくて、3つくらいまでなら結構ありえるんだよ。それで、2つ以上属性を持つてる人のことを総称して“ヴァリアアル”。古代の言葉で“様々”って意味。それに対して1つだけの人は“ゼヌイン”。“純粹な”って意味なんだ。でもこれは総称だから1人に對しては純粹な1、とかって言うだけ」

これは別に覚えなくていいよ、と付け足される。

3つまでなら普通にあるのか!

夢の合体魔術の可能性が再浮上!?

階段状になつていてるところを軽々登つていぐ。俺は無理。

「ちなみに鈴谷は?」

息を整えながら聞いてみる。

こいつが2つ以上持つてたら合体魔術出来るのか聞いてみたいし。

「……」

……」いつ、指折つて数えてやがる。

「色は虹、つていうか、なんかよく分からなくて、属性は今のところ、8つ、かな？」

おい。

お前3つくらい今までが普通つて言つてたじゃねえか。
倍以上あるお前はいつたい何なんだ。

しかも今のところとか言いやがった。それ以上増やすつもりか。
才能のない人たちに分けてやれ。

いろんなことを考えてはいるが殆ど逆恨みのよつなものだ。

「いや、私もおかしいとは思つし、実際大変なんだよ?」

天才様がなんか言つてやがるよ!」んちくしきつ。
溜息なんぞ吐いてやがる。幸せが逃げるぞ。

「ねえ、浅木君。例えばホースを使つて水を撒くときに出す所が広
いのと、狭いの。どっちが遠くまで飛ぶ?」

ん?

どっちがって。

「そりや、狭い方だな」

家の庭でよく遊んだよ。

こつちにホースがあることに驚いたけど。

「そうでしょ? 私が持つてるのは全部広い奴で、狭いのを持つて

る人と力比べすると絶対に負けるんだよね」

あー、器用貧乏なのか。そりや辛いわな。
ゲームとかでも火力が足らなきや長期戦になつてそのままズルズルと負けたりするし。
ん?

でもゲームだと基本的にそいつ奴は後のほうになるといきなり強くなつたり……。

最終的には究極の器用貧乏で最強ですね。

「やつぱり卑怯じやねえか!」

「えええ!?」

とりあえず行き場のない俺の憤りを叫ぶ」とて発散させておく。
あ、話すれた。

「それは別にいいや。2つの魔術を合体! とか出来ないの?」

別にいいとか言われた、などといじけているが無視。

俺の質問の方が大事です。よつてそいつさと詳細をフリーズ。

「魔術を合わせることは……出来ないことはない、くらいかな。聞いたことはあるけど実際に使つてる人は私の周りにはいなかつたし」

そういうふう忘れてたよ、などと思ひ出すよつて言つてはいる。
一応出来るのか。いや、俺が2つ以上属性無いと意味無いんだけど
や。

「で、じゃあ俺はいくつ持つてて何の属性なんだ?」

「……」

「おい、なんだその遂にその話にならなかったか、みたいな顔は。田を逸らすな」ひびを見ろ溜息なんぞ吐くんじやない！」

「……分からなー」

「は？」

なんて言つた、こいつ。

「だーかーら！ 分からないの！ 魔力があることは確かなんだけど色が見えないんだよ！ こんなことは初めてだし全く検討もつかないのー！」

O h - s h i c h t !

神様はどんなだけ俺のことが嫌いなんだよ！ 別に信じてないけど。

「じゃあ俺はどうすればいいんだよ？」

「とつあえず初歩の初歩からやつてもううよ。一通りやつて何も変化が無かつたら町で調べてみよう

はあ、俺の魔術師への道のりは酷く困難なものなようだ。

以上、回想終了つと。

で、今俺がやつてるのは鈴谷が言つてた初歩の初歩、自分の中にある魔力を感じること。

「氣合で！　なんて言われた。

かのことを歐洲でやるのも思つた」「とにかくは教えてもう一回だし何より1人1人感覚が違うそうなので手探りでやるしかないらしい。

卷之三

変化無し。

「いや、さっきから掛け声変わってるだけじゃん」

鈴谷から冷静なツッコミが入るが気にしたら負けなので無視。しかし、かれこれ50回はやつてるとと思うんだけど何も変化がないってどうしたことだよ。

叱ひすきて喉か痛い——の

「もしかして壊滅的に才能が無いのかなあ」

前から何か聞こえる。

つーかおい、人がせつかく考えないようにしてた事をそんなに簡単
に言うんじゃない！

「おこ、鈴た」「しつ！」……？

文句を言つてやれりと口を開いたらいきなり片手で制された。

何なんだよ？

「小さくだけど、遠吠えが聞こえる。急いで」

そう言つて少しだけ鈴谷はスピードを上げる。

俺には全く聞こえなかつたけど鈴谷が言つなら間違いないのだろう。あの時の恐怖を思い出し、そりやマズイ、と鈴谷を追つて少し駆け足になる。

「これくらいの速さなら多分追いつかれないから、少し落ち着いて

半歩前を行く鈴谷に声を掛けられる。

そんなに焦つてたか？ 俺。

汗が目に入りそうだつたから手で拭^{ぬぐ}うと、結構ベッタリと手に付いてくる。

どうやら自分の状態が分からぬいぐらいには恐怖で頭が麻痺していらっしゃい。

「仕方なことは思つけど、もう少し心を鍛えたほうがいいかもね

いい案だとでも言わんばかりに楽しそうに笑つている。

俺が馬鹿みたいじゃないか。

大きく深呼吸して、むせる。

少し疲れてて、しかも遅くない速さで歩いてるんだから当たり前だよな。

大丈夫？ と声を掛けてくるが問題ない、さつきよりかは落ち着いている。
心ねえ。

恐いもんは恐いが、それに立ち向かうだけの勇気を持つてことか
ね。

どつかのマンガであつたけど『大切なのは1歩を踏み出す小さな勇
氣』だけ？

……無かつたかなあ？

まあ、今の俺に必要なのは正にそれだろ？

1歩というのが具体的にどういうものなのか分からぬけど、分か
らないなりに進んで行くしかないだろう。

俺にもはつきりと聞こえるほどの遠吠え。

「やばつ、見つかった！？ 走るよー。って早つ！？」

言うと同時に鈴谷は駆け出す。

俺は遠吠えに反応して言われる前に走っていたけどな！
つーか見つかるの早いな！ もうきからそんなに時間は経つてない
ぞ！？

「じめん！ 多分警戒網に引っかかった！」

頼むぜ、お前さんが頼りなんだから。

所々にある段差を全力で飛び越えて速度を落とさないよう走り、
鈴谷について行く。

うん、2・3秒で抜かされたよ。

あんまり運動していない割には足は速いほうだったんだけどな。

「全力で走つて大丈夫なの！？ まだ少しあるよー！？」

真横から少し大きめな声で言つてくる。

ふと言われて気付いたけど、疲労感つてこののはあまり感じてない。

だけど、俺より速く走ってるお前に言われたくはないわ。

「大丈夫だ、それほど疲れてない」

とりあえず返事はしておく。

俺、体力無かつたんだけどなあ。

「じゃあとりあえず森から出るよー!?」

「わかった

横目で見ると鈴谷は腰の小さなポーチから何やら小さな石を取り出して右手に收めている。

前はもう森の出口のようで、森の外は光で見えなくなっている。

『集え、赤き炎。我が敵を貫け!』

眩しい光に包まれるように飛び出して、後ろに振り向く。

殆ど同時に4匹飛び掛かってきているが、鈴谷は向かえ打つように右手を突き出す。

『^{イグニス・ジャベリン}
業火の槍!-!』

刹那、10数本の燃え盛る細身の槍が飛び掛つてきていた狼たちに突き刺さり、その体を燃やしていく。

これで弱いのかよ、と思うほどの火力で燃えている。

炎に巻かれ、重い音をたてて地に伏していく狼たち。生きた肉が焼ける特有の臭いがするが我慢する。

「すげえな

灰も残らずに燃え尽きてしまった。

この世に生きていた証拠はもう無いのだ。

こんな物騒なもんをそちらの奴がポンポン使つてのは結構恐いな。
気分を変える為に、これから行くであろう道を見てみる。

どうやらこの森は小高い丘の上にあるみたいで、少しだけ下つていく
様な道である。

「ん……、悪いね」

小さく声が聞こえたのでそれを見回すと、鈴谷は両手を胸の前で組
んでいた。

……少し優しかった気もあるナビ、これがこいつの善い所なのだろ
う。

俺は鈴谷に会わせるなり、一歩後ろで形だけでも同じように両手
を組んで祈った。

12 / 28 蒼香の魔術の数について修正

「なあ、あれで威力が低いのか?」

先ほどの炎の槍を見て疑問に思ったことだ。

こいつは自分の魔術の威力は低いって言っていたけど、あれはそんな生易しいもんではなかつた。

風で飛んだだけかもしれないけど最終的には灰も残らなかつたし。

「ああ、あれは威力を高める道具を使つたんだよ」

そう言って、森で取り出していた石を見せてくる。

手の平に収まるほどひの透明で綺麗な石で、それ自体が淡く輝いているように見える。

しかしまあ、そんな道具があるのか。

「ここのチート野郎!」

「意味は分からぬけど何か馬鹿にされてる氣がするよ

そんな、森を出た後のやり取り。

それからこゝれといつてハプニングは今のところは無い。

周りは見通しの良い緑の丘で、街道沿いに歩いて行くだけである。所々に小さな村の様な集落があつたがそこにも寄らず、ひたすら魔術の練習をしながら歩いて行くのだが、つまらん。

いや、練習がつまらない訳じゃない、継続は力なりつてどこの偉

い人も言つてたし何より地道な作業は嫌いじゃない。

ただ全く魔術が使える予兆も何もなく、頼みの綱は時折こいつを見
て笑うだけ。愚痴の一つや二つ言つたくもなるひつひつ。

「あ、忘れてた」

目線だけ鈴谷に向ける。

何だよ、こいつちは忙しいんだ。

それともようやく何かコツでも教えてくれるのか？ などと思つた
が違つたり。

「いや、直接的な魔術のことじやないんだけどね？」
町に着いたら
つて言つた、まあ、名前で呼ぶようにしてね？」

「……なんか理由があんのか？」

いや、だつてねえ。いきなり名前で呼べ、だなんて言われても訳が
わからんよ。

「魔術には他人を呪うようなものもあるから、フルネームだとそう
いったものの対象になりやすいし、呪いの効果も完全なものになつ
たりするんだよ。だからフルネームで自己紹介する時は相手のこと
を信頼してる時が普通なんだよ」

ふーちゃんも本当はもつと長い名前なんだよ、と言つてくれる。
呪いか。やっぱりどこの世界にもあるもんなんだな。
そりでふと思つて至る。

……待て、俺とお前は普通にフルネームで自己紹介してたじやねえ
か。

「ちなみにヨーキは信頼出来ると思つて召乗つたからー。」

ピースしながらそんなことを言つんぢやない、レーチが恥ずかしいつつうの。

しかもいきなり呼び捨てかよ。

顔赤くなつてないよな、と手を当てて確かめてみると、案の定風邪でも引いたかのように熱い。

こいつのその信頼の基準はどこから来てるんだひつな、などと思いつつも歩みは止めずにむしろスピードを上げる。
いや、だつてこんな（恐らく赤くなつているであらう）顔を見られたら恥ずかしいし。

ええいっ！ 気を紛らわせるために練習だつ！

「あ、ほら。名前で呼ぶ練習もしておいてよー 呪いつて結構厄介なんだから」

え？

首をゆつくりと、いつの間にか横に並んでいた鈴谷に向ける。

俺も、お前を、名前で？

目線で訴えかける。

名前、ちゃんと、呼んでね？

微笑を返してくれる。

アイコンタクト成功！ 全く嬉しくねえ！

いや、鈴谷の返事は俺の勝手な想像だけだ、大体合ひ切ると思つ。

「何せ、ちよつと『蒼香』って呼べばいいだけの話でしょ！」

俺が呼ぼうとしてないのが分かった途端に頬を膨らませている。
子供か、お前は。

「そのちょっとが難しいんだよ……」

はあ、と溜息一つ。

女子を名前で呼ぶだなんて女友達がいなかつた俺にはハードルが高
すぎるんですよ、鈴谷さん。

……友達、か。あいつら元気かな？

父さんと母さん、姉貴も心配してるかな？

……姉貴は何も言わずにぶん殴つてくるだろ？

もつと小さい時に家出をして、帰ってきたときに父親でも母親でも
なく、姉貴に殴られたことがあつたな。

元の世界のことを考えてしまつ。
あそこにいた時はつまらないと思つていたものがこんなにも貴いも
のだとは思つてもいなかつた。

「ま、考へてもしょうがないか」

せつかく來たんだ、何かを成してから帰らうじゃないか。

前向きに前向きに、つと。

「で、私の名前は？」

「人がせつかく上手く纏めようとしてんだからちつたあ空氣を読め
よー」

思いつきり叫んで返してやる。

うまく逃げたと思ったんだが、駄目だったか。

「そもそも何で苗字じゃ駄目なんだよ？」

鈴谷つて呼べばいいじゃねえか。

別にフルネームが分からなければいいんだし、俺が呼びやすいし、
一石二鳥じゃん。

「え？ 名前の方がパートナーっぽいじゃん、なんとなく」

「いつの間に俺とお前はパートナーになったんだよー？ 初耳だよ
そんなことー」

「さっきから叫んでばかりで喉が痛い。

鈴谷はこちらを不思議そうに見ているが、俺は鈴谷の思考回路が不
思議でしようがない。

ああ、そっか。と鈴谷はどこか納得したような表情になる。

「『めん』めん、言つの忘れてたよ。私の夢はね、自分の旅団を作
ることなの。でも2人以上じゃないと作れないから今まで出来な
かったんだけど、今はヨーキがいるからね。ヨーキはよく考えごと
してから探し物とかだと思うんだけど、それだったら旅団が有名
になれば見つけやすくなるし」

それに行く当ても無いでしょ？と、言われる。

まあ確かに行く当てもない、頼れる人っていうか知ってる人がこい
つとフレアさんくらいだし、ついでに言えば金も無い。

更にこの世界には魔物もいる。対抗する手段も無い。

無い無い尽くしの俺に最初から選択肢なんぞも無いわけであって。

「はあ、分かつたよ。よひしへ、蒼香」

「うんー。」

満面の笑顔と一緒に返される。

正面に小さくだけど町が見えてきた。

蒼香は今は前だけを見ている。

まあ、取りあえずしばらくは厄介になるとしますかね。

「結構『テカイ町なんだな』

誰とも無く独り呟いてみる。

そう、独りでだ。

結論から言おうか。

迷子だ。

「ルリは町のどこの辺なんだかな」

俺の言葉は店の呼び込みの声に書き消され、誰の耳に入ることはない。

太陽がまだ真上にある、と言つていい時間に町に入ったのだが、5分くらいしてはぐれてしまった。

それというのも俺が見たことのないものに目を奪われあっちへフラフラン、こっちへフラフランと彷徨さまよつっていたからなんだが。

今俺がいるのは狭くも広くもないが、それなりに人通りの多い道の端。

そこでポツンと立つて鈴谷、じゃなくて蒼香を探しているのだが一向に見つからない。

前を老若男女様々の人たちが通っているのをよく観察してみると、やはり3メートル程の馬鹿でかいおっさんや、1メートルもないよ

うな老人もいるが、ここは異世界。気にしたら負けだらう。

「よう兄ちゃん、うちの商品見ていいてくれねえか！？ 珍しいもんばかりだぜ！？」

ずっと同じところに立っている俺に、座っているガタイのいい、上半身裸のひげを生やした露天のおっさんが大きな声をかけてくる。

「おっさん、俺金が無いんだよ」

町に入るときに蒼香から少しだけ貰つたが、これでどのくらいの物が買えるのかは分からないので無難に答えておく。

「金が無い！？ なに、気にするな！ 見るだけだつたら無料だからなあ！」

正面に向かい合つて言葉を返すがおおよそ商人のものとは思えない返事が返ってきた。

このおっさんいい人だ。

遠慮なくシートの上に並べられた物とおっさんの後ろにある刀剣類を見てみる。

イヤリングやネックレスの様な小物、ちょっとしたナイフ、大振りの剣、怪しげなピン、何に使うのか分からない変な形の置物など多種多様なものが雑然と置かれている。

手に取つて見てもいいとのことなので取りあえずナイフに手を伸ばす。

所々に装飾があるがそれほど華美なものではなく、素人目だがまとった感じがする。

刃渡りは大体20センチ程度、明らかに殺傷を目的としたもの。

「お、それか？ それは魔術師が鍛えたナイフで壊べらるいならパテルのようごに切れるつてもんよー。」

それなりに値も張るがな！と笑っている。

パテルってのは分からぬけど言い回しからしてバターみたいなんだろう。

こんなナイフでそんなことが出来るのか。魔術ってのはつべづくすげえな。

ナイフを元の位置に戻して他の物を見る。

「おひさん、これは？」

黒い石がはめ込まれている小さなイヤリングを手に持つ。

「おひ、それはオブティアンのイヤリングだな！ 簡単に言えば魔除けだ！」

「これは？」

「それはずりのウロコだ！ ヒツヒツでもそんなちつぽけなもんじゃただの装飾品だなー！」

「これは？」

「そりゃただの置物だあ！ 家にでも飾つておけー！」

あー、楽しかった。

結構な時間おっさんと話していた気がする。その証拠に太陽が少し傾いている。

もう説明してもうつてないものは無いな、と商品を見ていたおっさんが話しかけてくる。

「兄ちゃん、何か珍しいもん持つてんだつたら物次第で交換してやつてもいいぜ？」

「いや、生憎連れから貰つたわざかな金くらこしか」

金で思い出した。

ズボンのポケットから財布を取り出して中を確かめる。
結構持つてゐるな。

数枚の小銭を取り出しておっさんに見せるよつとする。

「なあ、これほどくらこの価値があるかな？ 金ばつかなんだ
けどさ」

「おお？」

俺の手から小銭を取つていつて目を眞のようにして見ておっさん。
確かに青銅とかで出来ていた筈だから、少しあは価値があるんじゃない
か？

ここでの金属の価値なんて分からぬけれど、それでも換金すれば
少しは足しになると思つ。

おっさんは一通り見てから正面に向かう。

「結構いいもん持つてんじゃねえか！ ちょっとじばかし量が少ねえが、まあいい！ かけてやるよー 何かひとつ持つてけ！」

「いいのかー？」

頷いてくれるおっさん。

驚いた。

せいぜいこっちの小銭で数枚返つてくれる位だと想っていたのに、まさかそこまでしてくれるとは。

それにも関わらず、か。

今の俺に必要なものを考えてみる。

……有りすぎて泣けてくるな。

優先順位の高いものはやっぱり身を守るために物だろ。となると

「これ、かな？」

「……兄ちゃん、そりゃ俺は嬉しいが流石に密にそんなもの持たせられねえよ」

俺が持つたのは刀身が80センチほどの剣。大体1キロくらいの重量で俺でもまだ振り回すことが出来る。ブロードソードと言えばいいのだろうか。装飾品もなく簡素な造りの幅広の剣である。

うん、こいつが一番手に馴染む。

「おっさん、俺はこれがいいんだよ」

「でもよ……」

おっさんが出るのね、これはおっさんが造った剣だからである。

このおっさんも魔術師で、傭兵業もやっているのだが鍛冶屋が夢だ

そこで簡易な工房でこんな剣や盾を造っているらしい。

おっさんの後ろに並んでいる刀剣類も全部造ったものだとか。

いやはや、格好いいね。

夢の為に傭兵になつたとか、最高の武器を造るんだとか、そういう話を聞かせてくれるおっさんは子供のよつだつた。

「ここつらも使つてやらなきゃただ朽ちていくだけだぜ？」

「……」

いや、おっさんが渋る氣持ちはよく分かるけど、これが一番使いやすそうなんだからくなきや困る。

俺が何も言わずに待つていると、遂に諦めたのか溜息を吐く。

「わかったよ。だがそれだけじゃ兄ちゃんに申し訳ねえからな、こいつも持つてけ」

そう言って、懐から小さな箱を取り出して俺に渡してくれる。
開けてみると中には指輪がひとつ入っている。

これは……？

「魔力を高めるミスリル銀で出来ている。俺が作った物の中では最高のもんだ」

「ミスリル……ってあのゲームとかで希少価値の高い？」

「こやいぢこやー、流石にそんな物を貰うわけにはいかないよー。」

「いや、それじゃあ俺の気が済まねえんだ！ 持って行ってくれー！」

お互に譲り合わず、時間だけが過ぎていく

「何してんの、ユーキ？」

かと思つたらそうでもなかつた。

蒼香が二つの間にか横に立つて呆れた様な田ドレから見ていく。
ちゅうじ良かつた。

「なあ蒼香、これくらいのミスリルってビのへりの値段にならぬ？」

そう言つて箱に入れたままの指輪を蒼香が見やすこよつて差し出す。

「ミスリル？ ……」この大きさなり小さな家位は買えるよ。」

「ちゅう、おっさん！ やっぱり受け取れないって…」

「こんなんで家が買えるのかよ！？」

おっさんに返そうとするが受け取つてくれない。

そつぽいたつて可愛くねえつーのー

「で、一体何なの？」

「いや、実はな……」

蒼香に大体のあらましを説明。
終わったところで蒼香は一言

「いじやん、貰いなよ

「いや、だつてこんな高価なもんを貰つわけには」

「それはこの人に対して失礼だよ。貰つてくれつて言つてるんだから素直に貰つておきな」

確かにそつなんだけじな……。

おつさんの前に立つて、改めて問う。

「本当にここのか?」

「ああ。兄ちやんは俺の夢を笑わずに聞いてくれたしな。それくらい当然よ」

そつか……。

俺はおつさんの夢はかつこいとしか思わなかつたけど、回りからなんか言われてたのかね。

「分かつたよ、おつさん。ありがと」

礼を言つて、取りあえず箱」とポケットに突っ込む。
何だ?

おつさんを見ると向やら手招きをしてくる。
1歩近寄る。

「兄ちやん、一回しか言わねえ。ちやんと覚えひよ~。」

おつさんまでと違つて小さく、真剣な声で話しかけられたので取りあえず頷いておく。

「『バルドロス・ディーノ』俺の名前だ。バルドスって呼べ」

!?

フルネームか！

蒼香が言つていたことを考えれば俺のことと信頼してくれたつてことなんだろう。

このおっさん、いや、バルドスもどれほど人が善いのだろうか。それだつたらこいつちも名乗り返さなければいけないだろ？

「『浅木勇輝』　ユーキでいい」

ぬつ、とバルドスの手が伸びてきてガシガシと頭を撫で回される。
ええい！　うつとうしい！

1歩下がつてバルドスの手から逃れる。

「よろしくな、ユーキ。困ったときは助けてやるよ」

「ああ、じつあじよろしく」

そう言つて二人で笑いあつ。
やつぱりいい人だな。

「で、何ではぐれたのかな？」

後ろを見ると蒼香が笑つている。
物凄くイイ笑顔だ。

思わず1歩後ずさりしてしまつくりには、その笑顔は凄かつた。

「いや、それは……」

とつたに眞葉は出てこなかつた。

俺ピッチ。

「バルドスのおさん！ 助けて！？」

わつを助けてくれると言つていていたのだからー。

「ユーキ、流石に俺も痴話ゲンカの仲裁までしたくねえよー。 よそ
でやりなあ！」

豪快に笑つて俺に死ねと言つてくれる。

使えねえ！

襟首を掴まれて引っ張られる。

蒼香さん？ 少し首が絞まつてるんですけど？

「じゅあ向いの姉さんと話をしようつか」

そのままズルズルと引き吊られて行く。

気分はドナドナの仔牛だね。

「あーるー晴れた暁下がり、^{ひーゆー}_{ひーちーぱー}市場へ続ーく道ー」

あれ？

この道が市場へ続くかは知らないけど今の状況にぴったりじゃね？

周りからは変な眼で見られている。

まあ、歌っている男を引き吊る少女だなんて可笑しな光景だもんな。
おっさんたちに力無く手を振つているのが見える。
縁起悪いからやめてくれ。

余談ではあるがその後、カップルで男性が女性を放つておくと街中を引き吊り回されるということが多くあつたそな。

かなり長くなってしまった。

そして話の進まない」と。

飽きずに読んで下さっている読者様方、本当にありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

ああ、神よ

汝が我等に試練を科すといふのなら、我等は汝から授かつた力でそれを乗り越えよう

おお、神よ

汝が戯れで我等に災禍を与えるといふのなら、我等は汝から授かつた力でそれに抗おう

厳かな雰囲気の中、静かにピアノの音が流れ聖歌が歌われている。歌っているのは白い法衣を着て壇上に並んで立っている十数人の少年少女。

子供たちの上にあるステンドガラスはそれほど大きくはなく、1人の人と1匹の妖精の様なものが互いに向き合っている構図だ。

俺たちは今、町の中心部辺りにある教会にいる。

俺に魔術を教えるに当たつて、俺の属性が何であるかが全く分からぬ為それを調べることが出来る教会にやつてきたのだ。

しかし今はちょうど午後の聖歌の時間だつたらしく、やることも無いのでこうして子供たちの歌を聞きながら蒼香と2人で後ろのほうの長椅子に座つて待つている。

ただ歌詞を聞く限り、この歌は明らかに神様を敬う様なものじゃないと思うんだが。

子供たちの歌は続く。

我等は子を育み、剣を取り、術を昇華させ

魂と命を賭して汝に抗おう

我等は生を喜び、死を悲しみ、愛を慈しみ
魂と命をもつて此処に帰つてこよつ

さあ我等の手で始まりの鐘を打ち鳴らさう

ピアノの音が小さくなつていく。

どうやら終わりのようだ。子供たちも壇から降りて一番前の長椅子に座っていた神父さんに駆け寄つている。

蒼香も立ち上がって子供たちに囲まれている神父さんの方へと向かう。

蒼香が近づいたのが分かつたのか子供たちを少しだけ離す。

「ひんにちは、蒼香さん」

「お久しぶりです、神父さん」

柔軟な笑みを浮かべている神父さんと笑顔で話す蒼香。

周りではしゃいでいる子供たちに対してはピアノを弾いていたシスターが注意をしている。

シスターも中々新鮮でいいなあ。何より本人が美人だし。

ポケーツ、とシスターを見ていると誰かに蹴られ、殴られ、後頭部を叩かれた。

誰だよ、と思つて周りを見ると少年たちと蒼香がこちらを皿に皿で見ている。

「……」

「……」

「……」

何か言つてくれよ！

直接非難されるより無視されるほうがよっぽど心が痛いわー。
見回してみると神父さんと田^たが合^あひ。

神父さん、助けて！

若^{かえり}さんは省^{かえり}みない事ですよ、少年。（想像）

かつこいいけど、この場では使えないよ神父さん！
馬鹿なことを考えている間にでもじんざん子供たちの田は冷たくなつ
ていぐ。

「さて、どちらのかた。私について来て下せー」

どうしたものかと悩んでいると神父さんが助け舟を出してくれた。
そそくあと子供たちから逃げるように神父さんについて行き、小部
屋に入る。

「ふう……、ありがとうございます。助かりました」

助けてくれたお礼を言つ。

礼というのは基本的なことだからな。

神父さんの顔を見るとまだ何やら苦虫を噛み潰した様な表情である。

「私のこと、忘れてるのかな？」

あ。

鈍く重い音が教会に響いた。

* * * * * * * * * * * * * * * *

SIDE : Aoka

「ユーリは放つておいて、と。調を行いたいんです」

「それはいいですけれど……。彼は大丈夫なのですか？」

地面に伏しているユーキ。

うん、動いてるから大丈夫、ちょっとやり過ぎたかな？ とも思うけどまあ子供たちに囮まれて叩かれるよりかはいいよね。
あ、痙攣けいれんしてます。

「大丈夫です。頑丈ですから」

見なかつたことにして何でもないよつと言う。

神父さんの顔は引きつってはいるけれど、
気にしない。

「…………。では、私は準備をしますので」

先ほどのユーキみたいに逃げるように奥の部屋へと移動する神父さ

ん。

本人が言つてはいたように調の準備をしてくれているだらう。

「うう……」

うなされていいるヨーキーと近づく。

うーん、ここまで見事に氣絶するとは思わなかつたなあ。
とりあえず頬を突いてみる。

起きない。

「ふう……」

横に立て掛けた折りたたみの椅子を広げて座つてから一息吐く。

浅木勇輝、私のパートナー。

透明な魔力を持つ、素性も分からぬ不思議な男の子。
何故かこの人は悪い人ではないと、あの夜に出会つた時から感じている。

それは私の虹と対照的な色に惹かれたのかもしれないし、違つ要因があつたのかもしれない。

だけど私はそんなことよりも、ヨーキーにある特別な何かを感じるから一緒に居たいと思ったのだ。

……うーん、これじゃあまるで恋する乙女だねえ。

そんな事を考えて、顔が熱くなるのを感じた。

いや、恋なんてしたことないからこれがどんな感情なのかは分からぬけどさ！

決して私が恋をしている訳ではないんだよ！？

誰に言つていいのかは分からぬけれど取りあえず弁明しておく。

落ち着いて、耳を澄ますと隣の礼拝堂から子供たちの声が小さく聞こえる。

ここは結構厚いようだ。

ゴーキもまだ起きないし、調の準備もまだ終わらないだろ？ から少しだけ魔術の練習でもしようかな……？

椅子から立ち上がり、目を瞑つて深呼吸。

自分の体を駆け巡る魔力を認識する為に、血口の深いところまで潜つて行く。

自身を一つの魔術の装置として切り替え、形を持たせる為に魔力を練り上げる。

属性は氷、イメージは部屋の中で振り回せる程度の長剣。
ある程度イメージで形が整つたら、そのイメージという鞘から抜き放つように右手を振り抜く！

風を切る音が聞こえた。

田を覚ましたら蒼香が剣を振り回しているのが見えた。

蒼香は剣なんて持つていなかつたから魔術で作ったのだと思つ。

思わず息を呑むほど、蒼香の魔術は綺麗だつた。

蒼香が持つ剣は薄らと青みを帯びている。

いや、剣だけではない。蒼香自身、青い光を纏つている。

ん？ 青い光？

もう一度、今度はよく見てみる。

だが確かに、纏つている色は蒼香が言つていた虹ではなく青である。

「ふう……」

風を切る音が止む。

どうやら終わつたみたいだ。

蒼香の手から剣が消え、次いで体に纏つている青色も見えなくなる。

「なあ、何で虹色じゃないんだ？」

「うわあー…？」

休んでいるといひで座つたまま声をかけたら驚かれた。
何でだ。

そんなに俺が嫌いか、お前は。

「あ、ごめん。考え事してたから気付かなくて」

申し訳なさそうに謝つてくる。

「こつがこんなに素直だなんて珍しいな。

この町に着いてからは謝られることなんて無かつたなあ……。
ドナドナされたし。

「で、何だっけ？」

「だから、お前の色だよ。虹じゃなかつたのか？」

もつ一度聞く。

分からなこまかにしておくと氣分悪いからなあ。

「ああ、それはね」

「準備が出来ましたよ」

神父さんが入つてくれる。

ぬああ、一番氣になるタイミングで翻り込まれた。

「うふうどこいや、向ひで説明するよ」

そつぱつて、蒼香は神父さんが出てきた部屋に入つていく。
神父さんを見ると手招きをしてくるので俺も入れつことなんだろう。

ドアを開けて待つてくれててのぞむと向かう。

部屋に入ると中央に石造つの台座、部屋の四隅にも台のよつな物がある。

蒼香が中央の台座の近くにいるので俺も向かう。
台の上は器のよつになつていて、水が滾々と湧き出しているのが分かる。

「見ててね？」

台の横に立っていた蒼香が水の中に手を入れる。水の色が少しずつ変わっていく。
だけどこれは……。

「虹って言つたか、混沌としてるな

虹って言つたのは普通、赤、橙、黄、緑、青、藍、紫の7つの色が見える。

だけど水の色はそれどころではなく、たくさんの色が混ざり合つて何とも言い難い色になつていても、もっと綺麗な色が良かつたんだけじゃ、とぼやく声が聞こえる。

「で、さつさくユーキが見たのは何の色でしょう？」

蒼香がそつと息を吐いて何かを呟く。すると合わせる様に水の色が混沌としたものから青だけになつていく。

ああ、さつき見た色だ。

鋭いような、冷たいような青である。

「“氷”の属性の特有色ですね」

黙っていた神父さんが俺に向かつて言つてくる。
青は氷の属性なのか。

だつたらさつき蒼香が持つていたのは

「氷の剣、か」

「正解」

よく出来ました、と褒めてはいるが素直に喜べん。

蒼香は濡れた手をハンカチで拭いている。

「私だけなのかは分からぬけど、何か属性を使つてはいるとその属性の色だけが表層に出てくるんだよね」

普通は混ざり合つて出てくる筈なんだけどなあ、と首を捻つてはいるのだから、蒼香自身、なんでそつなるのかは分からぬのだろう。神父さんが俺の横に来る。

「あの水は魔力を通しやすく、また影響されやすいものなんです。だから自分の属性が分からぬ人たちはみな、教会へ来てこれに手を浸していくんです」

そのまま触媒としても使えるんですよ、と補足説明もされる。で、俺もあの水に手を入れうつてことだよね？

恐る恐る右手を伸ばす。

指の先が水の表面に触れる、が何も起こらない。そのままゆっくりと手首まで入れる。

「ふむ……」

神父さんが声を漏らすが、特に何もない。
泣きたい。

あれか、俺の不思議ばわあが足りないとでもいうのか！？
駄目で元々、蒼香から教わった最初の練習をしてみる。

イメージする。

自分の体にあるチカラを右手に集める。
ただ集めるのではなく、体を巡つて最終的に右手へと行く感じだ。
右手に熱が籠つていくを感じる。

集められたチカラは放出され、世界へと還つていく。

「あれ、色が……？」

何か聞こえるが今の俺に反応する余裕など無い！

イメージする。

ノイズが走る

その人は優しく微笑んで、こちらを見ている
「ねえ、 。私のお願ひ、聞いてくれるかな？」
何も無い空間。白い世界がずっと続いている
「そう、良かった。私ね、疲れちゃったんだよ」
誰かは珍しく溜息を吐いて、『氣だる』そうな感じである
「大体なんで私が事後処理だと組み直しだとかやらなきゃいけないのよー？」

いや、俺に聞かれてもどうしようもないんだが

「あ、ごめんねー。最近 たちがうるさくつてさー」
何だか大変そうである。といふか何なんだここの
「そうそう、お願ひだつたね」

俺の意見は無視か

「私を、私たちをして

「

頭に重い衝撃。

その後、倒れたようで体にも鈍い衝撃がくる。
組み立てていたイメージが崩れしていく。

「ユーキ！　ストップ！」

蒼香が叫んでいる。

うん、出来れば殴る前に言って欲しかった。
側頭部がズキズキと痛む。

「で、何だよ？」

体だけ起こして蒼香に聞く。

途中でそれたけど、それまでは結構いい感じだったと思つ。
その証拠に右手がまだ熱い。

「何だよ、じゃないよー。」
ひさは危つく消し飛ばされると、ひだつ
たんだからね！？

「は？」

辺りを見回す。

部屋の中で台風が起きたかのよつに荒れている。
何が起きたんだ……？

「あなたの魔術が暴走したんですよ」

座つて壁に寄り掛かっている神父さんが言つてくる。
よく見れば神父さんの服が所々切れボロボロである。
これが、俺の魔術の暴走で……？

「これぐらいで収まつたんだからいい方なんだよ？ 暴走して町が無くなるだなんてよくある話なんだから」

「……マジで？」

驚いて聞くと頷いてくる。
鈍痛が頭に響く。痛い。

「ですが、あなたの属性もその危険性も分かりましたし。何よりこれだけの被害で済んだのです、よしとしましょう」

散らかった部屋を見回しながら神父さんは言つ。

いや、もう何かすみません。

「属性分かったのか？」

「こんなことを起こした直後に聞くのも何だが、それでも聞きたい。

「……“光”と“無”的属性」

言ひにくそうにしていた蒼香が口を開く。

光と……無？

光は分かりやすい。

あれだ、光の矢とか、なんか主人公みたいな感じのもんどう？
だけど無つて……。

「ちなみに主要な属性は無の方だから」

分かりにくい方がよ.....。

蒼香は何か知らないのか？

「“無”の属性は私も今まで見たことがありません。
御伽嘶おとぎばなしの中だ
けのものだと思っていたのですが.....」

神父さんが驚いた表情でこちらを見ている。
何か微笑んでいる以外の表情は似合わないな、この人。
しかし御伽嘶、ねえ。

「具体的にどんな属性なんだ？」

「御伽嘶にあるようなことだけですが.....いいですか？」

頷く。

今は少しでも情報が欲しい。

あの、誰だかわからない人も気になる。
ポン、と手を叩く音が聞こえる。

「その前に片付けようか」

蒼香は笑っている。

あの顔は恐らく俺にほぼやらせるつもりだ。
俺がこんな風にしたのだから文句も言えないが。

……逃げたい。

「はあ……」

礼拝堂の長椅子に崩れ落ちるよつて座る。
みやづく終わつた……。

壊れた台を運び出し、壊してやんのー、などと言つてくる子供たちの攻撃を避けつつ予備のものと取り替えて、汚くなつた床を雑巾で拭いたりしていた。

所々傷ついた壁や床は蒼香が魔術を使って直していたので心配ない。俺を攻撃していた子供たちは今頃シスターに説教をもらつている筈だ。

「お疲れ様」

修理が終わつたのであらう蒼香がじきじきへ近づいてきて俺の隣へと座る。

蒼香の顔は俯いてよく見えない。

どちらも何も言わず、ただ時間だけが過ぎていく。
うあー、何だこの空氣。

「ユーキは、そ」

「ん？」

不意に蒼香の言葉が漏れる。

搾り出すような、そんな感じの聲音である。

「恐く、ないの？」

「……」

何が？ とは聞かない。

言つまでもなく、魔術のことだろ？。

確かに、恐いけど

「大丈夫だよ。あの程度ならお前に引き吊り回されたほうが恐かつた」

おどけるように肩をすくめて茶化す。

いや、実際あの市中引き回しは恐かつたけどな！

何より周りの視線が、あの汚いものを見るような感じが俺の心を抉つたぜ！

あ、やばい。俺泣きそう。

「迷子になる方が悪いよ」

クスッ、と笑つてこちらを見てくるのが横目で見える。

ああ、笑つてる方がこいつらしいな。

……例えどんな笑顔であれ。

知つてるか、笑顔つて凶器になることもあるんだぜ？

笑顔にもすぐに影が差す。

「私はね、怖いよ。魔術 자체もそうだし、そんな力を持っている自分自身も」

ステンドグラスを仰いで呟いている。

それが、懺悔のようく見えるのはなぜだらうか。

蒼香の独白は続く。

「この力は相手を殺す為のものだよ。望めば、相手が誰だらうが殺すことが出来る。……いや、望まなくても、かな」

暴走。

確かに、あれだけの力が自分の意志とは関係なく周囲に被害をもたらすのだ。恐くない訳がない。

そして

「どれほど罪を償つても死んだ人はもう、戻らないんだよね……」

その被害者だらうが加害者だらうが、なつてもおかしくは、ない……しかも加害者の方かよ、めんどくせえ。

しつかりと蒼香の顔を見てやる。

死ねって言われたら今にも自殺しそうな顔しやがって。

「ああ、死んだ人間は生き返つたりしないさ。んで、お前が死のうが生き返る奴もいなからいつもの通り馬鹿みたいに生きていろ」

「だけど、私は！」

蒼香の声が静かな礼拝堂に響き渡る。

ああ、イライラするなあ！

何を悩んでるんだ、お前は！

「俺を助けてくれたのはお前と、その力だらうが！ 償いたいので

あれば死にそうになつている人を助けて来い！　お前と同じ思いをさせるな！」

いつの間にか、俺は立ち上がりて蒼香の正面にいた。

「少なくともあの時は殺す為じゃなくて、護る為の力だつただろ？」「！？」

そうだ。こいつは素性も分からぬ俺を、死ぬのを見たくないという理由で助けてくれた。

自分が見たくないという理由で、だ。

その場から離れればいいだけの話だつたのに。

目を瞑り、耳を塞げばよかつた。

あの町を出ずに、平和に暮らしていればよかつたんだ。

だけど

「お前は夢の為に、ついでだけど俺の為にここに来たんだろう！？　だつたら、お前のやりたいようにやれ！　暴走した！？　人を殺した！？　知るか、そんなこと…　暴走を抑える為に、殺さない為に強くなれ！」

自分でも何を言つてゐるのか判然としない。

だけど、こいつの言葉は許容出来ないものだつた。
だから、俺の素直な感情をぶつけて“否定”する。

「俺が言つてるのは夢物語だつよ…　バカなガキの絵空事だ！
だけど、今のお前みたいに立ち止まるよりかはよっぽどマシだ！」

俺の荒い息が響き渡る。

不規則だつたそれは、やがて小さく規則的になつていぐ。

蒼香はこいつを見ようとしている。俯いたままである。

その頭にポン、とあの時俺がされたように右手を乗せてやる。

「……頼むぜ、相棒^{パートナー}。今の俺にはお前しかいないんだから」

「……っ！ バカッ……！」

両手を背中に回されて、引っ越し張られたと思つたら、俺の胸の辺りに

蒼香の顔がうすまつっていた。

時々嗚咽が聞こえるが、聞こえていないふりをして、頭を撫でてやる。

サラサラとした感覚が手に残る。
まるで父親になつた気分だ。

しかしまあ、何で俺はこんなにもこいつの信頼を得ているんだろう
ねえ？

別に何かした訳でもないのに。
人の心なんぞ分からんが、こいつの心は見ても分からん気がするよ。

よつやく落ち着いたのだろう、嗚咽が止まつてきている。
しかし蒼香は一向に顔を上げない。

「おーい、腰が痛いんだが。離れていいか？」

「『』めん、顔酷いだらうか、うつむきよつと……」

座っている蒼香に引き寄せられる様な不安定な状態で立っているか
らか、足やら腰が痛い。

正直このまま蒼香に倒れこみたいくらいだが、流石にそんな事をしたら殴られそうなので踏ん張っている。

「……ありがとう、もうこ ciòよ

許しが出で、体を元に戻そうとして

「あら？」

「え？」

そのまま蒼香に覆いかぶさるように倒れてしまった。手は流石に長椅子の背もたれにかかっているが、端から見たら俺はただの変態である。

「す、すまん！」

急いで体を起こそうとしたのだが、何か虫の知らせというか、魔が差してそのまま子供たちが説教されているあたりを見る。

神父さんとシスターがこちらを見ている。

蒼香はまだ気付いていない。

「……」

「……お邪魔でしたかね？」

「えつー!？」

ゆっくりと確かめるように聞いてくる神父さん。

その顔は柔軟な笑顔のままであるが、どうとなく納得したよつた、そんな感じが伝わってくる。

よつやく蒼香もどんな状況か気付いたよつだ。

蒼香の上から体をじけたいが、無茶な体勢のためうまく力が入らない。

「いえいえ、いいのですよ。ただ、一応礼拝堂では控えて頂きたいのですが……」

完璧に誤解して、理解を示してくれ、更に忠告までしてくれた。ありがたいけどそんな空氣の読み方はいるないんだよ、神父さん。

「蒼香も何か言つてくれ！」

俺が言つても効果は無さうなので、助けを求める。
正直助けてくれるとも思つちゃいないけど、それでも藁^{わら}へりには
縋^{すが}りたい。

「……」

蒼香は漫画で見るような、プシュー、と湯気が出そつた感じで顔を真つ赤にして止まっている。

ああ、使えねえ！

神は俺を見捨てた……。

「ふふっ、『冗談ですよ』

がつくりと頃垂^{うなだ}れている俺に、依然として柔軟な表情で足音を立て近づいてくる。

シスターも特に何も言わずに神父さんの後ろにいる。

「取りあえず離れたまゝがよろしいのでは？」

手を差し出してくれる。

今の俺では満足に立ち上がることも出来ないので素直に手をとる。ちよつとした浮遊感の後に地に足が着いている感覚が感じられると思ったが何も無く、上手く立つていられない。

支えてくれている神父さんが慌てて長椅子に座らせててくれる。

何だよ、これ？

まるで手足が無くなつた様な感じである。

「暴走の反動が来ましたか」

「う、反動……？」

手足がおぼつかない、気持ち悪い状態で聞き返す。

頭も痛くなつてきた。

最悪な気分である。

「簡単に言えればさつきの暴走に体が耐えられなかつたんだよ

蒼香の声が聞こえる。

ようやく直つたようで、いつもの説明してくれる時の声だ。

「不完全な暴走だったから中途半端に意識が残っちゃつたんだね

ちなみに完全に暴走してたら多分この町は地図から消えて、最悪コーキは死んでたんじゃないかな？ と恐いことを言つてくる。

あー、頭痛い。

ズキズキと痛むんじゃなくて、ガリガリと削られるような痛みだ。

「ふむ、『癒しの旋律、彼を包み痛みを和らげなさい』」

神父さんの声。

両手を胸の前で組んで肅々と告げている神父さんの体は白い光に包まれている。

その光は次第に両手へと集まり、輝きを強くする。

『^{ヒール}癒しの風』

光が弾け、礼拝堂に降り注ぐ。

その光景はまるで輝く雪が降っている様である。

白い輝きは俺の体へと集まって、触れた途端に消えていく。全ての光が消える頃には頭の痛みはほとんど無くなっていた。だけど手足の感覚はまだ戻らない。

「少しは楽になりましたか？」

言葉に頷いて肯定を示す。

実際、頭痛が無くなつて大分楽になつた。

手足が別のものになつた様な感覚が不気味だがそれほど苦になるものではない。

「やつですか、それは良かつた。ではお話をしても平氣ですか？」

まあ話すのは私ではなくこの子なんですが、ヒシスターを前へと出させる。

シスターの格好は初めて見た時から変わっておらず、紺の修道服で

身を包んでいる。

こちらに田を合わせると深くお辞儀をしてくる。その姿はよく似合つていてまるで一枚の絵画のようである。などと思つと同時に横蒼香がいるあたりから鋭い視線がとんでくる。

何か悪いことをしただうつか？

考へても答えは出なかつた。

「私が知つてゐる限りのことをお話します」

「お願ひします」

響くよつな声と少し硬い声。

どこにそんな不機嫌になる要素があつたんだよ、と思ひほどの聲音である。

どれだけ頭を捻つても何も思い浮かばない。

「まず“無”といづ属性は御伽噺おじぎばなしや伝説でしか存在が確認されていませんでした」

それは先程神父さんに聞いたことである。続きを促すために頷く。

「いや、他の属性では扱えぬものを扱う、皇龍をも打ち碎く、などと嘘の様なことばかりでしたから存在すら疑わしいものだったのですが……」

「私の口から出るのは？」

知らない単語だ。

「皇竜。この世界を作った内の1人、……1体? と伝えられている竜だよ。大きな体躯^{たいく}と光り輝く翼で自分たちが作った世界を巡る。そんな伝説だったかな?」

蒼香の補足にシスターが頷く。

原初の神々に対抗するようなものか。

というよりもこの世界の人間は世界を作ることが出来るほどの竜と戦つたのか。

しかも勝つってどんなだけ強いんだよ。

「そしてどの話にも共通したものが『魔術を消す』ところです」

「……は?」

魔術を消す魔術?

何それ、俺に最強にでもなれつていうの?

「ですが、これも確証はありません。あなたの暴走の痕跡を見ても周囲の魔力が消えているということはありませんでした」

ああ、そうですか。

期待した俺が馬鹿だつたよ。

やはり魔術は初步も出来ない俺には無縁のものなんだらうか……。

「私が知っているのはそんなところでしょうか。お役に立らず、申し訳ありません」

「いや、ありがとうございます。何となく方針が決まりました」

うん、例え俺に才能が無からうが努力すれば少しきらりと使えるようになるだろ。

後で蒼香に練習を見てもらおう。

立ち上がろうとして、足に力を入れる。

随分と感覚が戻つてはいるがまだ頼りない感じがする。

1歩1歩確かめる様に歩いている俺を見かねてか、蒼香が支えてくれる。

「すまん」

「気にしない気にしない」

神父さんとシスターに向き直つて礼を言つてから外へ出るための扉へと向かう。

蒼香に支えてもらっているが、それも相まって歩きにくい。
うーむ、こいつには迷惑を掛けっぱなしだな……。

「困ったときはいつでも来てください。お一人に祝福があらん」と
を……

後ろから声を掛けられる。

神父さんいい人だな……。

ただ微妙にお一人に祝福～の部分が物凄く優しげな声に聞こえたんだが。

……まあ、いいか。

「で、これからどうするんだ?」

横で支えてもらっている蒼香に問いかける。

時刻は大体4時ごろだろうか。

随分教会にいたようだ。

教会の前にはそれなりに大きな噴水がある広場になつていて、子供たちが駆け回り、お母様がたが雑談している。

平和だな……。

「うーん、ギルドに行ってユーキの登録申請しようかと思つてたんだけど」

今日のところは休もつか、と提案してくれる。

正直ありがたい。

支えてくれているのはいいのだが歩きにくいし、何より恥ずかしい。

「行こう、宿取らなくちゃ

少しずつ歩いていく。

俺、格好悪いなあ……。

いつも、ズックです。

不定期な更新で申し訳ありません。

ずいぶんと長くなってしましましたし……。

それでも話が進まないこと。

そんなものでも見てくださっている方々、ありがとうございます。
相も変わらず不定期な更新になるとは思いますがよろしくお願ひします。

夢を見ている。

こっちの世界に来てからよく見る夢だ。
真っ白な空間に1人だけポツンとい
立っているのか座っているのかも分から
ない。
ただそこにいる、という感覚だけがある。
そしていつもそこにいる人

や、……。また来たんだ。

その人が誰を呼んでいるのかは分からない。

聞いてよ、また仕事増やされたんだよ！ 信じられない！

ただ毎回愚痴を言われるんだよなあ……。

上が相変わらず人使い荒いのよね。逃げようかしぃ。
なんかお役所仕事してるみたいだよな。

あ、逃げればいいのか。気付かなかつたわ。
……毎回こんな調子だし。

うーん、じゃあ近いうちにそつちに行くから、よろしく！
え、ちょっと、待って。

ほら、呼んでるよ？ 行つてあげな。

だから

「待てつづけに！」

「あ、起きた」

チチチチチ、と小鳥特有の高い鳴き声が聞こえる。
今日はいい天氣らしく、陽の光が室内に眩しいほど入つてきている。

またあの人か……。一体誰なんだよ。

今まで気にも留めなかつたが、流石におかしい。

元々夢を見ない（覚えてない）人間だ。

だけどこいつも立て続けに同じ夢？を見たら何かあると思つてしまつ。

「蒼香、今何時だ？」

「8時。朝ご飯食べよつよ」

ちやつかりと椅子に座つている蒼香に尋ねる。こいつ部屋の鍵使つて入つてきやがつた。

格好は水色の半袖のパークーと紺の膝上のスカートである。青い色がよく似合つことで。

腕を上げて、体全体を伸ばす。右手の肘を掴み、頭の後ろへとやる。肩を回してみる。大丈夫、問題ない。

ベッドから降りて屈伸。膝が鳴つたけど問題ない、昨日の後遺症は無し、と。

「着替えるから、先行つてくれ」

「うん、下で待つてるよ」

パタン、ドアを開める音。

ま、着替えるつつても学ランなんだけどな。ハンガーに掛けてある俺の服を取る。着替えを買わなきやマズイよな……。

通し慣れた袖に腕を入れる。

面倒なのでボタンは留めずにそのまま。

ポケットの小さな箱の存在を確かめて洗面所兼トイレへと向かう。部屋についている洗面台で顔を洗い、口をゆすいでから、用を足す。つーかこの世界、何でも魔術で補つてるとからそんなに機械とか無いのな。

今使つている水道も、魔術で動いているらしい。原理は分からんけど。

壁に立て掛けた幅広の剣を手に取り、鞘に入れたまま見よう見まねで正面に両手で構える。

これも使えるようにならなきゃ持ち腐れだよな。

元の場所に立て掛けなおし、今持つていぐものが特にないことを確認してから部屋から出るドアへと近づく。

部屋から出て廊下を抜け、階段を下りていく。

ここは宿屋は3階建てで、1階は主にギルドの人や傭兵たちが使う食堂。

2・3階が宿屋となつていて。

俺たちが使つていたのは2階の階段に近い2部屋。

理由は、まあ俺が動けなかつたからなんだが。

ここに着いたのがまだ早い時間で、部屋が空いていて本当に良かつたと思う。

流石に人が多いな……。

4人掛けの木製の丸テーブルを囲んでいくつものグループが座つている。

蒼香を探してみるとカウンター席に座つていて。

ここでは色んな髪の色が見れるけど、それでも青い髪つて見つけやすいね。

あいつ以外に青い髪はまだ2人しか見ていない。

蒼香の横に腰掛ける。

まだメニュー見てるし……。

何でもいいだろ?。俺もメニューを見てみる。

この世界の言葉や文字は不思議である。

ひらがなやカタカナ、漢字があると思えば、全く読めないミミズが
のた打ち回った様な文字もある。

蒼香がいつには後者は古代文字だそうで、別に読めなくとも生活に
支障は無いことのこと。

パラパラとメニューをめくる。

ん、普通に朝の定食でいいわな。

メニューを閉じる。

「決まった?」

いつの間にか蒼香はメニューではなくこちらを見ていた。
決まらないんじゃなくてわざわざ俺を待つてたのかよ。

「朝定食」

「わかった。お姉さん、朝定食2つ!」

はーい、とカウンターの奥の厨房からいい返事が聞こえる。
朝食が出来るのは少し時間が掛かると思つ。

「なあ、光の魔術つてどんなもんなんだ?」

その間に蒼香に色々聞いてみるとこする。

無の属性は手探りでやるしかないのだから後々やるとして、光の属性は確認できているのだから練習もしやすいだらうといつ考えである。

「うーん、小さな灯りを^{あか}点けることから始まつて、光の矢や槍を作つたり、かな」

こんな感じだよ、と蒼香は人差し指から少しだけ離れた場所に小さな灯り薄つすらと白い光が見えてくる。

昨日の神父さんの光よりもかなり薄い。

『灯れ』

蒼香の呟きとともに人に差し指から少しだけ離れた場所に小さな灯りが発生する。照明が点いているから分かりにくいが、光の球体が確かにそこにある。

「これが出来てようやくスタートラインだね

グサリと青葉の矢が突き刺さる。

どうせ初歩も出来ない未熟者だよ。

「でも、これくらいなら『シカえ掴めば一日かからずに出来たりするから、そう悲觀することはないよ』

蒼香よ、お前は忘れていることがある。

森の中で初歩の初歩すら成功の兆しが見えなかつた俺に、そんなことを求めるのは間違つていいんだよ。

昨日のあの後、ここに着いてから体が動かないでベッドの上で自

分の中にある魔力を感じ取り、ひたすら懸っていたのだが、結果は惨敗。

少しも進歩は無かった。

「ふふつ、まあ焦らない焦らない。気長に頑張ればいいんじゃない？」

「へいへい、氣長に頑張るとしますよ。
厨房から若いお姉さんが盆を持って出て来る。

「はい、朝定食2つお待ち下さい様！」

俺たちの前に2つでも出るような朝食のメニュー、オムレツやハムなどの軽いものが乗った皿と主菜 魚だった が置かれる。
さて、まずは朝ご飯としますかね。

しゅーりょー。

オムレツが美味しかった。

お姉さんも綺麗だし、ここが繁盛してる理由も分かる気がするね。
時刻は9時を少し過ぎた頃。

店内の人は少なくなつてきている。

蒼香はアイスのようなデザートをようやく完食したところである。
ちなみに追加メニューである。

「うん、じゃあそろ行こうか

「その前に口を拭いつな」

アイスが着いているぞ。

ハンカチを差し出して、着いている部分を指差して示す。

慌てて俺のハンカチで拭っているが、何と言つか微笑ましいな。

「で、昨日言つてた、ギルド、だっけ？」

拭き終わったのを確認してから問い合わせる。

ハンカチを返そうとしてくるが、俺が持つてるのは何となく変態くさいので持たせておく。

「そう。ギルドでヨーキの冒険者の登録申請と私の旅団の申請しなきゃいけないから」

うーむ、冒険者か。

それだけ聞くとゲームみたいだよな。

覚めない夢を見ている気になるけど、それは自分で自分を否定するようなもんだからな……。

まあ、今俺は確かにここにいるのだからそんなことはないのだけれど。

「じゃあ行こう、登録が終わつた後はヨーキの魔術の練習か、簡単な依頼でもやってみようよ」

「はいよ」

代金を払つて、店を出る。

こここの町は北から南へと縦に長い構造で、宿は南の大通りに面して建つていて。

宿から出て右手に進むと町の方へと、左手に進むと教会がある広場へと行ける。

一応言つておけば広場を通り抜けて進めば、北からも町の外へと出られる。

気性の荒い傭兵たちが町のど真ん中で喧嘩を起こされても困るため、ギルドは町の南の外れ、つまりここから右手の方である。ちなみにバルドスのおっさんがいた露天の通りは南側の、大通りから1つ外れた道だった。

「着いたよ

プラプラと歩いて着いたのは十字の文様が描かれている看板が掲げられた、2階建ての石造りの建物。

筋骨隆々の男たちがその建物から入れ替わり立ち替わり出たり入りしている。

うーむ、むさ苦しそうだな。

しかし入らないわけにもいかない訳で。

深呼吸、深呼吸。

「？ ほら、入るよ

ちよつ、まだ心の準備がつ！

ズルズルと引きずられて行く俺。
なんか既視感を感じるな……。

ドアを通りて中を見回してみると案外すつきりとした内装だった。白を基調とした壁に、落ち着いた感じの木のテーブルや椅子。どうやら奥はちょっとした酒場になっているらしい。

手前は恐らく依頼や申請を受けるカウンターなのだろう。4人ほど受付嬢と思われる人たちが傭兵たちの相手をしている。

「一番奥の列に並んで。説明はしてくれると嬉しいよ」

終わつたらこっちに来てね、そつと蒼香はさつと手前から2番目の列へと並ぶ。

一番奥。

3人しか並んでいないところである。

とりあえず言われたとおりに3人の後ろへ並ぶ。

結構簡単な手続きのようで割とあっさり俺の番までやってくる。

「お早う御座います、冒険者の登録申請ですね？」

「あ、はー」

「ではこちらの用紙に記入をお願いします」

そう言つて紙とペンがカウンターに置かれる。
何々？

まずは名前。 グーキ、と。

年齢。 17。

魔術師か、鍊氣師か。 一応魔術師。 鍊氣師って何だらうな？

魔術師の場合は属性を記入。光、と一つだけ書く。

また、ある場合はその特性を記入。? 分からないから空欄、つと。

戦闘経験。……無しでいいか。

……。

とりあえず書ける欄は書いた。

受付のお姉さんに用紙を渡す。

……。

「はい、ユーキさんですね。年齢は17、魔術師で属性は光、戦闘経験は無し、特殊技能も特に無し。間違っていませんね？」

頷く。

「では、ギルドの説明をしましょうか？」

「是非」

「かしこまりました。我々ギルドは世界各地に存在する大型の冒険者、及び傭兵登録所のようなものです。市民や国からの依頼を受け、成り立っています。冒険者の方々にはそれぞれランク分けされており大きく下位、中位、上位とそれ以上の4つとなっています。あなたは戦闘経験も無いようなので一番下のランク、下位の黒石ブラックストーンです。ランクを上げるためには自分のランクの依頼を10個、もしくは自分より高いランクのものを5個完了し、報告すること。それ以外では自分より上位の魔物を5体倒し、その証拠をこちらへ持つて来ることです。ちなみに、あまりにランクが離れている依頼を受けることは出来ませんので」了承下さい」

ふむふむ。

まあ大体予想できる範囲内だな。

「ランクの細かい区分は?」

「下位は下から黒石、ブルーストーン 青石、シルバーストーン 赤石、オウマイストーン 白石です」

下位は、つてことは中位と上位は違うのか。
ただ、大体同じように区切られているだろうから、下位から上位だけで約16段階か。

上位になるのに何年かかるんだか。

「1つずつしかランクは上げられないのか?」

「自分のランクと同じランクの依頼を受けていた場合は1つずつです。しかし自分より2つ以上高いランクを受けていたり、危険度の高い魔物を狩っている場合はその限りではありません」

他には……

「自分より上のランクの人と一緒にいる場合はどのランクの依頼まで受けられるんだ?」

「基本的には一緒にいる人と同じランクまで受けられます。ただし、あまりにもパーティの方々に迷惑を掛けたり、ギルドの方から見てあまりにも力や経験が不足している場合は我々から処分や注意の通告が行きます」

……どうやって分かるんだ?

ギルドの情報収集能力がそれほどまでに高いのだろうか。

「もうあつませんか？ では、いちらのカードをお持ち下さい」

手の平に収まる大きさの鈍い黒色のカードが手渡される。
そこには俺の名前や年齢、属性などが書いてある。
いつの間に……。

「いちらが説明書になります。無くさない様にして下さい」

これで終わりです、と営業スマイルで見送られる。
うーん、それほど時間は掛からなかつたな。
蒼香は、見てみると2番目で蒼香の後ろには並んでいない。
しうつがない、行くか。

「終わつたぞ」

近づくと前の人の中請も終わつたりじへ、蒼香の番である。

「いちらは旅団手続きです。今日はどうなさい用件で？」

先程のお姉さんと同じ営業スマイルで迎えてくれる。
うーむ、スマイルは無料ただつていつも向こうではしてくれなかつたりするからな……。

仕事をするのに愛想が悪いのはどうかと思つね。

「新規に旅団を作りたいんですけど」

「では、いちらの用紙に必要事項を記入して下せー」

渡されたのはわざと俺が書いていたものよりも一回りほど大きな紙。

「じゃあここに名前とハングルを書いて」

蒼香からペンを受け取って言われた通りに書く。
ここのはんかつてどちらいなんだうな?

「はこぶ

用紙を返す。

蒼香は用紙に色々と書き込んでいくが、聞かれることもないのでも俺
は口を出さない。

ほとんど書き終えて、最後の項目で蒼香の手が止まる。
覗き込むと、旅団名が書かれていない。

「何がいい?」

「ひかりを向いて聞いてくれ。

うーむ、名前ねえ……。俺にそんなことを聞くとは……、何だか格
好よさげな漢字を並べたようなものしか思いつかんよ。

「ま、何でもいいよ。私は思いつかないから」

お前の夢の第一歩がそんな適当でいいのか……?

少しだけ睨みつけてやるが特に気にした様子も無く、飄々としている。

名前、名前……。

ふと思い出したのは蒼香の魔力の色。

お世辞にも綺麗とは言えない、あの色。

それをこいつは自分で虹だと言ったのだ。

だったらみんな色じやなくて、本物の虹の色になるよつこ

「イリス」

確かにどこかの国の言葉で虹って意味だった筈だ。ついでにアヤメの花つて意味もあつた気がする。

「ビ」の国の言葉か忘れたけど“虹”って意味だ

「虹……」

韻いんを確かめるためだらうが、咳くのは止める。恐いつづりのやがて咳きも消える。

「うん、いいね。イリスに決定！」

空いていた最後の欄に鼻歌混じりで書き足していく。
随分と上機嫌なんだが、思い当たることも無い。
こいつ口口口機嫌が変わるよな。
何だけ、変わりやすいのは乙女心と秋の空だけ?
むしろ蒼香の心と秋の空にしておいてくれ。

「えー、旅団の新規作成、旅団員は青水晶のアオカさんと黒石のコ
ーキさんの2人ですね。冒険者証明書を見せてください」

先ほど受け取った黒いカードを見せる。

蒼香の物を見ると、鮮やかな青いカードである。

「はい、結構です。では確認致します」

読み上げていく言葉に一つずつ領きを返す蒼香。

俺は今横から見てるけど、きっと後ろから見たら寝そべって頭を力クンカクンやつている感じに見えると思う。

「最後に、旅団名“イリス”。よろしくですか？」

「はいー。」

元気のいいことじど。

俺はもう立ってるのもめんどくさくなってしまったよ。

「では、じぶらの旅団証明書をお受け取り下さい。」

渡されたのは冒険者証明書と同じくらいの大きさのカード。色は透き通る雪の様な銀である。

「説明は必要でしょうか？」

「お願いします」

「かしこまりました。ええと、利点かどうかは分かりませんがその旅団へ直接依頼がくる、ということでしょう。その依頼は我々、ギルドを介さないものですから自己責任となります。ここで依頼を待つだけよりも効率的に仕事をこなせますね。そして冒険者のランクとは別に旅団のランク、まあ知名度のようなものです、があります。もちろんランクが高ければ良い仕事や危険な仕事がきますね」

「うん？」

「ギルドを介さないってことは

「その、旅団が直接受けた依頼はギルドの方、例えば個人のランク

とかには何も加算されないのか?「

「やうですね。例えどれだけ危険な仕事を受けたとしても基本的にこちらの記録には残りませんから。それにギルドを介さない、といふことはそれをするだけの費用が無いか、またはギルドに頼めないような仕事であるとか。そんなものの方が多いです」

良い事ばかりじゃないんだな。

つーか、聞いてると悪い事の方が多い気がするぞ?

「しかし、^{うわせ}噂の力とは侮れないもので。ある程度こなしていくとギルドにもその噂が入ってきます。その噂がギルドに頻繁に入ってくるようになった時、我々が審査を行い、信用に足る旅団であれば資金の援助などを受けることが出来るようになります」

なるほど、ギルドからの援助はありがたい。
生活だらうが旅団だらうが金は必要になるからな。

「何か、質問は?」

「いや、今のところは無いから、分からなことじろがあつたら聞きたくなるよ」

「そうですか。ではあなた方に良い巡り合せがあることを願つております」

「登録完了」、つと。

あの程度ならまだ頭に詰め込める範囲内だ。
次は……

「少し依頼を探してみる?」

「いや、その前に服を買つてくれないか? 流石にこれじゃ動き難い」

学ランのままだから脚に余裕がないし、それほど強度があるわけでもない。

蒼香は俺の体を上から下まで見回す。

「せつか、色々必要な物があるもんね」

そう言つて、ギルドから出る蒼香。
俺を置いていくなといつて。

必要な物、ね。

薬や携帯食料とかかね。

そういえば。

「お前はナイフとか持つてなくていいのか?」

こいつ丸腰のような気がするんだが。

そう思い、蒼香のこれまでの格好を思い出してみると、どこにもナイフなんかの刃物や身を守れそうな物は無かつたと思つ。いくら魔術があるからって何も持っていないのは緊急時に危険だらう。

「ああ、大丈夫。私はこれがあるから」

ほら、と言つて取り出したのは小ぶりのナイフ。

刃渡りは15センチもないだろつ。

特に何か細工がしてあるという訳でもなく、無骨な感じがする。

つーか今どじからこれを取り出した！？

右手にあつた筈のナイフは二つの間にか消えていて、そつかと思つと左手にある。

視線を外していいのにも関わらず、気付いたときには左手に握られていた。

回転をせよ上へ放り投げ、一番高く上がり下がつてくる時は消えてくる。

そういう見てこるがまた無手へと戻る。

「ふふ、ちょっとした特技なんだ」

誇らしげに笑う蒼香。

悔しいが全く種が分からない。

さて、遊びはこのくらいにして、と。

服屋や武具屋はギルドの向かいと隣に建つている。

武器・防具は当たり前だが、冒険者や傭兵からの需要の方が圧倒的に多いためだ。

蒼香が言つにはちゃんと町の人用の服屋も町の中心にあるらしいが、今のところは町の外に出るための服が欲しいのでそちらでは行かない。

武器は一応バルドスのおさんのがあるからいとして、俺たちはギルドの向かいにある服屋へと入る。

「いらっしゃい」

恰幅のいいおばさんが挨拶をしてくれる。

ここに店員なのだろう。

エプロンを掛け、ポケットからは採寸用のメジャーが見えている。

店内装は、売っている物が冒険者や傭兵用ということを除けば自

分の世界と殆ど変わりない。

「どんな物をお探しで？」

「動きやすくて頑丈な服を」

それぐらいしか思いつかん。

採寸をしてもらつて、少し時間が掛かると言われたので適当に店内を見る。

荷物を多く持てるつてのも魅力的だけそれだけ動き辛くなつそうだし。

いや、荷物を多く持てて、なおかつ動きやすいつてのは一人旅とかで重要だから普通に売つてるか？

ああ、でも金を出すのは俺じゃないからな。
最低限の機能があれば十分だ。

安ければなお良し。

しかし、まあ色々な服があることで。

誰が買うのか分からないような物凄くキラキラした服とか、機動性が全く期待できないような全身を覆うフルプレートもある。

「はいよ、こなんんでいいかい？」

声をかけられて振り向くとわざわざおばさんが若草色のパートビズボンを持って立っていた。

一見すると普通の服にしか見えないが……？
いつの間にか蒼香が手に取つて見ている。

「うん、しっかりした作りになつてゐるし、中々いいと感づよ

「試着してみても？」

「うう、と一解を得たので試着室に入り、学ランを脱ぐ。む、この「マーク、内側に何個かポケットがあるな。羽織つてみるとそれほど重くも無く、むしろ軽い方である。続いてズボン。

少し余裕があり、走ったりしても問題無もそうだ。

試着室内の姿見で格好を確認するが、いかんせんファッションに気を使つたことがないのでよく分からぬ。

とりあえず聞いてみるか。

「蒼香ー、つ?」

カーテンを開くとそこには今日着ていたパーカーではなくドレスを着た蒼香がいる。

髪の色とは反対の鮮やかな赤。

胸の上から膝上までピッタリとしたラインで、すそ裾が広がつてこるマーメイドドレスである。

「……何でそんなもん着てるんだ?」

「え? いや、あつたから?」

……相変わらずこいつの思考回路が分からん。

いや、確かに綺麗だがな?

ただ、やっぱり普段のイメージからか可愛いの方が強い。

「何か言つてくれないの?」

「……まあ、似合つてるんじゃない?」

何で疑問系なのよ、と言われるが照れ隠しだ馬鹿野郎。
元も良いから結構似合つてるんだよ。

「ゴーキも中々似合つてるよ」

そうか、それだけ聞ければ十分だな。

後はインナーを何枚か買えばいいかな?

学ランは……、売るか?

そもそも買い取ってくれるのか?

そこまで考えて頭を振る。

まだ元の世界に返ることを諦めたわけではないのだ。
その時まで持つていなければならない。

「えーっと、いくらなんだ……？」

「あ、払うよー」

蒼香がおばちゃんに銀貨を渡している。

こここの金の価値も知らないんだよな、俺。

後で聞かないこと。

知らないことが多すぎるな……。

仕方ないといえば仕方ないんだが、それで済ますつもりもない。

試着室に置きっぱなしだった学ランとズボンを畳んで持つてくる。
もちろんバルドスのおっさんから貰つた指輪の小箱は今着ているコートのポケットに移し変えた。

「ま、こ、じ。お兄ちゃん、蒼香ちゃんを大事にしてやってくれよ。」「はい？」

何だそれは。

まるで俺たちが恋人同士のような

「ち、違います！　ユーキは唯ただのパートナーです！」

最後まで考える前に顔を真っ赤にした蒼香の叫び声で書き消された。
うん、なんだろ？。間違つてはいないけど複雑な気分だな。
蒼香はおばちゃんにからかわれながらお釣りを貰っている。
どうでもいいけど、そのドレスはちゃんと返しておけよ。

はあ、こんなんで大丈夫なのか……？

あー、疲れた。

あの後、薬やら何やら買いに行つたのだが、買った物の大部分を俺が持つて宿に戻つたのだ。

そういうえばこここの通貨は銅貨、銀貨、金貨の3種類のようである。銅貨100枚で銀貨一枚分、銀貨100枚で金貨一枚分だ。ちなみにバルドスのおっさんから貰つたミスリルの指輪は最低でも金貨50枚分らしい。

こここの小さな家1軒の値段の相場が分からぬから何とも言えないけど、向こう換算だと、1000万だとして50で割るんだから…

…金貨一枚で20万。

20万を100で割つて銀貨一枚2000、それを100で割るから銅貨1枚20円。

……んん?

服屋で買つたコートが銀貨一枚でお釣りが返つてきたんだから200円以下な訳で。

向こうなら2万以上したつておかしくないのに。
物価の違いか?

リンゴみたいな果物も1つ銅貨2枚だったし。

「ほら、手が止まつてゐよ!」

「ぬあ、冷たつ!」

蒼香の怒鳴り声の後、頭に衝撃。

顔が濡れている。

あの野郎、動くのが面倒だから水の魔術使いやがった。

今何をしていいかというと町の空き地で俺は剣の素振り、蒼香が少し離れたところで魔術の練習である。

買い物が終わつたのが昼を少し過ぎた頃。

その後遅めの昼食でその時点で2時。

そこから依頼を受けると帰つてくるのが夕方になつてしまつとのことで、今日のところはこうして修練に励むことにしたのだ。受ける依頼にもよると思つたが、何も訓練していない状態で外に出るのは恐かつたので言わないのであいた。

「ふつー。」

「重心の移動を意識して、全ての動きが繋がる様に！」

相手の左肩から斜めに斬り下ろす袈裟斬り、突き、抉りながら引き抜き右足を1歩引きながら右肩から斜め、逆袈裟に切り払う。右足に入れてもう一度前へ踏み込む、が唐突にカクン、と膝が落ちる。

剣が落ち、重い音が聞こえる。

「限界、かな」

「……やつらしき」

蒼香が近寄つてきている。

手にも足にも力が入らない。

膝立ちは面倒なので、そのまま寝つ転がる。
あー、きつつー。

「1時間半。正直ここまで持つとは思つてなかつたよ」

俺も自分で驚いてるわ。

1キロ程度の物でもそんな長い時間振り回すだなんて、もやしつ子の俺には到底出来ない筈なのに。だけどまあ、限界はあつたようで。

魔術で身体能力の強化？

それとも身体能力の底上げか？

考えたつて分からぬがそんなところだらう。

風が吹く

良い風だ。

少しだけだが体の熱を冷ましてくれた。

「まあ、毎日続けることだね。継続は力なり、ってね

「ああ、そうだな」

ここに来てから妙に体が軽いというか、無駄なく使っているというか。

お得な特典とでも思つておけばいいのかね。

右手を両の前に持つてきて、握つてみる。

体力の回復も早くなつてい。

いや、早すぎるくらいだ。

「休憩終わつたら魔術の練習ね」

「りょーかーい」

転がつたまま手をパタパタと振つて応え、そのまま大の字になつて空を見上げる。

陽は少し傾いてきているが、それでもまだ3時半。

雲もまばらにあるが、周りに高い建物も無いので澄んだ青空がよく見える。

あっちの世界じゃこんな風に空を見上げたこともなかつたな……。

『集う火は風に包まれ緋となりて、天をも焦がす剣とならん!』

炎の魔術か。

蒼香のほうを見ると予想通り、炎が燃え上がり赤い柱となつていて。あー、また失敗か?

『つ!
ディソルブスペル
術式霧散!』

蒼香の元へと集まつていた炎はコントロールを失つてそのまま荒れ狂う波と化す。

波が蒼香をも飲み込もうとしたその時、透明な魔力が放たれ業火を消し去つていく。

術式霧散

コントロール出来なくなつた魔術を消すための魔術。

魔術師は初步的な魔術とともにまずこれを出来るようにするのだとか。

俺はまだそこにも到達出来ないがな……。
体を起こして胡座をかき、目を閉じて集中。

蒼香は言つていた。

今の俺は、例えるなら電気の点け方を知らない子供なのだと。要するにスイッチが分かつていないので。

だから自己の深いところまで潜つて自分の回路を認識するべきだ、と。

そんなこと言われたってやり方は全く分からんんだけどな。

とにかくイメージだけでも形作る。
しかし、スイッチねえ……。

スイッチっていうとドクロマークがついた自爆用の物しか思い浮かばないんだけどな。

魔術を使う度に毎回自爆か？

『術式霧散！』

おー、俺が数えただけでも今日8回目だな。

蒼香で思い出したが、確かあいつのスイッチの入れ方は自分を魔術の回路そのものにすることだったか。

俺は何だらうなあ……。

ゴロゴロ、と再び寝転がる。

「まだ決まりないの？」

いつの間にか蒼香が隣に立っていた。
言つまでもなくスイッチのことである。

「影も形も出来てねえよ。お前はどうやってスイッチに気付いたんだ？」

「うーん、どうやってって言われてもなあ。暴走の後からいつの間にか使えるようになつていたとしか」

「あ……、悪い」

教会での出来事と、蒼香の慟哭を思い出してしまい、少し気がまずい。

しかし蒼香は首を横に振っている。

「うん、もう大丈夫だから」

蒼香の顔に暗い影はなく、むしろ晴れやかである。

……強いんだな。

絶対に言葉にしてやらないが、素直にそう思つ。この心境の変わり様の原因は分からぬけれど、少なくともいい方向に向かつてゐるはずだ。

しかし困つた。

スイッチに関しては何も分からず仕舞いである。地道に頑張れつてことなんだろうか。

早めに使えるようにしておきたいんだけど。

主に俺の身の安全の為にな！

……自分で言つて情けないなあ。

これ以上考えていてもいい方向には行かなそつだから話題を変えるか。

目下、気になつてゐることといえば……

「お前はどうなんだよ。出来そつなのか？」

「私？ うーん、まだ何とも言えないかな……」

今話しているのは魔術を習う時に一番初めに言つてみた合成魔術のこと。

少なくとも俺は出来そつないので蒼香にやらせてみている。

「出力が異常に上がっちゃうから制御が難しいんだよね。私の普通の状態より10倍近く跳ね上がるからなあ……」

おい、どこまで完璧超人になるつもりだ。

火力が低いのが欠点だったのにそれすら無くなるってビックのチートだ！

少しほその才能をよこせー！

「まあ魔力が二三そり持つて行かれるから、今の私じゃ2・3回使えれば良い方だよ」

「さつきからずっと練習してたじやねえか」

さつきも言ったが俺が数えただけでも8回練習しているんだ。魔力が足りないってことはないんじやないか？

蒼香は首を横に振る。

「さつきまでは制御を全く考えてずに出力だけ上げる練習してたらそんなんに負担もからなかつたの。だけど私の場合大きな魔術を制御するときは何かしらの武器の形にしなきゃいけないから」

「何で？」

思い出してみれば、俺が見たことのある二つの魔術は属性は違うが槍と剣だ。

「ああ、その説明もしてなかつたね。魔術にはそれぞれ性質があるんだよ。その性質の他に特別な性質があつたりすると特性、ってね」

確かに冒険者の登録のときにそんな欄があつた。
で、その特性とやらが蒼香の魔術に関係している？
つまり

「魔術を武器の形にする特性？」

「うん。正確には武器の形にしか出来ない、だけどね」

燃え上がる音と熱気を立てて蒼香の右手に小さな赤い光が生まれる。火のナイフか。

よく見てみると、普通の炎のように燃え上がるだけではなく刃物としての形が整っている。

「特性“武具”。私はかなり選択肢が広い部類なんだけど、それでも広範囲殲滅魔術みたいなことは出来ない」

その代わりに接近戦は得意な方だけど、と付け足してナイフを消した。

要するに近距離の魔法戦士？

でも出力の問題をどうにかすれば『ややややや』超遠距離から狙撃とか出来そうじゃね？

考えれば考えるほどチートくさい才能の持ち主だな。

しかし、特性は分からないようにしたって基本性質くらいは知つておいたほうがいい気がする。

「とりあえず基本性質を教えてくれ。今は何でも知つておきたい」

「いいよー。まずコードの属性の“光”は開放、かな？ 詳しくは後でね？」

「はいよー」

「次に“火”ね。燃焼、もしくは加熱。あ、基本性質って言つても

複数あつたりするから私が知らないものもあるかも知れないよ？」

ふむふむ、火は燃焼と加熱。

そのまんまだな。

これなら他の属性も分かりやすそうだ。

「“水”は浸食、“風”は発生、“土”は造形、“氷”は冷却と凍結、“雷”は伝達、“闇”が収束。
……知つてるのはこれくらいかな」

微妙に分かり辛いものがあるがそれは後で聞こう。
敵を知り、己を知れば百戦危うからず、つと。

「それで開放は……、何て言えばいいかな？」

蒼香は両手を胸の前にあげる。

それはまるで壊れやすいシャボン玉を包み込む様に、優しげな手つきである。

白い光が蒼香の体を^{おお}覆つていく。

白は恐らく光の属性の特有色なのだろう。

『白の精靈、満ちて溢れよ』

蒼香の両手の間に光が集まって球体となる。

光の球がサッカーボール程の大きさになつた直後、突然光が強まり視界を白に染め上げていく。

目がチカチカして痛い。

蒼香の言葉と共に光の柱が生まれ、空へ昇つて消える。互いに無言のまま、時間だけが過ぎていく。
……え？

「結局何だったんだよ？」

「私もよく分からない」

……。

立ち上がるのも面倒なので手招きして近くに呼ぶ。
蒼香の頭に手が届くようになつたのでとりあえず軽く引っ呑いておく。

鈍い音がするからちゃんと中身は入つてこむよつだ。

「何すんのぞ！？」

「いや、あんまりにもバカっぽかつたんで中身の確認を

魔術の使いすぎで頭が回らないのか、それとも最初からこいつ奴
だつたのか。

……多分後者だらうなあ。

まだ何か言つている蒼香の言葉を聞き流して白虹の中へと潜る。

恐らく開放つていうのはそのままの意味だ。

蒼香がやつて見せたのは例なのだから、そのままやつてやればいい
だけの話。

両手を胸の前に。

スイッチ？

そんなもん知らん、何とかな……らしいだらうけど、今は無視。
後は、唱えるだけ。

『白の精霊、解き放たれよ』

力チリ、と何かが噛み合つ音がする。
手の中に、小さな光が生まれる。

『開放』

「えつ？」

世界は白に
子供たちよ、私の言葉を

更新が遅くなってしまい申し訳ありません。
生きてますよー。

読んで下さってる皆様方、ありがとうございます。
お時間があれば、どんなものでも構いませんので評価や、感想を頂
けると嬉しいです。
でわでわ。

世界は白に

またあんたか。

子供たちよ、私の言葉を

今日はいつもの愚痴は無いんだな。

ええ。私とあの子は、違うから

いつもの優しげな声から一変し氷の様に冷たい声が聞こえ、ぞわり、
と全身に寒気が走った。

何だこいつは。

顔も姿も分からぬ人の人と似ている気がするが、決定的に何かが
違う。

あなたがそうなのね

……何の話だ。

お人形さんと一緒にいるだなんてあなたも物好きよね

……何の話だと聞いているんだが？

知らないのね、可哀想な子。でも

ここで死ねば関係ないわよね？

死神ガ持ツヨウナ大キナ鎌デ、オレノクビヲ

白の世界を赤が染めていった

「ユーキ、しつかりしてっ！」

蒼香の声だ。

いつの間にか瞑つていた目を開けると、蒼香の顔と青い空が見える。
……空が見えるってことは倒れてるのか。
最後だけやけにはつきりと見えたな。

白い人、大きな鎌。

体を起こして首をさするとヌルリとした感覚がある。
案の定、見てみると赤い液体である。

「良かつた、田を覚ました……。光が収まつたと思つたら倒れてる
んだもん、ビックリしたよ」

安心からだらう、息をついている。
俺の首の怪我には気付いてないようだ。

「……蒼香は、見てないのか？」

「え、何を？ つて、血出てるよー！？」

蒼香は慌てて荷物が置いてあるところに行く。
もしもの為に簡単な治療道具はいつも持つているということなので、
それを取りに行つたのだろう。
しかし、あれを見たのは俺だけなのか。
近くにいたから蒼香も見てているかと思ったんだが、どうやらハズレ
のようだ。

お人形さんと一緒にいるだなんて

言われた言葉を思い出す。

くそっ、一緒にいるひて言ひたらあいつしかいないじゃねえか。

人形だとか好き勝手言いやがつて。

大体何なんだよ、あいつは。

いきなり襲い掛かつてくるなんておかしいだろ。

理不尽な出来事に怒りが込み上げてくるが、ぶつける相手もいない。
小さく、短い間隔で足音が聞こえてくる。

蒼香が戻ってきたようだ。

手にはタオルと小さなウエストポーチを持っている。

「首、見せて」

顔を少しだけ上に向けて見やすいようにしてやる。
血をタオルで拭いて傷口を見ている。

「傷は深くないから大丈夫だうけど……何でこんなところを

恐らくあれに斬られたんだよな……。

……待てよ?

何で俺は生きてるんだ?

あれは本気で俺を殺す気だつただらう。

実際に首に傷が出来ているのだから影響^{エフェクト}が無いわけではない筈だ。
なら、なんで俺の首は繫がつていて、こうして生きていられる?

「どうしたの? 恐い顔して」

「……いや、何でもない」

話そうと思ったが、どうしても『人形』という単語が頭から離れない。かつたのだ。

いや、人だろうが人形だろうが怪物バケモノだろうが、蒼香は蒼香以外の何者でもないのだから俺には関係ない。

だけど

何も出来なかつた。

あいつが言つていた『人形』、それが示しているのが蒼香だと理解しても、自分の体は指先すら動かなかつた。
ヘビに睨まれたカエル？
違う。

例えるなら自然の雄大さを見たとき自分が小さな存在だと感じるようだ、そういうものの類たぐいだつた。

「はい、お仕舞い。きつくない？」

「ああ、大丈夫」

治療はあっさりと終わつた。

触つてみると分かるが案外しつかりした巻き方で、きつても緩くもない。

俺も高校で応急処置は一通り習つたがここまで短時間で綺麗には出来ないだろう。

器用なんだな。

人は見掛けによらないとは言つが、本当にその通りだと思つ。見た目どおりのアホの子だと思えば手先が器用だつたり。
……魔術を使えるつてこと以外は普通の女の子なんだよなあ。

「何がいけないんだううね？」

「え？」

マズイ、何も聞いてなかつた。

反射的に蒼香の方を見たはいいが、そこから続かない。

「ユーキのことなんだからちゃんと聞いててよ」

「悪い……」

他の事を考えて聞いていなかつたのは確かに素直に謝る。

「それで、何だつて？」

「何でユーキは魔術が使えないのかって話だよ

グサリ、と言葉の棘じげが刺さる。

まさかそんなにストレートに言われるとは思つてもみなかつた。そりやあ使えないけど、もう少し言い方つてものが……。

「正確に言えば、魔術の発動は出来ているんだ」

「ん？」

ネガティブな思考の途中、蒼香の声で引き戻される。

魔術の発動は出来ている？

なら、足りないものは制御？

だけど制御が出来てないからって「使えない」だなんて言つか？

「魔術の構成は仕方ないとして、発動もしてるし特別に制御が必要な魔術でもなかつた。魔力量が足りないって訳でもなさそりだし、

本当に何が原因なんだか分からなによ

俺が思い当たることはあの夢しかない。

1回田は暴走、2回田で殺されそうになり、じゃあ3回田は……？

2度あることは3度あるのか、それとも3度田の正直なのか。
もつ一回あれに会つたら死ぬよな、俺。

「じゃあラスト一回。これで出来なければ魔術は諦めよう

「……いいの？」

死にたくないからな。

毎回あれが出てくるんじや命がいくつあっても足らんわ。

それに、ただのワガママだつた訳だしな。

使えなくても悔しいだけで、困ることはない、等。

目を閉じて、集中。

思い描くのは小さな光の球。

魔術を使う為に体の中の歯車を噛み合わせて回す。

始めはゆっくりと、少しずつ速く。

体中に熱が湧き上がるのを感じる。

体の中を駆け巡る、教会で属性を調べたときにも感じたモノ。

あの時は分からなかつたけど、今なら分かる。

これが、魔力。

巡るチカラを右手へと集める。

『白は消えず、黒を照らす

幻想と知りながら、尚も追い続ける』

目を開き、しっかりと差し出すよつて突き出した右手を見据えて

『白よ、灯れ』

閃光。

辺りを真っ白な光が包む。
眩しいが、左手を目の前に翳かざして光が消えるのを待つ。
数秒程して光は消えた。

「出来た……のか？」

実感など全くない。

残つたものもなく、ただ呆然としている。

それこそ夢だつたのではないかと疑つてしまつ。

「凄いじゃん！ あれだけ出来れば上出来だよ！」

唐突に背中を叩かれた。

不意に貰つた一撃は結構痛い。

蒼香を見ると満面の笑みで俺の背中を何度も叩いている。

……そうか、出来たのか。

徐々に嬉しさが込み上げてきた。

「でも何で出来たんだろうね？ 詠唱も教えてないのに」

出来たのは、きっとあの白い空間に行つてないからだらつ。
詠唱は……分からない。

先程、蒼香を真似した様なものではなく、まるで知っていたかの様に自然と口遊んでいたのだから。

「まあ、細かいことはいつか！ やつものイメージを忘れないようにね」

「はいよ」

蒼香に返事はしているが、別のことを考えていた。
あの白い空間のことである。

何が原因で向こうに行くんだ？

あいつらは誰なんだ？

何で殺されかけた？

疑問は尽きない。

だが答えてくれる人もいない。

「まあ、魔術が使えただけでもよしとしようか」

俺の呟きは風に吹かれて消えていった。

*
*
*
*
* *

「やられたわ……まさかあの子が私に歯向かうとはね……」

白い空間に女がいた。

白い肌、白い髪、白い服。

全身が白で構成されている。

違う色を挙げるとするなら、女の瞳の赤と、右腕から流れ出ている鮮血だろ？

「あんな人形と人間に何を望んでいるのかしら。あなたを救えるのは私だけなのに……」

声に狂気が混じっていく。

右腕から鮮血が飛び散っていても気にした様子はない。

「そう、あなたを救えるのは私だけ。アハツ、アハハハハツ！」

言葉はいつの間にか笑い声となつて空間に響き渡る。

床に散った赤は少しずつ消えて無くなっている。

後に残つたのは誰もいない白い空間と一振りの大鎌、そして血に塗れた右腕であった。

鬱蒼うつそうと茂つてゐるが、陽の光が届く森の中。
息を潜め、身動きをせずに木々の陰かげに隠れてい
る。…來た。

ガサガサと草木を搔き分ける音が近づいてくる。
息を浅く吸つて、深く吐く。
音が大きくなってきた。

腰におっさんから受け取つた剣も差してはいるが無手である。

「ユーキ、行つたよ！」

了解！

聞こえてきた言葉に心中で返事をして一気に飛び出す、が

「は……？」

「クエヒヒヒ……」

大きな影が俺へと突つ込んで

「本つ当にありがとうー。」

「いえ……」

ギルドの前、初めての依頼

下位の赤石アストールを探してー。』

の依頼主である女性からの何度も分からぬ礼に、力無い声で答える。

アストールとは移動や荷物の搬送はんそうに使われる大型の鳥 僕たちの世界で言うとダチョウを全身フサフサにして一周り大きくした様なである。

「柵を越えちゃいけないっていつも言つてるでしょうー。」

依頼主の女性は横にいるアストールを叱つている。

どうやらこの依頼の対象だつたアストールは抜け出しの常習犯らしい。

いつもは平原で寝ていたりするらしいが、今回はそれほど凶暴ではないが魔物が出る森に入つてしまつたのでギルドに依頼を出した、ということだつた。

ただの搜索なら黒石のランクなのだが、森に入つたので2つ上の赤石になつたそつだ。

「それで、本当に大丈夫ですか……？」

「まあ、それなりに頑丈に出来てゐるんで。そんなに気にしなくていいですよ」

俺の姿を見て心配してくる。

そもそもどうだつて、何せ今の俺は上半身と頭に包帯が何重にも巻いてある。

森の魔物にやられた訳ではない。端的に言えば轢ひかれたのだ。

悪びれもせず、そこで突つ立つてゐるアストールに。作戦は完璧だつた筈なのに……。

その1 蒼香がアストールを発見、追い立てる。

その2 僕が待ち伏せている所まで誘導。

その3 捕まえる。

……俺と蒼香の役割が逆だつたか。

包帯が巻かれてはいるが、実はそれ程大きな怪我はしていない。
いや、怪我はしたんだが蒼香の応急処置『癒し』の魔術で
大体治してもらつたのだ。

俺がこの世界に来たときに狼にやられた怪我も魔術で応急処置をし
たそうだ。

「貰つてきたよー、つてまだやつてたの？」

ギルドから出てくる蒼香。

手には今回の報酬が入つた小さな袋を持つている。

「でも、うちの子が怪我をさせてしまった訳ですし……」

「ユーキは大丈夫って言つたんですね？ なら気にする必要はあ
りませんよ」

おい。

一応危ない状態だつたんだぞ？

いや、責めるつもりもないし、これ以上謝られても困るけど。
だけどお前が言つて終わりつてのは俺の立場がない気がする。
などと考えている間に話は終わり、依頼主も帰つていく。

「好意が6割で打算が4割、かな？」

「何の話だ？」

女性が行つた方向を見つめながら蒼香が呟いた。

「いや、分からぬならいいんだけど」

「？」

ますます頭を捻る。

考へても分かりそうにないが、やはり気持ち悪いのだ。

「ほら、そんな所で突つ立つてないで。時間あるからもう一個くら
い依頼を受けよう?」

そう言つて再びギルドに入ろうとする。
が、ギルドの扉が開いて中から人が出でてくる。
あのバカ、気付いてねえ!

「痛つ!」

「ああん?」

鈍い音が2回。

ぶつかつた音と、蒼香が尻餅をついた音。
あー、やつちまつた……。

蒼香がぶつかつた相手は強面の、いかにもチンピラのような奴だつ
た。

黒い髪は後ろで束ねてあるがパイナップルみたいな感じでボサボサ、
無精髭で目付きも悪いが薄手の服に隠れている上半身は鍛え上げら
れた筋肉が自己主張している。

「『』見て歩いてんだ、ガキ」

「『』『』めんなさ』」

蒼香を立たせてやつて向き直る。

相手は喧嘩腰である。

蒼香も素直に謝っているがそれでも相手は納まらない。
それどころか付け上がりでますますこちらを責めてくる。
ガヤガヤと周りが騒がしいので見回すと俺達を囲むように人垣が出来ている。

どうやらチンピラが大きな声を出しているので人が集まつてきてしまつたようだ。

「おい、そつちのガキも」

周りに気を取られていた意識が戻つてくれる。

気がつけば男は蒼香ではなく俺の前に立つている。

「お前だよ、ガキ。連れがしたこと分かつんのか？」

「……」

めんどくせえ。

厄介な奴に関わっちまつたな。

男はまだ何か言つているがどうせくだらないことなので聞き流す。
ギルドの受付さんも扉の辺りから迷惑そうにこちらを見ている。
俺たちは関係ないですよー、悪いのはこのチンピラですよー。
視線を送つてアイコンタクトを試みるが逸らされた。
あー、無駄な時間が過ぎていくー。

「つ、聞いてんのか！？」

男の声が聞こえたので見ると、顔面に向かつて拳がきている。咄嗟に両腕で守るが、衝撃と共に妙な浮遊感を感じる。世界が回転して、体に鈍い痛みが走る。何が起きた？

「ユーキ！？」

「くつ、ははつ！ 何だ、抗魔術レジストも出来ないのか！？」

何か言つてるよ。

1人で盛り上アゲがつて楽しいのかね？
しかしあま、痛いこと。

今の俺はうつ伏せの状態で、相手の脚が少し見えるような感じである。

体中がズキズキと痛みを訴えている。
まるでハンマーで殴られたようだ。

「大丈夫！？」

「おーおー、女に心配されちまつて。羨ましいねえ」

蒼香一。

心配してくれるのは嬉しいが、スカートだつてことを忘れるな。
前で屈かがむんじゃない、スペツツが見えてるぞー。

流石にそういう訳にもいかないので立ち上がつて状況確認。
結構飛ばされてるな。

元の立ち位置から5メートルといったところだろうか。
人垣に突っ込むような形で倒れていたようだ。

「お、やんのか？　また吹き飛ばしてやるぜ？」

……レジストがどうとか言っていたから十中八九、魔術絡みだらう。
レジスト 抵抗する、か。

随分分かりやすい単語だな。

少しだけ腰を落として軽く地面を踏みしめる。

剣は取らずに拳を構える。

「おいおい、その腰のもんは飾りか？」

「いや、使いたくないだけさ」

喧嘩で人を殺したくはない。

それにこんなことの為にこの剣を買つた訳じゃないしな。

……いや、自分の身を守るためにだから使ってもよかそうだが。
まあ、要するに。

恐いんだろうな。人を殺してしまつかもしれないことが。
だから適当に理由を付けている。

「ユーキ、やめて」

「……形だけだ、隙を見て逃げる」

蒼香の静止の言葉に眩きを返す。

言われなくとも初めから逃げるつもりだつた。

ようやく魔術の初步が使えるようになつただけの俺が、ザコだけど
ちょっと強いぜ！　みたいなチンピラに勝てる訳がないだろう。とにかく。
少しづつ脚に入れていく、すぐにでも飛び出せる体勢になつて
タイミングを計る。

しかし

「逃がさねえよー。」

「なつー?」

突如として突風が吹き荒れ、煽あおられてバランスを崩す。

風の音に遮られてはいるが、周りの人たちの声も聞こえることから結構な範囲で風が起きているんだろう。

地面に這う様に体を屈めて風の影響を受けないようにする。

風の魔術か？

吹き荒れる風の中、平然と立っている男を凝視する。

緑色の靄もやのようなモノが纏わり付いているのが微かすかに見えた。

「”風”の属性、ランクとしては下の中から上あたりかな」

俺と同じような体勢の蒼香の言葉が聞こえる。

縁は風ね。

しかしどうするかね。

このままだと周りに迷惑をかけるだけだ。

先程からギルドのお姉さんの視線が強くなっているのがわかる。

「おーり、せつわと立てよ。その顔を1発ぶん殴るんだからよー。」

やなこつた。

殴るから立て、と言われて態々立つ奴がいる訳ないだろ!「て」

「それともそこの女に泣き付くか？ 見つともねえ姿だろ!がなー。」

男が笑い声を上げる。

それが一番確実な方法なんだけど、やっぱり格好悪いかね。
仕方ない、と立ち上がるうとして。

蒼香が俺よりも先に立つて男を見据えていた。

『ヴェントウス・ファルクス
風の大鎌！』

見えない何かが吹き荒れる風を裂いて、地面へと突き刺さる。

『アーネス
発生！』

刹那、地面に刺さったものからも風が吹き荒れ、俺たちの動きを阻害している風と互いにぶつかり合って消えていく。

つか、風強つ！

台風とまではいかないけれど、かなりの風だ。

「これ以上勝手なことを言つのであれば、私が相手になるよ」

程なくして風が止み、蒼香が男に向かつて敵意を剥き出しにしながら言い捨てる。

待て、お前が切れてどりすんだ。

さっきまで止めろって言つてたじやねえか。

「勇ましいねえ。そつちのガキに見習わせたらどうだ？」

「あなたには関係の無いことだよ。で、やるの？」

俺の心など無視で、勝手に話が進んでいく。

周囲も止める気は無いようで野次を飛ばしている奴らもいるくらいだ。

内容は蒼香を支持するものが大半だが、中には俺を罵倒するのもチ

「間違えるなよ、あんたの相手は俺だろ」が

「ああ、しょうがねえな！」

ラホラと聞こえる。

「間違えるなよ、あんたの相手は俺だろ」が

蒼香を背に庇う様に男の前に立ちはだかる。

声は震えてないな？

脚は？

腕は？

……大丈夫だ、恐くない。

あの白い死神に比べたら」いつなんぞ子供に思える。

「はつ、ド素人がなめた口聞くじやねえか

「そのド素人に今から地べた這わされるんだぜ？」

挑発になるか分からぬが鼻で嗤つてやる。

こつちは魔術のド素人どこのか喧嘩もほとんどしたことがない一般
人なんだよ。

正面から行つたつて勝てる訳がないんだから小細工だらうが何だろ
うがしてやるさ。

「ユーキ、大丈夫なの……？」

後ろから蒼香の心配する声が聞こえる。
焚きつけておいてその言葉は無いだろ」と。

「安心しろ、華々しく散つてやる」

冗談交じりに笑いながら言ってやる。

「冗談に聞こえないかも知れないが、まあいいだらう。

さて、俺の戦力確認だ。

腰の剣は使わん。というか怖くて使えん。次。
そうなると殴るやう蹴るやらしなきゃならんが……まあなんとかなるだろ。次。

魔術は今のところ光を放つ」としか出来ない。
……絶望的じゃねえか。

何で俺はこんなことをしているんだか。

「ユーキ、前！」

男が突っ込んできている。

溜息を吐きたくなるがそうも言つてられないようだ。

左足を前に出し、腰を落として迎撃体勢。

左手は軽く前に、右手は顎あいを守るように。

顔に向かつて殴つてくるのを左の肘ひじあたりで受け止める。

左腕に鈍い痛み、続けて全身に衝撃。

脚で地面を削る感覚と、背中に何かが触れる感触。

「大丈夫！？」

今受け止めてくれるのは蒼香しかいないか。

感謝しつつ、どうしたものかと頭を捻る。

ありがたいことに男はこちらを見てニヤニヤと笑っているだけで追撃はない。

チャンスは一回。

自分の中の歯車を回してスイッチを入れる。

『白の精霊 集い来たりて放たれよ』

よし、仕込みは出来た。

後はあるの男次第だけどな……。

どこにも力を入れず、自然体で立つ。

男との距離は約4メートル。普通ならば一息では詰められない距離だ。

少しづつ体重を前に掛けていって

「んなつー!?

有り得ないような距離を跳んで、男の眼前へと迫る。
驚いて固まっている男の顔の前に左手を出して、囁える。

『開放 灯れ!』

光が溢れる。

一瞬の事だったが、目晦めくらまし程度にはなつたようで、男は片手で目を押さえて片方は適当に振り回している。

その男の腹に出来る限り強く蹴りを入れる。

独特的の弾力が脚に返ってきて、思わず顔をしかめるがそんなことは気にしていられない。

1歩踏み込みよろめく男の顎に掌底を向けて
思い切り打ち上げる!

男は変な呻き声あひ声を出しながら後に倒れる。

加減せずにこれだけ綺麗に顎に入れれば起き上がれないだろ。

仰向けに大の字になつて倒れている男の横に膝立ちになり呼吸を確認する。

よし、生きてるな。

「で、どうすんだ?」

野次馬たちの歓声が恥ずかしいが、悪い気はしない。
生きていることさえ確認できればよかつたので、立ち上がって蒼香に声をかける。

頬に打ち付けた右手が痛いのでプラプラと左右に振りながら男に背を向けた。

向けてしまった。

「…? 後ろ…」

蒼香の張り詰めた声。

振り返ると氣絶している筈の、狂気に満ちた男の姿。
奇声を上げてこちらへ突つ込んでくる。
とにかく距離を離そうと後ろへ跳び退ろうとするが、動けない。
ミシリ、と鈍い音と、硬い何かに叩きつけられたような衝撃。
何が起きているのか分からぬ。
男がこちらを見ているのは分かる。
それだけだ。

男はナイフを取り出して

俺の首目掛けて振り下ろした。

いつも、更新が遅くなつて申し訳あつません。

テスト期間真っ只中の作者です。

そろそろ夏休みですね。

今年は涼しいかと思ひきや、うだるような暑さで……

皆様も健康にはお気をつけ下さい。

Page 15・講義と痛みと（前書き）

今回の話は3／4程が説明で成り立っています。
くどいですが田を通して頂きたいと思います。

死んだと思ったさ。

あの状態から蒼香や他の人が間に合ひとは思えなかつたし、何よりも恐怖で頭の中がいっぱいだつた。

だけど、生きている。

結論から言うとだな。

「目標の沈黙を確認」「認

ギルドのお姉さん強いわ。

チンピラのナイフが俺に刺さるかと思ったら、いきなり男の体が横に吹き飛んだ。

視線の先には、さつき迷惑そうな顔をしていたギルドの受付のお姉さん。

訂正、今も迷惑そうな顔をしているわ。

何というか、不機嫌なオーラが滲み出している感じがする。

ちなみに茶髪のショートカット。メイド服に似た、ギルドの制服を着ている美人さんである。

「ユーキ、大丈夫！？」

「まあ、何とか……」

問いかけに生返事を返してしまつたが仕方ないだろう。

不機嫌そうな彼女がさつきからこつちを凝視していて恐いんだから。

蒼香の体に暖かな白い光が灯る。癒しの魔術だらう。

殴られたであるつ頬がズキズキと自己主張してくれている。

「……」

「え？」

ぼそり、と何か咳かれた氣がして思わず聞き返してしまう。すると不機嫌な顔のまま、俺の目の前まで来て胸倉を掴んで引き寄せられた。

「仕事を、増やさないで、頂きたいのですが？」

「は、はい！ 申し訳ありませんです！」

頬の痛みも忘れ、背筋を伸ばして答える。
思わず変な口調になってしまった。

いや恐いんだよ、本当に。

目の前でやられてみる、誰だってこんな風になるわー。

手を放されて、俺の体が支えを失い蒼香に受け止められる。

「なんなんですか、あれは。自分よりも格上に挑んでおいて、相手が倒れたからって放置ですか。馬鹿ですか？ 馬鹿なんですよね。それとも自殺願望があるんですか？ ギルドの前で死なれて困るのは私たちなんですが」

「ちよつとー！」

いいんだ、蒼香。

俺には反論のしようも御座いません。煮るなり焼くなり好きにして

下さい。

嫌な覚悟を決めて、項垂れ^{うなだ}ている俺に、ですが、と続けられ。

「たとえ貴^{あなた}方の方が弱かろうと、そっちの女の子を庇^{かば}つたのは認め
てあげましよう。貴方が逃げなかつたおかげで周りに大した被害が
出なかつたのも事実ですし」

……褒められた？

彼女の顔を見ると、さつきまでの不機嫌な顔ではなく微笑みを浮か
べている。

きっと言つたことは全部本心なんだろう。

何だかすつきりした顔だし。

踵^{かかと}を翻して、チンピラを引き摺^{ひきず}つてギルドへ入るうとする。

「助けてくれて、ありがとうございます！」

大声で言つのは少し恥ずかしいが、こちらに背を向けている彼女に
対して素直に礼を言つ。

彼女は足を止めて横田でこちらを一瞥^{いぢべつ}すると、空いている方の手を
プラプラと振つてそのままギルドへ入つていった。

ヤバイ、格好いいな。

「むー……」

彼女が入つたギルドの扉を見つめたまま蒼香が唸つ^{うな}っている。
どうしたんだ？

「いや、私の出番が取られた気がして」

「ん？」

あのお姉さんにか？

……あー、説教くさいことはほとんど言われちまつたから、それのことかな。

だけどまあ、今回は仕方ない。

「あの人があつたたら死んでたしな」

「分かつてるよ。……私がユーキを助けることが出来なかつたっていつのも、悔しいんだけどね」

む……。

確かに、それは何となく分かる気がする。

助かつたならいい、とも思えるけれど、パートナーを助けられなかつたというのは結構後に尾を引くものだ。
だが、そんなお前に言つてやる「じやないか。

「安心しろ、これから何度も助けられる」とになるからな」

「むしろ安心できないよー!?」

お、蒼香のツツ「!!」。珍しいものが見れたな。
やっぱりいつも蒼香の方がやりやすくて助かる。
クスクスと蒼香が笑つているのが分かる。

さて、と。

「流石に、ギルドに入り難いからな。練習でもするかね

「やうだねー、じゃあ行こつか」

ほら、早く立つて、と急かされて立ち上がる。
周りの野次馬なんぞ気にしていないうで、俺の手を引っ張つて行く。

「……」

野次馬たちの声で聞き取りにくかつたけれど、ありがとづ、と聞こえた気がした。

「はい、じゃあ今回の講義を始めたいと思いまーす

場所は前回と同じく、町の外の少し開けた場所。（と、いつてもすぐそこに町は見えているのだが）

蒼香と俺で正面に向かい合つて地面に座る。

今回はあまりにも俺が知っていることが少ないのでレジストについて軽く説明を聞いてから何でもいいので質疑応答、時間があれば練習という形にしてもらつた。

「んー、抗魔術レジストっていうのはまあ、そのまんまの意味で魔術に抵抗するための……魔術？ 技術？」

首を傾げながら説明していく。
かし
何で疑問系なんだよ。

「とにかく、魔術を使う魔物や魔術師と戦う為に必要なものだよ。こんなに早くその機会があるとは思つてなかつたからユーキには痛

い思いをさせちゃったけど……」

「ん、大丈夫だ。蒼香が治してくれたし」

殴られた部分に手を当てて確認する。

腫れも引いてるからもう大丈夫だらう。

顔の形が変わつてたらしいからな……、素直に感謝。

元がそんなに良くないのにこれ以上悪くされたらたまつたもんじゃない。

「よかつた……。じゃあ、続けるね？ 簡単に言つと魔術の効果を緩和する障壁を作り出すの。イメージとしては……^{ティンブルスペル}術式霧散を壁にしたような感じ。勿論、自分の魔力、魔術じやないから相手の魔術より抗魔術の壁に込めた魔力量が上回つていたり、よつぽどセンスが良かつたりしないと完全に焼き消すことは難しいけどね」

「抗魔術を極めれば相手の魔術は全く喰らわないのか？」

こんなもん極論だけだ。

極めなくても魔力を込めればいいだけの話だけど、魔力を込めすぎて自分が攻撃出来ないだなんてことになつたら笑い話にもならん。

「まあ、本当に極めればってところかな。だけど防ぐ技術があるならそれを破るために技術もあるよ。^{ベネットレイト}障壁貫通つていつてね、相手の障壁に干渉して盾としての効果を無くすの。これは難易度高いけどね」

そもそもうか。

しかし、面倒だな。そんなことも言つてられないけど。出来なければ簡単に死ねるからな。

「取りあえずは抗魔術の練習か？」

「そうだけど、まだ無理だと思つ。形を変えたり維持したりするための練習とかもしてないからね」

壁つて言つくらいだから魔力を体に纏つだけじゃ駄目なのね。
俺が使える魔術は今のところ一瞬で効果が無くなるというのに、維持もしなくちゃいけないと、道は長いな……。
思わず溜息を吐いてしまう。

「何か聞きたいことは？」

「魔力量が少ない人やセンスが無い人はどうやって抗魔術を？」

溜息ばかり吐いていられない。

俺の生存確率を少しでも上げるために出来ることは何でもしてやるさー！

「まあ、その2つが無くたつてある程度は緩和することが出来るから。完全に消せなくたつて障壁張りながら逃げ回ればいいし、他の才能のある人と組んで一緒に行動すればいい。何も自分一人で全部の役割をこなさなくたっていいんだよ」

役割分担か。

そっちの方が効率はいいかもな。
なにせやるしが一つ減るんだから集中して自分の役割だけを果たせばいい。

「ちなみに蒼香は？」

「抗魔術に関してはそれ程得意じゃないよ。あんまり嬉しくはないけど攻撃する方が楽」

確かに、蒼香からしてみれば他を傷つける為の力など嬉しいだろ。まあとこつ自身の特性の問題でもあるんだろな。

でも武器じゃなくて武具っていうんだから盾や鎧も作れそなもんだけだ。

「私からも、いい？」

「ん？ 何だ？」

恐る恐るといった様子で蒼香が聞いてくる。
何か聞かれるようなことあつたかね？

「あの時の一瞬で間合いを詰めたのは、ビックリしてへ。

あー、あれか。

結構馬鹿な理由で頑張って出来るようになつた俺の特技みたいなもんなんだが。

「縮地つて歩法があつてな？」

平たく言えば相手に気付かれないと動くとか、長い距離を少ない歩数で、とかそんなもんなんだが

「何でそんなこと出来るのやへ。」

……言いたくねえなあ。

漫画で見たもんを片つ端から練習してただなんて言えねえよ。子供ってのは恐いね、実現できそなものだと本気でやるから。これが”手から氣弾を出す”とかだけだつたら成長するこつれて諦めるんだが。

よりもよつて縮地が、形だけとはいっても出来ちまつたからなあ。……完璧に出来るようになるまで10年かかつたがなー。

「どうしたの?..」

何も言わない俺に対し、蒼香が顔を覗き込んで聞いてくる。顔が近いしつつの。

「実は俺は幼い頃、悪の組織に捕まり改造手術を受けてだな……」

「言いたくないなら素直にそいつ言ってなよ……」

やれやれ、といつた感じで肩を竦めて首を振る蒼香。途中で遮るなよ、俺が馬鹿みたいじゃないか。だけど、考えてみればあんな距離を一瞬で詰めることは出来なかつたんだけどなあ?

こつちに来てからの身体能力の向上が著しくないか?まあ、無いよりも有つた方が良いものであることは確かだけじ。あのチンピラの攻撃にも随分早く反応出来たし。

「そういえば、あのチンピラはどんな魔術を使ってたんだ?..」

全身を叩きつける衝撃を思い出して聞いてみる。

風の魔術なんだよな?

「えーっと、圧縮した風に指向性を持たせて拳に纏わせて殴りつけ

たら発動、吹き飛べ！ みたいな感じ。

それ程上手じゃなかつたから衝撃だけで済んだけどね

随分と適當な説明だな、おい。

胡散臭そうに見ると溜息を吐かれた。

「これ以上詳しく述べと専門用語だらけになるけど？」

「すまん、俺が悪かつた」

何で俺の考えてることが分かるんだよ。
サトリか？ それとも俺がサトラなのか？

……どちらにしても嫌だな。

あ、また話逸てるし。

「条件付けはどうやってやるんだ？」

「ゴーキも使つてたじゃん遅延魔術。ディレイスペルあれと似たような感じ……つて聞いてくるつて事は分からないで使つてたんだよね。簡単なものならただ思つだけで条件付けは出来るよ。少しだけ発動を遅らせるとかね。複雑なものは魔術の構成に組み込まないと出来ないよ」

名前が付く程の技術だったのか、あれ。

やつてみたら出来た、って感じだつたからそんなに気にしてなかつたな。

「構成つてのは？」

「名前の通り。どんな効果で、どんな威力で、どんな形で、どのタイミングで、どのくらいの速度で打ち出すとかを決める部分。あの

男はきっとこの構成段階で発動条件を設定してたんだと思つナビ

そんなこと考へてもいのに発動するのは何でだか。

ん？ 逆に何も考へてないから明かりを灯そうとしても一瞬で消えるのか？

つまり発動はするけど効果も持続も最小限のものになる？

……普通戦闘中にそんなことに思考は割けないとと思うんだが。

ここでの魔術師連中は分割思考を常備しているとも言つのか！？

「他に何かある？」

無ければ持続の構成の練習するけど、と続けてくる。
特に無かつたから立ち上がりとして、ポケットに箱状の物がある
のに気が付いた。

…… そりいえば今更な気がするけど。

「『』のミスリルはどんな効果があるんだ？」

ポケットに入れっぱなしだったからすっかり忘れてたな。
箱の中から指輪を取り出す。

陽の光に当てるときれいに輝いて見える。

「 基本的には出力の向上。良い物だと構成の補助にもなったりする
よ」

出力の向上ねえ。

俺が持つてゐるよりこいつが持つてゐる方がいいかもな。

蒼香に指輪を差し出す。

キヨトン、とした顔で俺の顔を見てから手を押し返してくる。

「えつと、それはヨーキが貰つたものなんだから貰えないよ」

「貸すだけだ、ちやんと返せよ。」

誰がやるなんて言った。

許可も貰つてないのにやるなんて言ひはじ薄情じやないわ。
受け取りそつにもないので無理やり手に持たせて、返されなによつ
にそっぽを向く。

……おっさんとやつてゐることが一緒だな。

「……仕方ないなあ」

「うむ。」

横田で少しだけ蒼香の顔を見ると、少なくとも嫌がつてはいない。
といつよりもプレゼントを貰つた子供のようにはしゃいでいる、様
に見える。

まあ、喜んでくれているならいいか。

箱は今まで通りポケットに突つ込んで、立ち上がって空を見る。

「眩しいな……」

上を向いたまま田を瞑つて太陽の光をイメージする。
強く、恒久的な光を

体の中の歯車を回す。

魔力を巡らせ練り上げて、集められた魔力は開放されるのを今か今
かと待ちわびて。

ガチリ、と更に深い所にある歯車を回す。

ここでの世界の魔術はイメージに依存している。
それならば

『強く、雄々しく、高らかに
命を育む陽の威光
なれば我等の白も其処に』

目を開けると体から湧き出るように透明な魔力が空へと上がっていくのが分かる。

……留めなきや 意味がない気がするな。
湧き上がる魔力を体に閉じ込めるように。
限界ギリギリまで練り上げて

『開放』

強く発光した後に光の球体が残る。

維持とか無理だろ、これ。

光の球体は掌に収まる程度の大きさ。
しかし体中から根こそぎ体力や氣力を吸われているような感覚がある。
無理でーす、もう持ちません。ほとんど意地で持続させていくようなもんだ。

ギチリ、と体の中から音がした。

痛あ！？ 何だこれ！？

体の中から引き裂かれるような痛み。いや、そんな経験は無いけどさ！

突然の痛みにイメージは崩れ、光も消えていく。
俺にとつて魔術は鬼門なんだろうか。こんなばっかりだ。
世の中の不条理に嘆く大人の様に頃垂れる。

全身がバラバラになるような痛みで動けないだけだがな。

「ちよつと、こきなつづつしたのー?」

蒼香の声が遠くに聞こえる。

そんなに離れてなかつた筈なんだが……。

「何しよつとしてたのセー?」

「維持の……練しゅ……太陽の……」

蒼香の声に何とか返事を返してやりたいが、今は口を開ける事すら痛みに変わる。

頭の奥が焼かれる。腕の芯から捻じ切られる。脚の先から切り刻まれる。

五体がそれぞれ別の方法で痛みに犯されていく。
いつそ殺してくれ。

「いの……馬鹿ユーキ!」

「お、ふつー..」

頬に何かを呑きつけられ吹き飛ばされる。
地面を滑つてよつやく止まる。
痛い……。

「何してんだ、こひあー!」

「むしろユーキが何してるのセー!」

いきなり殴られるという理不尽に対しても起き上りて叫び声を上げるが、蒼香も叫び返してくれる。

人の顔を思いつきり叩くな、形が変わる。

大体、俺が何やってるかだなんて練習しないで言つたお前が一番分かるだろ？」。

「違う！ 維持の練習そのものはビードもいにけど、何をイメージしたかが問題なの！」

うわ、どうでもいいって言い切りやがった。
ん？ 何をイメージして……

「太陽？」

「それ！ よりにもよって何で太陽なの！？ イメージに対する処理が追いつくわけがないでしょ！」

……すまん、もう少し詳しく分かり易く。

それだけのキーワードで分かる奴はそれに詳しい人か、^{エスパー}超能力者だ。

げんなりとした顔で蒼香を見つめる。

蒼香は少し考えるようなしぐさをしてから、居心地が悪そうな顔で顔を逸らした。

こら、ちゃんと話せ。

「……」めん、説明し忘れてた

「よし、1発殴らせる」

小さく呴かれた言葉に即答してやる。
俺の所為でもあるような気がするが、理不尽すぎる。
何か俺に恨みでもあるのかお前は。

「いや、でも結構危ないところだつたし、他に思いつかなかつたか
ら……」

む？

確かにあの全身の痛みは無くなつてゐるけど、それにしたつてもつとこり、平和的な解決法を探して欲しかつた。

頬が痛い……。

いつまでもこの状態でいる訳にもいかないから立ち上がりて蒼香の近くへ。

一瞬、体を震わせて驚かれたことに傷つぐが、仕方ないと直して胡座あぐらをかけて座る。

座らない蒼香を見てみると、不思議あやしな顔をしてゐる。何だその顔は、助けてくれたことに変わりは無いんだから殴つたりしねえよ。

適当に視線を送つてみる。

よつやく蒼香は横に座つて俺の頬に手を当てて、本日3回目の治療である。

「で、何が起きたんだ？」

今回は運が良かつたと言えるけど、あんな痛みが毎回あつたらそのうちショック死するぞ。
さつきまでの自分の状態を思い出しそつとする。
魔術は常に死と隣り合わせってか？
……どつかのゲームに似た様なことが言られてた気がするけど。よつやく治療が終わつたのか、蒼香が当てていた手を放しこちりに向き直る。

「今回のこととは簡単に言つとゴーキの実力不足

む？ どういうことだ？

維持をするための才能が無かつたりとか、そういうことじやないのか？

……不味いな、そのうち才能の所為にして墮落するかも知れん。少し気を引き締めないとな。

心の中で自分に喝を入れて蒼香の話を聞く。

「太陽をイメージしたって言つてたでしょ？ ユーキはそのイメージに呑まれちゃったの。……上手く言えないな。自分より位の高いものを使おうとして逆にやられちゃう感じ？」

要領を得ないが何となく理解は出来る。

レベルが足りないが無理やり使おうとした、みたいなもんかね？ 要するに暴走1歩手前じゃねえか。

「その、位の高いものってのは分からぬのか？ 分からないままつてのは恐すぎる」

「えっと、太陽はもう分かつてると思つけど月もそつだし、分からぬいと思うけど神話とかに出てくるような道具とか人とか。そういう伝説っぽいものに出てくるのは基本的に駄目」

俺らの世界の有名所で言えば北欧神話の大樹ヨグドラシルとか、グングールを持った主神オーディンとか、そういうものかね。

太陽と月も、あの2つは昔から人間たちが何かの象徴として崇めていたりするし、そういう意味では神様と似たようなものなんだろう。

しかし、そんなことは早めに話しておいて欲しかった。そうすれば無駄な痛みも無く済んだのに。

恨みがましく蒼香を見つめるが当の本人は開き直っている。

「まあまあ、練習してる時でよかつたじゃん。それにこんなことがあつたんだから同じ」とはやらないでしょ？ 失敗するのも勉強の内だよ」

少しムカツクので小動物を思い出させるような微笑みを浮かべている蒼香の頭を軽く小突く。

だけど、練習してる時についてのはよく分かる。依頼をこなしてるとあんな痛みが襲つたら何も出来ん。

深く溜息を吐いてしまう。

溜息を吐く回数がこっちに来てから物凄く多くなった気がする。

白髪なんていらないぞ？

……馬鹿なことを考へるくらいには余裕があるみたいだ。

「さて、じゃあ何の練習をすればいいんだ？」

「とつあえず光の球体の維持からかな」

これね、と蒼香は自分の指先に光を灯す。

やつぱりそこからになるのか、と苦笑しながら集中しちつと意識を傾ける。

ふと、もう一度仰いだ空には黒く雲がかかっていた。

申し訳ありません。

やたらと長いですね。

悪乗りして途中で自分でもなに言っているのか分からなくなつて書き直したりしました。

もう少し上手くならないものだらうか、と日々悩んでいる所です。

それでは、また。

雨が降っている。

それはこの世界に帳を下ろす様に、暗く冷たく重いものである。
そんな暗い世界を歩こうとする物好きはおらず、雨は徒々舗装された地面に染み行くだけである。

そんな光景を宿の2階の一室からじっと見つめている人物。
いや、俺だが。

その後、練習の続きをしていたら突然の豪雨。

流石にそんな状況で練習を続けようとするほど俺も蒼香も馬鹿ではない。

一旦散に向かって駆け込んだ。

しかし、それでも濡れ鼠になってしまったので互いに部屋に戻りシャワーを浴びた。覗いてはいない。

シャワーから上がりコートと一緒に買ってもらった部屋着を着て、蒼香がいない間に練習をしていたのだが魔力が尽きたようで、歯車を回そうとしても空回りするだけ。

仕方がないのでベッドに腰掛けて外を見ていた。

「雨は初めてだな……」

こちらの世界に来てからの天気はずつと綺麗な青空が見えていた。雨は結構好きなんだが、こうも勢いよく降っていると陰鬱とまではいかないが少し気が滅入ってしまう。

「暇だー」

何も変化がない世界を見ていて楽しい訳がなく、『ロロロロビッド

の上を転がつてみる。

転がるといつても、ベッドが狭いのでどうしても寝返りを連続でうつている様なものになるけれど。

少しして、気持ち悪くなつたので転がるのを止め、ベッドに突つ伏す。

やることが無いってこんなに苦痛だつたか？

考えてみればテレビもパソコンも無いんだよな。暇だー。

現代っ子である俺にこの何も出来ることが無い時間は苦痛でしかない。

仕方がないのでまた外を見る。

雨は相変わらず強く地面を叩き、世界に絶えず音を響かせている。何てな。

ふと、田の端に何かが映つた。

人……？

雨でよく見えないが、人が傘も差さずに宿の前に立つてゐる様に見える。

こんな土砂降りの中を、傘も差さずに？

奇麗な人もいたものだと無理やり自分を納得させようとするが、思いとは裏腹にそれをじっと見つめてしまう。

目が合つたような気がした。

ぞわり、と全身に寒気が走る。しかし田を離すことが出来ない。体も動かない。筋肉が萎縮して呼吸もままならない。視界が白く染まつていつて

「ユーリー、つて何してんの？」

蒼香の声に意識が戻される。

危ねえ、もう少しで夢の世界へ」招待、みたいな感じだった。

もう一度人らしきものが立っていた場所を見ても、ただ雨が降つているのが見えるだけである。

……幽靈？

魔術があるんだからそんなものが存在していてもおかしくはない。そう思う一方でそれを否定している自分がいる。幽靈といつ存在を、じゃない。

あれは幽靈なんかじゃなく、もつと恐ろしこものだと。そこまで考えて頭に何かが落ちてきた。

「無視はしないで欲しいんだけどな？」

蒼香の手だった。

「どうやら俺が考えてこんでいるのを無視だと思つたらしい。事実、そつなつているが。

向き直ると青いジャージの様なものを着ている蒼香がすぐ傍にいた。こいつ青好きだな。頬が少し膨れている。どうやら立腹らしい。

「すまん、考え方しててな」

とりあえず正直に謝つておく。そのままこうで拗ねられても俺が困るだけだからな。

離れるような気配がないので俺が蒼香と反対側のベッドの端へと移動する。

さて、こいつは何をしてきたんだろうか。

「……夜這いか？」

「窓から放り出すよ？」

蒼香、目が笑つてないぞ。

ジリジリとにじり寄つて来るのはやめる。普通に恐い。

逃げ出そうか謝らうか、迷つていると窓の外が白く染まる。刹那、耳をつんざくよつな轟音が鳴り響く。

「いやあー」

変な叫び声を上げて硬直する蒼香。

……抱きついてはこないか、残念だ。

いやいやいや、俺は何を考えてる。確かに蒼香は可愛いし性格もいい。見ず知らずの俺に世話を焼くだなんてこともしてくれ。しかし、しかしだ。蒼香が俺に対して世話をしてくれるのは困っている人に、とこうものであつて別に男女間のアレやらソレではない筈だ。それで何さ。俺は蒼香が抱きついてくれれば、などと思つたわけか。馬鹿じやねえの。妄想を抱いて溺死しろ！
……うん、自分で考えて虚しくなるな。

枕を抱えて小動物の様に震えている少女を見る。

雷苦手なのか。まあ、珍しくはないな。

苦手なものがあるつてのには少し驚いたけど、蒼香だつて人間だもんな。

「おーい、大丈夫か？」

「『めん……。雨と雷は、駄目なの……』

いまだに震えている蒼香に声を掛けるが返つてくるのは弱弱しい言葉だけ。

少し恐がりすぎじゃないか？

近寄つて顔を覗き込んでも俺の顔を見るだけで、それ以外に反応はない。

「あの日も、こんな雨の日だったの……」

……あの日、というのは正確にはわからないけど、少なくとも良い思い出ではない筈だ。

何も言わずに抱きしめる。

一瞬、大きく体が震えたが特に何もしてこない。

俺が膝立ちな所為で蒼香の顔が胸の辺りにあたるので、抱きしめているという感じはあまりしないけど。ぐずぬ子供をあやすように、頭と背中を撫でてくれる。

……俺から抱きついちゃってるじゃん！

流石に不味いと思い離れようとするが、いつの間にか蒼香の腕が俺の腰に回されていてしっかりと固定されている。

体を離そうと力を込めるがその分蒼香の腕の力も強くなつた。痛い。仕方ないので止まつっていた手を動かして撫でてやる。

随分長い間、蒼香の背中を撫でているような気がするが、どれほど時間が経つただろうか。

雨の音も無く、部屋に備えてある時計の音が微かに聞こえる。もう大丈夫だろ？と、ゆっくりと蒼香から離れる。反応がない。覗き込んでみると田を瞑り、小さく寝息を立てていた。

……寝てるし。

起こなくなつよつてベッドに横にして、自分は椅子に座る。

疲れた……。

時計を見て、蒼香が部屋に入ってきた時間からそれ程経っていないことが分かった。

やつぱり体感時間と実際の時間の差は大きいな。

さて、俺はどこで寝ればいいんだ？

俺の部屋のベッドで寝ている蒼香を見ながら考える。椅子とテーブルはあるがソファーはないのだ。

蒼香の部屋で寝るのも論外。

仕方ない、とテーブルに突っ伏す。

規則正しく時計の針が時間を刻むのが分かる。

……眠れない。

これ以上ないくらいに目が冴えてしまっている。

体を起こして外を見る。雨は降っていないようだ。

気分転換に散歩でも行くか。夜空が見えるかどうかは分からぬが、夜中に散歩なんて中々出来ないしな。

そうと決まれば後は行動するだけ。

部屋着から若草色のコートに着替えて護身のための剣を腰に差す。蒼香を起こさないように慎重に部屋から出た。

人が歩いていない大通りの真ん中を進んで行く。

向かっているのは噴水がある、この町の中央広場である。

灯りが点いている家も多いが外まで喧騒が聞こえてくるところともなく、静かなものだ。

「到着、つと」

昼は子供たちやその親たちの憩いの場所であるここも、夜になるとひつそりとしている。

噴水は流石に止まっている。この世界に複雑な機械の類はないのでこれも魔術で作動させているのだろう。

コツコツと前の方から音が聞こえる。

誰か歩いている？

こんな時間に出歩いている人がいるのかと驚いたが、この町には酒場やギルドがあるから別におかしなことではないと考えを改める。

「今日は。初めまして、だな。浅木勇輝」

不意に掛けられた言葉。

落ち着いた声だ。

声のした方を見るといつの中にか近くに男が立っている。
銀髪で黒いロングコート。身長も一目で分かるほどには俺より高い。
そして、何よりも目を引いたのが、猛禽類のように鋭い目。
体が硬直する。

わざと、同じ……！

「出合い頭で悪いんだがな？」

死んでくれ

ただの散歩のはずだったんだけどなあ？

SIDE : Aoka

目を開けて、最初に見えたのは暗い天井

- ۲ -

パートナーの名前を呼んでも返事は無く、ただ闇へと染み込むだけ。寝ているのかと思って部屋を見回すが、どこにも姿が見えない。

着替えて探しに行こうとクローゼットを開けるとユーキの服。

急いで自分の部屋に戻つて着替え、宿のおばちゃんにユーリが外に

ふと、空を見ると赤い月が嗤つていの わい ように見えた。

硬い金属音が夜の街に鳴り響く。

「む
？」

男の、どこから取り出したか分からぬ黒い長剣を腰の剣で弾き返

した音だ。

しかし、男は止まらずに剣を振る。つ。

2合、3合、4合と打ち合つが、10を超えた辺りで追いつけなくなってきた。

袈裟に振るわれた剣を受け止めようとして、思い切り弾き飛ばされ地面を転がる。剣はどうにか手放していない。

すぐさま体を起こして男を見ると、こちらへ走って来ている。

男は走りながら剣を持ってない方の手に小さな光を灯して空に掲げ、それを振り下ろす。

悪寒が体を突き抜け、体を無理やり捻る。

すぐ横で地面を削る音。

気になるが、男は目の前なので見ていられない。

飛び起きて剣を両手で持ち、思い切り男の胸^{むね}掛け剣を薙^なぐが片手で止められる。

引き戻して袈裟に振るうが弾かれた。負けずに踏み込んで逆袈裟に振るうが軽く逸^{ぬけ}られ、そのまま上段から剣を叩きつけられる。

鍔^{つば}迫り合い。退^ひく技術などある訳が無く、力の限り押すだけである。

「魔力と魔術の後押しがあるとはいえ、ここまで喰らいついて来るとはな」

男から感嘆の声が上がるが、こつちはそれどころではない。

俺が肩で息をしているのに対し、男は息を乱した様子も無いのだ。
怪物かよ、この野郎。

ギチリ、と柄^えを握り潰すぐらいのつもりで剣を持つ手に力を込める。いきなり襲^{おそ}われて『はい、そーですか』と諦められるほど、腐つてないつづーの！

「だああつー！」

力を込めた剣を全力で振つて、弾き飛ばす。

しかし、男はそれに逆らわず後ろへ跳び、先程と同じように光を灯して何かを投げる動作をする。

刹那、何も無い空間から男が持っている剣と同じ形のものが一直線に飛んでくる。

さつきのもこれかっ！

分かつたのはいいが、俺の体は男を弾き飛ばして硬直している。

弾く？ 無理。

避ける？ 動けん。

諦める？ アホかっ！

振りぬいた腕の力の流れに逆らわず、前へ進む。

剣は目前。覚悟を決めて

左腕を、盾にした。

「つ！ がああつ！」

熱が左腕を蹂躪じゅりづんしていく。

それでも止まらない。止まれない。

今の攻撃で死ななかつたことが幸運なのだ。止まることなど出来ない。

全身の血が沸騰しているように体が熱を持っているが、頭だけは冷静になつていて。

剣が届く距離まであと3歩 縮地を使いたいが、疲労と、体勢がメチャクチャなため使えない。

あと2歩 男が立ち止まって剣を構える。迎え撃つつもりらしい。あと1歩 右半身を引いて、剣を構えて出せる限りの力で男に向かう。

0 時間が遅く感じ、今までとは比べ物にならない速度で、男の

胸に向かつて剣を突き出した。

「ギリギリ及第点、どこつたといのうか」

突き出した剣は、男が構えていた剣を裂いて右肩を貫いた。
それだけだ。この男を退けるには程遠い。
男はいつの間にか左手を掲げていて

「じゃあな。恨むなら、気に食わないが運命とやらを恨んでくれ」

変わらない、落ち着いた声と共に断頭台のように振り下ろした。

悪い、蒼香。

そんなことを思つたところの」。

「あああああつー」

裂帛れっぺくの叫び声と、それに続く甲高かんい金属音。

男は肩を貫いている剣を多量の血と共に引き抜くと、すぐさま跳び退る。

俺も誰かに引つ張られるように後ろへと跳ぶ。

助けてくれた人に礼を言おうと振り向こうとしたら、挟み込むように顔を掴まれ無理やり視線を合わせれた。

「ユーキ、大丈夫！？ 死んでない！？ 生きてるーー？」

うおーい。助けてくれたのはいいが、そんなに揺すられると死ぬぞ。
あと、何でここにいるんだよ。

言つてやりたいがガクガクと揺さぶられているので言えない。
仕方ないので目線だけで抗議してみる。

「いや、うん。別に暗い部屋の中一人でいるのが恐かつたとかじゃないよ？」

「はいはい」

ようやく止まつた。

蒼香は顔を真っ赤にしながら膨れていが、そんな中でも左腕の治療をしてくれている。

こんな馬鹿な会話をしている中でも男の行動を見逃さないように注意を払つていてるが、何もせずにただそこに立つていてるだけである。持つていた長剣すら無い。

不審な目で見るも、依然として男に動きはない。

どういうことだ？

そんなことを考えている間に、俺の左腕の応急処置は終わり、蒼香は男と対峙するように立つていてる。

「何で、ユーキを？」

蒼香の問いかけ。少しだけ、声が震えているのに気付いた。

男は答えない。

聞こえていないのか、返答に困つてているのか。俺に確認する術は無すべいが。

沈黙は長くは続かず、焦れた蒼香が尚も続ける。

「何か言つじよー。お父さんつー。」

「はあつーー？」

素で声が出た。

あの男が、蒼香が小さい頃にいなくなつたつていう父親！？
……名前忘れた。

そんなことはどうでもいい。問題は何で俺を襲つたのか、だ。
座つたまま睨んでいると、男は諦めたように口を開ける。

「……白い死神の御使い、とでも言つてしまつか」

「つーー？」

「？」

息を呑む。

蒼香は何のことか分かつていないようだが、俺ひとつてはその言葉
だけで十分だ。

思い出せるのは、同じように突然襲い掛かってきたあの丑い女。
湧いてきたのは恐怖ではなく、強い怒り。自然と声を荒げていた。

「何のために、あんたたちは俺を殺そつとするつー。あいつは一体
何なんだよーー？」

「答えるとでも思つてこるのか？」

聞きたいことは多い。

しかし、バッサリと切り捨てられた。

男の飄々とした態度が癪に障る。

立ち上がりて掴み掛かつてやうりと想つが頭がフリフリする。

「祭壇で待つていろ。どれだけかかってもいい、必ず来い」

それだけ言って背を向ける。

これ以上話すこと無い、と言外に語っている。
しかし、蒼香は尚も追い縋る。

「待つてよ、お父さんっ！」

走つて男の下へ向かうが、いきなり立ち止まる。

よく見れば、蒼香の足元に剣が刺さつてゐる。数センチずれれば蒼香の足を切斷していただろう。

「……それ以上、来るな」

「どうして……？」

「ちらには振り向かず、押し殺した声で制止の言葉を告げてくれる。

男とは対照的に、蒼香は悲痛な声を上げる。

それでも、男は振り向こうともせずに闇の中へと消えていった。

「どうして……？」

「蒼香……」

地面に座り、頃垂れている蒼香に掛ける言葉が見当たらない。

いなくなつた父親が人を殺そつとしているのを見て、気にするなと
いう方が無理だ。

俺がどうやって言い繕つても事実を変えることは出来ない。
あの白い女は誰なのか、目的は何だとか、あの男に聞きたい」とは
色々ある。

祭壇で待つてゐる、ねえ。

あの男が言つていたことを思い出す。

祭壇というのがどこにあるのかは知らないが、少なくともヤマヒロに
けば会えるのは確かだらう。

正直な話、全く行きたくないのだけれども……。

チラリ、と蒼香を見る。先程から変わつた様子はない。
行くことになるんだらうな。

多分、蒼香は追いかけると思うから。

自分の事ながら、この性分をどうにか出来ないものかと悩んでみる
が、どうせ無理なので即座に諦める。

とにかく、今は蒼香のことを何とかしなければならないので、近付
こうとして

目の前が真つ白になつた。

誰か覚えていたんでしょうか……。

鈴谷アキラ、登場。

姿が想像できない人は、某聖杯戦争の赤い方の弓兵を思い出してくれればいいかも。……こんなこと言わないほうがいいんだろうか？

戦闘がどうにも薄い感じがして仕方がないのですが、これからも見てくれればと、思います。
ではでは。

目が覚めたら見たこともない所で寝かされていた。

またあの白い世界に連れ込まれたのかと思つていたのだが、ビリビリ血を流しそぎていたようだ、ホワイトアウト。

蒼香が倒れた俺に気付き、背負つて治癒院　この世界の病院まで連れて行ってくれた、とのこと。

治癒院に世話になるのは2回目である。前回も左腕だったな……。つと、話が逸れた。

ちゃんとした治療をしてもらひて、念のため治癒院内の個室のベッドを使わせてもらつて、朝を迎えた、と。

今は病院の青白い服を着て（何て言つんだこれ？）、ベッドに腰掛け主治医の先生とお話を。

「左腕はまだ痛むかな？」

「いえ、全く」

グリグリと動かしてみたが、特に痛みは無い。

それは良かった、と柔らかく微笑んでいる眼鏡を掛けた治癒師の…

：男？

この人、えらく中性的なのだ。

眼は大きく、鼻もすつきりとして、唇はふっくらと端々しい。よく手入れされていると思われる鮮やかな緑髪は肩に掛かるくらい伸び、手足も長い。

しかし華奢かせという訳でもなく、白衣の上からでも分かんへりこむしっかりとした体つきである。ちなみに胸は無い。

「でも、運が良かつたね。あと少しじれていたら左腕は無くなつていたよ？」

「げつ、本当ですか？」

良かつた。流石に自分の左腕とサヨナラしたくないからな。死んでもいなし、五体満足なのだから不幸中の幸いといったところだろう。深く溜息を吐いて安堵する。

しかし、本当にこの人の性別はどうちだ？

馬鹿で失礼なことだと分かつてゐるが、それでも氣になる。

「……あの、失礼ですが、男性……？」

「セヒ、ジカラでショウネえ？」

上手く避けられた。
怒られるかと思つていたら、依然として柔らかな笑みでじちらを見ている。
大人だ……。

さて、それはそれとして。

「すぐに退院出来るんですよね？」

「やうですね。2・3日は左腕に強い負荷を掛けてはいけませんが、特に問題ありませんよ」

左腕で重いものを持つたりしなければ大丈夫か。

そうなると荷物持ちが出来ないな、と思うが怪我人にそんなことを

やらせるよつた奴ではないと、考へを改める。
ん？ セツニエバ……。

「あの、蒼香は？」

「君を連れて來た子だね？ 今は宿に戻つてもらつてゐよ。そろそ
ろ君を迎えて……。ああ、來たよつだ」

「はい？」

何も掛けられていなし、ベッドの頭のほつての壁を見ながら言つてい
る。

……電波さん？

失礼なことを考へているとパタパタと、小走りする音が廊下から聞
こえる。

え、マジで？

足音の主は俺たちがいる部屋の前で止まり、扉を勢いよく開けた。

「ちやんと生きてるよなー？」

「生きてるから、大声を出すな。ウルサイ

治癒師の先生が言つた通り、壊すよつた勢いで扉を開けたのは蒼香
だつた。

予知、じやなくて壁を向いていたから透視だろつか？

ちよつとした動作から色々な情報を得ようとしている自分に気がつ
いて、苦笑する。

前まではそんなことをしたことは無かつたといつた。勿論、する

必要が無かった、というのもあるが。

自分も変化しているのだろう。良い方向か悪い方向かは分からぬ

けれど。

「急に笑つて、どうしたの？」

「いや、なんでもないわ」

首を傾げながら聞こえてくる蒼香に、適当に返しておぐ。別に言つても
どのことでもないし。

「あと、お迎えも来たよつですしお院ですね」

「お世話になりました」

この部屋に荷物は無い。

蒼香が一度宿に帰るとき、全部持つて行つたらしい。全部といって
も剣だけだけど。

……あれ？ ポートは？

「はい、これ」

蒼香から渡されたのは俺が宿内で着てている部屋着。
何でも、ポートがズタズタになつていて、服屋で使えるかどうか
見てもうつているのと同じ。

……直せるのか？

少し疑問も浮かぶけれど、些細なことと振り払う。使えるものは使
う主義だ。

……そのせいで物を捨てられないけど。

いつまでもこうしてはいられないのと着替えようと服に手を掛けて

「いや、出でけよ

それぞれベッドと椅子に腰掛けて談笑している2人に向かって言ひ。声をかけたら示し合させたかのようにピタリと止まる。仲良いな、オイ。

「別にお構いなく」

「俺が構うんだよ！」

疲れる……。

何でこんなに怒鳴らなきやいけないんだか。
渋々、といった感じで蒼香が出て行く。
いや、なんで残ってるのさこの人は。

「先生も一応廊下にお願いします」

「じゃあ私がれつきとした男だと言つたひどいですか？」

フンワリと、花のよつて笑いながら問ひ掛けてくれる。

男だと言つたら？

そんなこと決まつている。

「せうやつて俺に言つてくる時点で信用できないので、素直に出て
行つて下さ」

「コリと笑つて一蹴してやる。

正直、自分の笑顔を鏡で見ると気持ち悪かったので作り笑いはしたくないんだが、笑い顔は本来攻撃的なものだって聞いたこともあるし、言うことを聞かせる為には仕方ない。気持ち悪かろうが、なん

だろうがやつてやるやー。
主に俺の平穏の為に！

「……仕方ありませんね」

やがて諦めたのか、廊下^{らわ}に出て行く。
ちょっと虚^{むな}しいが、勝つた！

待たせるわけにもいかないのでいそいそと着替え始める。
ズボンを穿き換え上も換えようとして上半身裸になつて、蒼香^{あおか}が
んなに素直な奴だつただろうかと突然頭に浮かんだ。
チラリ、と横目で扉を見るときだけ開いている。

隙間から見える眼がふたつ。耳を澄ますとひそひそと話し声が聞こ
える。

……野郎の裸なんて、見たつて楽しくないと思うんだけどなあ？
視線を気にせずに半袖の白いTシャツを着てしまつ。
俺は気付かなかつた、つてことでいいか。面倒だし。
ベッドの周りを見て私物が何も無いことを確認、扉を開ける。
窓際で素知らぬ顔で談笑している2人。

「終わりましたか」

「ええ、おかげさまで」

今気がついたといつ風に言つてきたので、少しだけ皮肉を込めて言
い返す。

……そういえば。

「先生つて透視か何か使えますよね？ 何で懲々^{わきわき}？」

「勿論、直接見たほうがスリルがあるからです！」

よくぞ聞いてくれました、と言わんばかりに胸を張つて宣言。自爆してくれた。

まともな人つて、いないのか？

「頭痛え」

「おや、それは大変ですね。お薬でも出しておきましょうか？」

あんたの所為だ、あんたの。

というか薬つてちゃんとあるんだよな、この世界。

魔術が普及してるからそんなもの必要無さそうなんだけどな。重い病気は治せないのか、それとも数が少ないかのどちらかだらうな。何せ自分の属性以外の魔術はほとんど使えない訳だし。足音が廊下に響く。

特別忙しい、という訳ではなさそつだ。

詰め所？ を通りかかったので中を見るが、看護師さんたちが書類仕事をしながら談笑する程度には余裕がある。

大きな怪我は冒険者や傭兵が気をつけているだらうからほとんど無いのだろう。

だけど、病気は？

「……って重い病気とかも治せるんですか？」

「そう、ですね。比較的軽度の患者さんなら治すことが出来ます」

「あ……、すみません」

先生は苦い顔をしている。

当たり前だ。重度の患者は治せないと、自分で言つてしまつたのだ

から。

軽率な質問だつたか。

「人は、必ず死にます。遅かれ早かれ、ね。私たちが出来ることは苦しまないようにしてあげることぐらいです」

誰も苦しみながら死にたくないでしょう？ と、柔らかい笑みのまま問い合わせてくる。

だけど、気付いてしまった。

先生の笑顔が、ほんの少しだけ歪んでいることに。当たり前だよなあ。

この町の医者としている訳だから、当然親しい人もいる訳で。その人たちが自分たちでは治せない病気に罹つてしまつたら？ ……いや、これ以上詮索するのはよそつ。

そんなことを考えてこりつちに治療院の玄関に着く。

「次は友人として来て下さい。暇な時ならお茶くらい出しますよ。ヨーキ君も、怪我なんてしないで」

「うん、また来るよ」

「善処します」

苦笑いをしながら返す。俺も怪我なんてしたくないけど、実力が全く伴っていないからな。

蒼香と先生は一言二言、声を抑えながら話してガツチリと手を握っている。

何の話だろうか？

少し気になるけれど、懇々たる声を抑えていたのだからあまり聞かれたくないことなんだろう。

話が終わつたようで、蒼香が近寄つてくる。

先生を見ると小さく手を振つている。

蒼香と一緒に手を振り替えして歩き出す。

「まずは宿に戻るよー」

「了解」

良かつた、いつもの蒼香だ。

もつと氣落ちしているかと思つていたんだけど、良い意味で裏切られた。

空を見上げる。今日も快晴、雲はほとんど見当たらない。

太陽の昇り具合から見て昼頃だろう。

大通りを歩いているとパンを焼く匂いや、少し焦げた様な臭いが漂つてくる。ついでに怒鳴り声も聞こえる。

また焦がしたの！？ とか、またお皿割つたの！？ とか。

どうでもいいけどジッ娘つて実際にいたら迷惑なだけだよな。

つと、宿に到着。

中に入ると結構な人数が昼食をとっている。

正直、朝も食べていないから早めに昼食を頂きたいのだけど、蒼香は脇目も振らず階段を上つていく。

小さく溜息を吐いて2階に上がつた蒼香に付いて行く。

蒼香が入つたのは俺に割り当てられた部屋。

話し合いが先なのね。

自分の思つた通りにならぬことに、少しだけ辟易しながら部屋に入つて後ろ手でドアを閉める。

刹那、小気味いい音をたてて顔の横のドアに何かが突き立てられる。

「……は？」

呆けた声。蒼香のものではない。
ゆっくりと田の前の人物を見る。

逆光で蒼香がどんな顔をしているのかは見ることが出来ない。

「さて、どうこうことだ?」

努めて普段と同じように振舞う。

肩を竦めて、苦笑いで。

1歩近寄ろうとしたら、蒼香の右腕が跳ね上がった。

3度、位置は顔の右、左肩の辺り、右脇の辺りで音が鳴る。

「動かないで」

青と緑のナイフ、か?

部屋の中でナイフなんか投げるんじゃねえよ。誰が弁償すんだ?
酷く場違いなことを考えているのは分かっている。現実逃避が癖になつてゐるな。

「私はお父さんを追うから、ユーキは、来ないで」

ひとつひとつ、自分で確かめる様に放たれる言葉。
だけど、その言葉は大体予想通りのもの。

「馬鹿が、お前は。狙われてんのが俺なんだから、ビートじょうが
危険なことには変わりないんだよ」

残念なことに、俺が進む道には死亡フラグが乱立しているんだな。

白い死神とかお前の父親とか白い死神とか。この世界は優しくないね。主に俺に対して。全部投げ出してしまえばいいのかもしれないけれど、そんなことは出来ない。

俺にだつて意地とプライドくらいはある。……むづきなもんだけどな。

「つ、私はユーリを死なせたくは、ないんだよ」

むしろ現在進行形でお前に殺されそうだよ。

やぶ
藪蛇つつきそっだから言わないけど。

視線だけ動かして、蒼香の両手を交互に見る。

確認できるのは右手に1本、左手に2本のナイフ。全部青色である。

「変らないって言つてんだろうが。むしろ俺一人でいるよりか、誰かといった方がよっぽど安全だと思つがな」

1歩踏み込む。

蒼香の左腕が跳ね上がる。

踏み込んだ足に突き刺さるナイフ。

足が無くなつた様な感覚。

声を上げて泣き叫びたいが、無理やり噛み殺して蒼香を睨む。

逆光で見えにくいのは変わつていない。しかし、蒼香の表情は。

「はつ、今にも泣きそうな顔しやがつて」

言葉にして、放つ。

笑つちまうね。

能面の様な無表情だつたらそれはそれで嫌だけど。

そんなことを言つてから、なら覚悟しておけつづけ。

また、1歩踏み込む。

今度は腕は振るわれない。
この部屋はそんなに広いわけじゃない。

蒼香が立っている場所まであと一歩といつたところだ。

「誰かといふってことなら、あの商人の人でもいいんじゃない？」

商人？ ああ、バルドスのおっさんか。

あの人なら事情を話せば何とかして貰えるとは思う。
だけど

「あんなおっさんよりお前の方が良いに決まつてんだらうが。
大体やることが中途半端なんだよ、お前は。態々ここで俺を突き放す様に振舞うんじやなくて、何も言わずにひきと追いかけられれば良かつたんだよ」

ほとんど感覚が無い足を引きずりながら一歩。

蒼香の目の前、手を伸ばせば届く距離。

俺よりも小さなその体に、どれ程の思いを詰め込んでいるのだろうか。

「ユーキに、何が分かるつて言つのを……」

ポツリと呟かれた言葉。

それは拒絶。自分のことなど分からぬ、と決め付けて壁を作つているのだろう。

その通りだ馬鹿野郎。

「俺はお前じゃないんだから、分かる訳がないだろ」

「じゃあもう私に関わらないでー お願ひだから、逃げて……」

小さな叫びと、大きな咳きが田の前の少女から発せられる。
声が零れる。

どうやらふむけている場合ではないようだ。

一回だけ、深く溜息を吐いて蒼香の髪をひとつ撫でる。
抵抗も無く、柔らかい手触り。

「悪いな。俺もお前が心配なんだよ」

子をあやす様に小さく、それでも聞こえるくらいの大それで言つてやる。

言つたのは本物のことだ。
田を離すとそのまま消えてしまつのではないかと思つくりこに傳く
見える。

本来なら、別に蒼香じやなくともいい筈なのだ。

俺の目的はあくまでも帰ることであつて、別に英雄になつたり一国の主になつたりすることぢやない。

適当に蒼香について行つて、帰る方法と手段を見つけて。区切りのいいところで帰るつもり、だった。

でも

「同情なんかぢやない。お前が心配だし、何よつやうれつぱなしつてのも気に食わん」

命を助けられた。

取り成してもらつた。

世話になつた。

慟哭ヒヤクを、聞いた。

だから。

「最後まで責任取ってくれよ、パートナー相棒」

俺をこの世界にいたいと思わせたのはお前なんだから。

いつも、2週間ぶりのズックです。

書き出せればスラスラと字数が増えていくのですが、中々難しいものです。

評価、感想を下さっている方々、ありがとうございます。励みになります。

また、読んで下さっている方々にも感謝を。これからも頑張ります。ではでは。

あの後、蒼香は泣き出すわ、それを聞きつけて宿の人気が来て誤解されるわで散々だった。

ナイフが刺さった足は凍つてるし。

いや、確かに凍つてたおかげで出血もそんなになかったんだけど。溜息しか出ないね。

さて、結局俺も一緒に蒼香の父親 晓^{あさひ}を探しに行くことにさせたのだが、正確な場所は全く分からぬ。
ただ一言、“祭壇”で待っている、と言われても想像もつかない訳である。どうしたもんかね。

「ユーキ、ユーキつ。これはー？」

「……田のやり場に困る服だな」

試着室から出てきたのは、赤いチャイナドレスっぽい服を着た蒼香。丈^{たけ}の長さが特別に短いということはないが、大きくスリットが入っているのでスラリと伸びた健康的な脚が見えている。
胸元が少し開いているが、蒼香の慎ましい胸では可愛らしさはあっても色氣は無い。

「何か変なこと考えてなかつた？」

「いや、何も？」

ヒタリ、とどこからともなく取り出したナイフを首に当てられた。目が笑つてないぞ。

今何をしていたのかといつて、俺のパートを返してもひつままで暇つぶしとこう名田の試着会である。

主に蒼香の、だけだ。

動きやすそうな短めのパンツ（下着じゃないぜ？）から、どこの貴族かと聞きたくなる様な煌びやかなドレスまで何でも着ている。

「……これ、こつまでやるんだ？」

随分長い間ここで待つて居る気がするんだけど。

最初は自分も何か着てみようかと物色していたのだけれども、いついつことに興味が無かつたのですぐに飽きた。

蒼香は……とりあえず何でも1回は着てみる、みたいな感じで片っ端から服を取つていつて試着室に籠つて居る。

「はこよ、お待たせ」

いつも通り店の奥から出してきたのはマントを畳つたときのいたおばさん。

前回と同じHプロン姿でコートを持ってくる。

「あ、終わったー？」

いつの間にやら試着室に入つていた蒼香が顔だけ出して聞いてくる。

わざと服を着る。風邪引くぞ？

おばさんからコートを手渡される。

左袖は元通りと並ぶ位に綺麗に直されている。

「ああ、蒼香ちゃん。ちゃんと直したよ。あんなにズタズタになるくらいのことをしてるとだから、鉄板でも仕込もうかとも思つたん

だけどねえ」

慌てて触つて確かめるが、布の感触しかしない。

良かつた、改造はされてないようだ。

鉄板なんか入れられたら重くてどうしようもないからな。
羽織つてみて、不具合がないか確かめる。

全く分からぬいくらいに修繕されているので問題ない。見た目も、恐らく言わなければ新品と間違えそうな程である。

ここまで綺麗に戻せるのなら、こここの町の人たちは随分物持ちがいいんだろうな。

向こうじや破れたりすれば直ぐに捨てるもんなあ……。

試着室から蒼香が出てくる。

どうやら着替え終わつたようだ。

「いくらですか？」

「左袖だけだつたからね、銅貨20枚でいいよ」

高いんだか安いんだか、と悩んでいるうちに支払いが終わる。
多分安いんだろうが、相変わらずこの物価は分からん。

「ほら、まだ買つものはあるんだから。さつと行くよ」

「はいよ」

また来てね、とおばさんの声を背に受けながら外へ出る。

しかし、買つものか。

ゲームのように鎧みたいのを買つた方がいいんだろうか。
さて、考えてみよう。

訓練はおろか、体も鍛えていない一般人が、鎧を着込んで満足な動

きが出来るだらつか？

答え……無理。

どれだけ重いのか知らないけど、少なくとも鉄製のものは無理だろう。

皮の鎧とかなら平氣だらつか？

悩んだまま歩いていると、後ろから騒ぐような声が聞こえた。

好奇心に釣られて振り向くと、町の入り口の方に体を赤黒く染めた大男が見えた。

「つて、バルドスのおっさん！？」

蒼香に一言入れて、慌てて駆け寄る。

上半身は何も着ていないおっさんの右半身は、ペンキでもぶちまけたかのように色付いている。

多分、血だらけ。おっさんの血か、返り血かは分からぬが。

「ん？ むお、ゴーキか」

「いや、何でそんな普通なんだよ」

片手を上げて陽気に挨拶をしてくるおっさんにツッコみを入れる。よく見れば血が乾いているし、新しく出ている様子も無い。おっさん自身が怪我したわけではない、と安堵するがあまり良い気分ではなかつた。

「あー、とつあえず洗つてきていいか？」

「やうだなー、田立つじ」

おっさんに氣を取られて分からなかつたけど、随分人が集まつてきている。

「この世界も野次馬は変らない、と。

そそくさと逃げるように路地の奥へと向かうが、身長が2メートル程あるおっさんが隠れるわけもなく、むしろ立っていた。

「で、何で血塗まみれで？」

裏口から宿に入つて水場（シャワー室のようなもの）を使わせてもらい、1階の食堂の円卓に着いて経緯の説明をしてもらひおつといふ。

おっさんの鍛えられた上半身が自じ己己主張しているが、無視。別に野郎の裸を見ても楽しくない。

「……まあ、ちょっとしぐじってな」

武器の素材が獲れる貴重な魔物の噂が流れたそうだ。それを聞きつけたおっさんは、一目散に現場へ行つて徹夜で待つていたが魔物は現れない。

明け方に盗賊の集団に襲われ、徹夜でフラフラだつたおっさんは力加減を間違えて何人か武器の頑固な汚れにしてしまう。

近くに水場も無かつたので返り血も流せず、そのまま戻ってきた、と。

まとめるとこんな感じか。

「なんとまあ、典型的な罷ばいで」

「やつぱつそいつ悪つか？」

おかしいとは思つたんだよなあ、とぼやいてい。

偶然つてことも有り得るが、タイミングが良すぎると飯がする。

……その所為で何人か犠牲になつたんだが。

「……殺したことには何も言わないんだな」

「ん？…………まあ、俺がやつたわけじゃないってのもあるけど、そういう世界だつてことも頭には入つてるから」

実際、殺さなければ殺されるつてことも経験したし。未遂だけど。正直すぎるだろ、と笑われたけど本音だから仕方ない。

蒼香は口を開かずに眉を顰めている。

頭で理解しても納得出来ないんだろう。

「嬢ちゃんは、ダメか」

「…………はー」

耐えかねたおつさんが蒼香に話を振るが、一言で終わつてしまつ。いや、場を持たせるというより確認か。

「嬢ちゃんはあれか、魔物とかでもダメか？」

「…………少し」

先程よりも長い沈黙の後の返事。

いや、でもお前、肉とか普通に食べてたし、あの狼だつて

「肉とかは食うのは平氣なのか?」

「……はい。それと同じ」とだとは、分かつては、いるんですけど

大きく息を吐くおっさんに対して、縮こまつしていく蒼香。
何か、厳しい父親に叱られているちよつと真面目な娘みたいな感じ
だな。

おっさんはその大きな手で蒼香の頭を乱暴に撫で付ける。

「別に価値観を押し付けてる訳じゃねえんだ。そんなに縮み上がら
なくてもいい。

嬢ちゃんにだつて譲れないもんがあるだらうしな。
ただ、あれだ。大切なものは紐^{ひも}を繋いででも護つておけよ?
失つた後に嘆いたつて戻つてはこねえからな」

「……っ、はい!」

蒼香は呆けた顔をした後に元気良く返事をした。
笑つて俺を見ている蒼香。
こつちみんな。正確に言つと俺の首辺りを見るな。
席を立つて、少しづつ近寄つてくる。
手に何を持っている。紐つていうか縄だら、それ。
蒼香の手にはいつの間にか頑丈そうな縄が握られていて。
恐くないよじやねえよ。普通に恐いわ。
目は笑わずに、ゆつくりとにじり寄つて来る。
ちょつ、おっさん笑つてないで助けてくれよー?
近くにいる味方には見放され。

「や、これつけて」

青色のアクマがワラッテいた。

俺はノーマルだ！

「痛あ……」

蒼香は「ひら」を恨みがましく見てている。
自業自得だと鼻で笑う俺の頭も痛みを主張している。
少し騒ぎすぎだ、と宿のお姉さんに殴られました。グード。
それを見ていたおつさんは更に声を上げて笑っていた。

「で、ゴーキたちは何してたんだ?」

「ああ、買い物だよ。他の町に行ひりと思つて」

他の町つていうか、多分旅みたいになるけど。
何せ田的で分からぬもんなあ。
あー、目的地と言えば。

「おつさん、祭壇つて聞き覚えある?」

「祭壇? 儀式とかに使うあれか?」

やつぱりそういう認識だよなあ。
特定出来るようなものではない、ヒ。
結局どこに行けばいいんだよ。

「あー、まあ細けえ」とは分からねえが、町を移動するんだり?
俺も一緒でいいか?」

「俺はいいけど?」

蒼香に視線を送る。

「うん、私もいいよ」

確かに領いて、はつきりと返事をする。
じゃあ決まりだな。

「おれはバルドス。嬢ちゃんは？」

「蒼香です」

呼び名だけの自己紹介。

しかし、しつかりと手を握り合っている。

本名を言い合うことだけが信頼の証ではないことだね。
領いていると2人に変な目で見られた。何でだ。

それはそれとして。

「ここから一番近い町は？」

「つて、目的地も分からぬとしてたのか！？」

おっさんに驚かれるが、申し訳ない。全部蒼香に任せっきりだった
な。

仕方ないといった感じで丸められた紙を出してテーブルに広げる。
紙には線や、大小様々な点が疎^{まば}らに描かれている。

「いいか？ 今、俺たちがいるのは大陸の南の地方、更にその中で
も南にある町だ」

指示された場所を見ると、この町の右前らしきものが書いてある。

ふむ、ここは南の方だったのか。

……南半球だろうか、北半球だろうか。

かなりどりでもいいことを考えながら話を聞く。

「一番近いのは……、北へ徒歩で3日つてとこだな。途中に農村や小さな集落みてえなのはあるだろうが、町つて言えるのはこじぐらいだ」

……ん？

蒼香たちがいた町はどうなんだ？

確かめようと蒼香を見れば、人差し指を立てて口に当てる。

おっさんからは見えない位置でこいつそいつ。

黙つてろ、ね。

おっさんに知られて困る」とはないんだろうが、他に人がいるからな。

用心しておくに越したことはないんだろう。

「商売道具は馬車で送るとして、ついでに乗つていいくか？ 乗り心地は最悪だがな」

「あー、歩いてもいいかな？」

蒼香とおっさんに聞いてみる。

面倒なのは分かつているが、少し町の外も見て歩きたい。

うん、乗り物に弱いつてのもあるけどな。

遠足とかのバスでいつも前に乗せてもらつて、それでも酔つてたくらいだからな。

あれ、けつこう苦しいんだよな……。

嫌なことしか思って出せないので強制的に思考を打ち切る。

「私はいこよー。」「だから出るのなんて初めてだし」

「まあ、俺も元々そのつもりだったからな」

特に否定的な意見は出なかつたので決まり。

しかし、3日か……。旅の途中つて風呂とかどうしてんだらうな。今日は小さな村があるらしいから水だけでも使わせてもらおると信じて、山越えたりするときは……、って。

蒼香を手招き。

「水の魔術で湯浴み的なことは出来るのか?」

「うそりと小声で。

「あー、うん。……冷たいよ?」

経験者かよ!?

しかも水のままかよ!

風邪とか引かんようにしなきゃな……。

そうすると必要なものは飲料用の水と食料と……。

この気候は穏やかだからあまり気にしていなかつたけど、防寒具は必要だらうか?

「楽しそうだね」

「不安もあるけどな」

蒼香の微笑みに笑つて返す。

何せ旅なんて初めてだ。不安もあるが、それ以上に好奇心と期待が大きい。

こんな気持ちは遠足や修学旅行以来だらうか。

いやはや、危険なこともあるってのに何考えてるんだらうね。

「よし、じゃあ出発は明日の朝でいいな！ 僕も荷物を送らなきゃならねえし！」

おっさんはいつも通りの大きな声で締めくくつて席を立つ。
俺たちも買い物の続きをした方がいいだらう。服屋はもう行きたくないが。

何で女人の服選びというか、買い物は長いんだろうか。そりや、みんながみんなそうって訳ではないんだろうが。

まあ、いいとして。

「蒼香ー。あと買つ物は？」

「んー、日持ちする食べ物と、薬も少し買つておかないといけないかな？」

散々ヨーキにぶち撒けたからねー、などと言われる。
記憶にないから、きっと氣を失っている時に使つてくれたんだと思う。

「この世界の薬は俺にとって馴染みがある風邪薬というか解熱剤やらその他諸々もあるが、やはりとか魔術が込められた薬もあり、例えば傷の治りが早くなったり、一時的に力を強めたりするものがある。

値段はピンからキリまで、簡単に作れるものもあれば大掛かりな用意をしなければならないものまであるところだ。
席を立つて、それ程人がいない宿から出る。

昼過ぎだから冒険者たちはギルドに依頼を見に行つたりしているんだろう。

そういうや、まだ1回しか依頼を受けてないんだよな。

今の蒼香と同じランクになるのにどれだけ時間かかるんだか。溜息を吐いて、先を行く蒼香をフリフリと追つ。

「なに辛氣臭い顔してるのや」

「いや、ちゅうとな」

ランクを上げるつてことはそれだけ危険が増えるつてことだ。剣を振るのも魔術を使うのも下手くそだし、蒼香程ではないにしても殺すことには躊躇ためらいがある。

蒼香の父親にされたように誰かに剣を向けられた時、俺は剣を振れるだろうか？

あの時は夢中だった、としか言い様がない。

冷静になつて振り返つてみると馬鹿のようなことしかしていけない。なんだよ、左腕犠牲にして突つ込むとか。自殺志願者か？ またネガティブな方向に向かつていることに気付いて一旦思考を切り替える。

怪我をしたとは思えない左腕を意識する。

あの先生、変な人だつたけど腕は良いんだな。

今更ながらそんな事を考える。

「左腕が使えないからあんまり買づなよ？」

「分かつてるよ」

フラフラと寄り道して、それでいてしつかりと進んで。そんな風に歩いていく「うじやないか。

ふと見上げた途は、透き通るほどに青かつた。

……申し訳ないです。

時間がかかるわ、短いわで酷い有様です。
しかも話はそれほど進んでないし。

難しいなあ……。

「噛み合わせた歯車を回す。

奔る様に鋭く、燃える様に苛烈に。

体内を駆け巡るようにして魔力で満たされる。

イメージは螢光灯の光。

持続ということに関してならピッタリであろうそれを、頭の隅で思い描きながら魔力を練る。

形は球体。持続時間は、目標10秒。

イメージで練り上げられたそれを指先から解き放つ！

「そおい！」

「……20点」

「いや、5点くらいじゃねえか？」

掛け声と共に人差し指から放たれた小さな光は、一際強く発光して数秒も持たずには消えてしまった。

半袖の白いポロシャツにスカート姿の蒼香と、上半身裸で大きな荷物を背負つたおっさんが採点してくれているが、酷いと言わざるをえない。

2人揃つて溜息を吐くな。じつちが悲しくなる。

「俺以上に下手な奴つて初めて見たな……」

悲しくなるくらいに澄み渡つた青空の下で、おっさんの小さな咳きが漏れたのである。

現在町を出てから徒歩で5時間といったところ。

周りは平地、右手には森があり、更に奥には連なる山が見える。左手は平地が続いているが、小さく森の様なものも見える。のどかだねえ。

そんなのどかな風景の中、若草色のコートを着た男が変な叫び声を上げている。俺だけだ。

いや、魔術の練習してるんだけどな。これがさっぱり進展がない。おっさんも魔術師だそうなので見てもらいながら練習しているが、結果は惨敗。

持続が下手だというおっさん以上にマズイらしい。

「こればっかりはセンスの問題だからねー。続けていればそれなりに出来るようになるとは思うけど……」

「人のこと言えねえが、ヨーキは壊滅的にセンスがねえな！」

豪快に笑うおっさんだが、当の俺からしてみれば笑い事じゃない一つ。

レジストの為に練習してた時は頑張れたんだけどなあ。

ここにきて才能の壁が立ちはだかるのか。

……高望みしそうか。そもそも魔術が使えた時点で俺としては十分すぎるほどなんだし。

でもなー、最大火力で殲滅！ みたいなことをやってみたかったのになー。

使う機会はないだろうけど。

何となく物騒なことを考えながら、もう一度魔力を練り直し始める。

……ちょっと無茶してみるか。

「蒼香ー、フォローようじーー」

適当に声を掛けておいて集中する。
イメージは数日前にボロボロにされた太陽。
ハードルが高すぎるような気もするけど、いつかきっと出来る口が
来ると信じて！

『開放つー!』

白い輝きが手の中に生まれる。

ギチリと全身が軋む。

輝きは強くなり球となって。

左腕が切り刻まれる。

球体は手からほんの少し離れて留まり。

右腕が捻じ切られる。

その身に満ちた魔力を溢れさせる！

もう無理！

「ツ、アアあああああつー！」

目の前がチカチカして、今自分が立っているのかさえも分からない。
体を削ぎ落とされ、潰され、掻き回されていく。
視界は闇に包まれて、声も出なくなつた。

ふと、闇の中に一條の光が見え、反射的に手を伸ばして

「あがつー！」

強い衝撃と共に体が吹き飛ばされた。
前回より飛距離が長く感じたのは氣のせいだろうか。

地面にうつ伏せに倒れながらそんなことを考える。

前回分かったことだけど、この痛みは集中を解いた後の方が強く感じる。

じゃあ集中解かなければいいんじゃね？と思つて頑張つていたが痛みで強制的に引っ張られてこの有り様。

「おーい、生きてるか？」

生きてるよ、一応。

おっやんの声に心の中で返事をする。ようやく体の感覚が戻ってきた。蒼香にやられたであらう横つ腹が痛い。

世界を狙える拳だな、後から効いてきた。死ねる。倒れたまま悶絶していると体が浮いた。ビリヤリヤリおっやんと米俵の様に担がれているようだ。

ちよつと荷物の上に乗つかるような形である。

「ゴーキつて物凄く馬鹿だよね」

「つむせこ……、少し悔しかったんだよ」

おっやんの後をついて歩いておかれたら多分死ぬよな」ということを言われる。

今更だけど、あれで放つておかれたら多分死ぬよな。

蒼香に感謝だな。引き換えに受けたダメージも中々のものだが。

青空の下をリズム良く歩いていく。

……やべ、おっやんの微妙な上下の揺れで気持ち悪くなつてきた。

「おひさご、降りしてー」

「お？ もう大丈夫なのか？」

大丈夫じゃないがそれ以上に気持ち悪い。

おっさんの肩からゆっくりと地面に降ろされるが、どうにもまだ脇腹が痛い。

「嬢ちゃん、治してやれよ。」そのままじゅ田が暮れちまつ

脇腹を擦つているとおっさんが見かねて助け舟を出してくれた。ナイス。

仕方ないと言わんばかりに大きく溜息を吐いて、蒼香は治癒の魔術を唱える。

ここ数日で何回これの世話をなったことや。

「無茶しそぎ。心配するしつちの身にもなつてよね

「すまん」

でもなー、少しくらい無茶をやらんとどうじょもなさそつだし。何せ本職2人に壊滅的だなんて言われたんだから、人の何倍もやらないきや同じ場所に立てないだろうよ。

「そうだな……。参考になるか分からねえが、俺は特定の魔術なら持続は長いほうだぞ」

「……どうこいつことだ？」

治療を見ていたおっさんが話しへ入ってくる。
俺の問いには答えず、おっさんは背の荷物を降ろして少しだけ離れて立ち止まる。

「ふんっー。」

「気合と共に地面を強く踏み締めると同時に地面が隆起して、巨大な何かが回転しながら飛び出す。

回転するそれを掘んで切つ先をこちらに向けてきた。

「土の基本性質“造形”。相性が良かつたんだうな。自分の武器を造ることだけは持続も簡単に出来たぜ！」

おっちゃんが持つているものは戦斧ハルバーをおっちゃんのサイズに合わせて大きくしたものだった。

大戦斧、とでも呼べばいいのだろうか。

2、30キロはあるであろうそれを、軽々と手で扱っている。

さて、相性ね。

俺に相性が良いものがあるかどうかなんて分からんぞ？

そもそも主属性が“無”なんだから、相性が良いとしたらそっちの方だろ？

よりもよつて未だにその効果が分からないものが自分の主戦力だなんて。

「難儀なもんだな」

「全くだね」

チートみたいな性能のお前が同意するんじゃない！　余計に惨めだわ！

治療を終えた蒼香から返ってきた言葉に対しても少しだけ悲しくなった。

「お前、……俺は放置か？」

「あ、悪い」

おっさんのが呆れた顔をしてこちらに戻ってきた。

先程造った大戦斧を持つていないことから考へると、どうやら自由に造り壊しが出来るようだ。

「やうこや、おっさんが使えるのは土だけなのか？」

魔術師だつてことは聞いたが、詳しいことはぜいぱつ聞いてない。おっさんは荷物を背負つて俺たちに先へ進むよつと促している。

「昔はな。鍛冶やつてる内に火も使えるよつとなつた

へえ、後天的な属性持ちなのか。
俺も増えないだらうか……。

火とか風とか、格好良さげなやつ。

今のところ使える魔術が発光だけつて何だよ。俺に蛍光灯にでもなれとでも言つのか？

……持続出来ないから蛍光灯以下だな。

「まあまあ。コーキはコーキのペースで、だよ」

「おっ、嬢ちゃんの言つとおりだ？ 無茶したからつてすぐ強くなれる訳じやねえからなー」

後ろ向きな考え方をしていたからだらうか？

蒼香とおっさんが慰めてくれた。

まあ、俺だつて出来ることなら無茶なんてしたくない。

したくはないんだけど、蒼香の父親にまた会わなければならぬ」と
思つと

「やうひなきや死ぬだけだもんな……」

生憎と理不尽な理由で殺されるのはよしとしてないんでね。
足搔けるだけ足搔いてやうひじやないか。
それにはまづ……。

「じゃあ、5秒を目標に頑張りつか

「だよなあ……」

地道に行くしかないようだ。

バルドスはテフオで上半身裸。たまにランニング。

「……でかつ！」

「まあ、こっちの地方では2番目に大きな町だからなあ」

目の前にあるのは城壁ように聳え立つ大きな壁と、兵士が並んでいる人を1人ひとり身元の確認をしている。

歩き始めてから3日目の昼頃。

旅は順調に進み、予定よりも少しだけ早く俺たちは町に着いたようだ。

前の人たちに倣つて列の最後尾に並ぶ。

これほど大きな町だ。人や物、情報も多く集まるだろう。だが……。

「何かピリピリしてない？」

「確かに。少し雰囲気がおかしいな

「ちょっと聞いてみるか！」

そう言っておっさんは列から外れて前方へと歩いて行く。
止める暇も無く行っちゃったよ、あの人。

それ程並んではないから大丈夫だとは思つけど……。

「兄ちゃん兄ちゃん！ 兄ちゃんたちは、その格好からして冒険者だよな？」

「ん？」

声のした方を見ると、ぶかぶかのローブを着て、羽根帽子を被つた俺の腰くらいまでしかない少年がいる。

しかし、少年と言つには何となく仕草が子供のそれには見えない。

「駆け出しだすけど、一応。あなたは……商人の方ですよね？」

俺が考へてゐるうちに蒼香が答えていた。

目の前で考へ込むのは失礼だつたな。

「そりだぞ！　この帽子を見ればすぐ分かるだらう！」

ふむ、あの羽根帽子は商人であることの証明書みたいなものなのか。でもなんで蒼香は敬語を使つてるんだ？

「もう知つてゐるかも知れないけど、最近このあたりで牛鬼ミノタウロスが出たらしいんだ。こっちとしては商売上がつたりだよ！　駆け出しでも冒険者なんだろ？　なんとかしてくれないかね」

「牛鬼……？　でもこれだけ大きな町だから、直ぐに討伐されるんじゃ……？」

ミノタウロス、つていうと上半身だか頭だかが牛の化物だつけ？　結構強そうなイメージがあるけど、どうなんだ？

蒼香と商人の少年の話しを聞きながら考へを纏めていく。

「2、3体ならよかつたんだ。でも何故か群れで行動しているらしいんだよ！　気性が荒いから滅多に群れをなさない筈なのに！」

滅多についてことは前例があるのか。

じゃあ今はその少ない確立の内の1回かもしれないな。
そつこいつしているうちにおっさんが戻つて来た。が、その顔色はあまり良くない。

「おっさん、どうした？」

「ああ、自警隊の奴に聞いたんだが、最近このあたりに牛鬼の群れが出るって話でな」

「私たちもその話を聞いていたんだよ」

やつぱり原因はそれなのか。
おっさんが同じ話を聞いてきたことでどれ程影響が出ているのかが分かった。

「ん？ 上半身裸のゴツイ男……。 兄ちゃん、名前は？」

「げつ、小人族の商人……。あー、バルドスだ」
ホジック

小声で悪態吐いてたな、今。
そんなことには気付かず、商人は捲まきくし立てる。

「おお、やつぱり鉄槌か！ こんな所で会えるなんてな！
何してるんだ？ 素材集めか？ ギルドの依頼か？ それとも牛鬼の討伐に来たのか？」

「ああ、いや。たまたま通りかかつただけで……」

「何？ たまたまなのか！ まあ、そんなことはどうでもいい！
最近どうだ？ 飯は食ってるか？」

……おっさんが嫌がるのが少し分かつた気がする。

詰まるといひ、小人族つていうのは

「すうし」とお喋りなんだよね。あと、噂話が大好き」
しゃべ

「おっさん困ってるもんなー」

見れば蒼香も少しげんなりしている。

直接話してないけど、聞いているだけで疲れてきた。

小さな商人のお喋りは途切れることなく、終わる気配も無い。まるで機関銃だ。

あ、そういえば。

「おっさん、鉄槌とか呼ばれてたけど、あれ何?」

「んー、ある程度ランクが上がったら貰える称号みたいなもの、かな?」

「一つ名か。鋼の、とか焰の、とかあるのかね?

って

「おっさんって実は有名人?」

「そうみたいだねー。全然知らなかつたけど」

まだ開放される気配の無いおっさんを見ながら何気に酷いことを言う俺たち。
だって、ねえ。

身近にいる人が有名人とか言われても実感無いし。

何よりも、言われてるのが上半身裸の「ゴツイおっさんだしなあ。もつといひ、美形の騎士とか、美人なお姉さんとか。そういうのだろ！？」

「おい、今すぐえ失礼なこと考えなかつたか？」

「いや？ 気のせいだろ」

商人の話しを無理やりぶつた切つて聞いてくるおっさん。
何でこんな鋭いんだか。おちおち考え方も出来やしないいつつの。

「次の方ー」

「ん？ ああ、もうウチの番だね！ ジヤあ皆さん、今度会つときにはウチの商品買っていつてね！」

前に並んでいた人たちはいなくなつており、小さな商人のようだ。

駆けていく小さな背中を見送つて、3人で溜息を吐く。
最後まで騒がしい人だつた。

「で、なんで敬語？」

「小人族は長生きで、成人したつて背はあれ位までだからね。あの人も多分50は超えてるんじゃない？」

やつぱりそういうこともあるのか。

エルフとか巨人族みたいなのもいるのかね……、つて巨人っぽい人は前の町で見てるな、そういうえば。

数日前のこと微妙に忘れているだなんて。

俺の記憶力が悪くなつたのか、密度の濃い日々を過ごしていったからなのか。
後者だと思いたい。

「そりいや、牛鬼のことなんだけじよ」

「ん？」

まだ終わつてなかつたのか？

少し声を潜めるおっさんの顔は真剣なものだった。

「被害報告も来てるみたいなんだわ」

「……具体的には

考えて然るべきこと。^{しか}

群れで移動していくだけならこゝまで噂が広まる筈がない。

「確認されてるだけでも村が3つ。そのうち一つに調査隊を送つたらしげいが、悲惨な光景だつたそうだ。男や老人は殺されて、女は子供でも……、まあ、その、な」

了解、口では言えな^いような状態な。

「そのまま放置されたの？」

「そりやうじい。いや、女は連れ去られてる数の方が多いだろうがな

吐き捨てるよ^うに悪態を吐くおっさん。

俺も胸糞悪くてす^ごい顔してるだろううが、蒼香がもつとひどい。

何というか、押し込められた黒くて攻撃的な感情がちょっと溢れ出てるんじゃないかなってくらい恐い。

「嬢ちゃん、少し落ち着け」

「分かつてます。分かつてはいますが、無理です」

素直なのは良いことだよね。物凄く恐いけど。

ふむ、やっぱり人と魔物を天秤に掛ければ人に傾ぐのか。
人が殺されれば怒つて、自分が魔物を殺せば悲しんで。俺には無理だな。

「で、だ。多分討伐隊に俺も組み込まれるだろうからな。こここの町
じゃ一緒に行動出来ないかも知れん」

「ああ、そつか。じゃあ俺たちの平和の為に頑張ってきてく、痛つ
！」

おっさんに拳骨貰った。

何だよー、そのための討伐隊だろー。

蒼香にクスクスと笑われているのが分かる。

先程までの黒い雰囲気はなくなつて、何とも和やかである。

「次の方ー」

「おお、呼ばれたか。ほれ、面倒だからまとめて行くぞ」

「了解」

門の脇にこじんまりとした兵士の詰め所のような場所がある。

「そりでこいつが質問されたらしー。

らしい、というのはおっさん前にも来たことがあって同じようなことをしたんだとか。

「そんなに前の話しじゃねえからな。変わってねえだの」

おっさんの話を聞きながら詰め所へと進む。

詰め所のドアが開いていたので中を見ると、いかにも兵士ですよみたいなガチムチなおっさん達がいた。

ふむ、魔術師はいないのか？

こんな大きな町で大きな騒ぎを起すような奴はいないと思つたが、用心しておいて損はないだろ？」。

と、そこまで考えてからあることに気付いた。

ああ、兵士のおっさん達も綺麗な魔力を纏つてゐるわ。

考えてみればこの世界の魔術師つて完璧に砲台つて訳でもないんだよね。

蒼香やおっさんもびつちかつて言えば戦士とかそつち寄りだし。
思考に沈んでいると襟首を掴まれ引きずられる。

「勝手な行動しないのー。」

……お母さんか、お前は。いや、俺が悪いんだけど。

考え事をすると他の事が出来ないな。なんとか出来るようにして
おいたほうが良いんだろうか。

出来るようになるかは別として。

「ユーキ？」

「え？」

おっさんにいきなり話しかけられた。
マズイ、また聞いてなかつたみたいだ。

「ランクだよ、お前のランク。どのくらいなんだ？」

「ああ、確か……黒石？」
ブラックストーン

「1回しか依頼を受けてないし、魔物を倒した訳でもない。なので変わつてない！」

胸を張つて言つ事ではないな。一番下のランクな訳だし。

「黄玉、トパーズ 青水晶、ブルーカリスカル 黒石の3人ですね？ではギルドカードを見せて下さい」

言われた通りに懐から自分の黒いギルドカードを出す。

おっさんは透き通るような黄色である。

えーっと、蒼香が中位でクリスタルなんだから、おっさんのトパーズつてのは上位になるのか？

くそう、こんな上半身裸のおっさんがそんなにも強いのか。
まあ、おっさんは武器の素材のために魔物を狩るらしいから、それでなんだろ？けど。

「はい、確認しました。ギルドに行くと牛鬼の討伐隊の募集をしているはずです。自信があればやってください。町の人も怯えてしまつていてるんだよ」

「おひ、何とかしてみるわな。俺だけじゃ無理だがな！」

大きな笑い声が響き渡る。

うん、おっさんに任せとおひづ。俺は出来るひと無さそうだし。

蒼香がどうするのかは分からぬが、俺は有無を言わせまいと留守番だろう。

そして、どうなる事やら。

S H D E · B a l d u s

この町は3ヶ月振りだつたか？

随分と魔物を追つ駆け回してたから、ちと曖昧だ。

腕を組んで、壁に背を預けながら考える。

門の自警隊の奴が言つてた通りに、ギルドに来てみたが、中は随分と雑然としていた。

ざつと数えただけでも40人程。

椅子もあるが多くはなく、俺も含めて座れない奴らは思い思いに立つていてる。

ギルドの中が騒がしいのはいつものことだが、やっぱり雰囲気が違うな。

どつちかって言つといこの空気は戦場のそれだ。

全員が、という訳ではないが、それでも大多数が牛鬼ミノタウロスの群れという異常な事態を恐れているんだろう。

近くの奴の声さえ他の声に搔き消されて、その声も俺の耳に届くことなく消えていく。

「静肅に」

突如、響き渡る鈴のような声音がギルドの中を搔き消されることが無く通り抜ける。

それまで騒いでいた奴等も波が引くように口を噤む。

「とだま
言靈か？」

やけに耳に残る声だ。

「……ありがとうございます。今ここにいる皆さんは牛鬼の討伐隊

への志願者、とこいつじとよろじいですね?」

声の主はギルドの女。

透き通るような銀の髪が肩甲骨辺りまで伸びされている。

背はそれほど高くなく、体もほつそりとしている。

女は丁寧にスカートの端を摘まんて頭を下げる。

「申し遅れました。私、此度の牛鬼討伐の責任者となりました、レイナと申します。お見知りおきを」

ギルドの窓口や受付の女性はお抱えの冒険者だつたりする。レイナと名乗った女もその内の1人なんだろう、自然に溢れ出ている翡翠色の魔力が高い技術力を表していた。

「皆様も知つての通り、本来個体で生息する筈の牛鬼が群れを成して近隣の村を襲つてゐるそうです。我々は牛鬼の巣の発見、並びに殲滅を行います。そこで前衛部隊と後衛部隊に分けようと思つのですが……。この中で近接戦闘での称号持ちの方はいらっしゃいますか? 前衛部隊はその方に指揮を執つて頂きたいと思います」

……俺が出ないといかんかね?

パツと見回したが、周りの奴らは良くて白水晶ぐらいた感じだもんなあ。

大人数の指揮なんざ執つたことは無いんだが……、誰かがやる必要があるか。

気は進まないが志願しようつと前に出ようとする。

「ランク柘榴石^{ガーネット}、フレアよ。炎拳なんて大層な称号貰つたわ」

若い女の声だ。

声のした方を見ると、ピッタリとした黒いパンツに黒いコート、腰の下辺りまである黒髪を纏めもせずに垂らしている女がいた。
どいの悪の組織の一員だよ。

「そこあなたは？」

あん？

黒髪の女がこつちを見ている。

誰のことかと辺りを見回すが、ほとんどの奴は俺を見ている。

……まあ、乗りかかった船だ。やつてやるうじやねえか。

「ランク黄玉^{トバーズ}、バルドスだ。鉄槌だとさ」

女 フレアと同じように名乗つてやると答えが気に入つたのか1人で頷いている。

その行動が頭の片隅に引っかかったが、なるほど。蒼香の嬢ちゃんにそつくりなのか。

嬢ちゃんもヨーキの話を聞いて満足すれば1人で頷いていた。

「で、どうするの？ アタシか、あなたか」

「お前さんが経験あるつて言つなら俺あパスだ。1人で突っ込んでつた方が楽だしな」

「了解、アタシがやるよ。まあ、どうせ連中も勝手にやるだらう」

確かにこんな数の血の氣の多い奴らが素直に言つひとを聞くとは思えねえ。

こっちの指示に従うのは精々多くて3分の1つてところだろ？

今も女が 形だけとはいへ 指揮官になつたことを喜ばない連

中がいるのだから。

胸糞悪い眼しやがつて。

自分たちが一番偉いとでも思つていやがんのか？

「よお、姉ちゃん。あんたは本当に強いのかよ？」

ほら来た。

俺でも、女2人のものではない声が投げかけられた。

声のした方を見るにまだ若い3人が固まってたむろしている。

共通しているのは3人が3人とも下卑た笑みを浮かべていること。

「そうねー……。少なくともあんた達を地面に沈めるくらいなら1分かからないわ」

「へえ、そりやお強いで。だけどよ、俺たちは一時的にとはいえあんたに命を預けるんだ。もしあんたがミスして俺たちが死んだりしたら大変だよな？」

「その時はその時よ。死人に口無し、なんて言葉もあるくらいだもの。怖いのであれば帰つてもいいわよ？」

「むしろ今すぐ帰れ。お前らみたいなのが一番邪魔だ」

「ああ！？ 何だと、デカブツ！」

こんな分かりやすい挑発に乗るなよ、ガキ。生きていけねえぞ？
しかしこんどくせえな。さつさと終わらせるか。

石よりも金属の方が相性が良いんだが、まあ仕方ねえ。

背後にある石壁に拳を叩きつけて自分の身長の3分の2はある槌を創り出し、柄の先の辺りを持つて頭部を床に落とす。

「で？ どいつから潰されたい？」

「意外と短気なんだね」

呆れた様な表情でフレアが言うが、知ったこっちゃない。
どちらかと言えば短気なほうだと自覚しているが、ああいう身の程
を弁えわきまない奴らが嫌いってことの方が大きい。
どうやつてぶん殴つてやろうかね。

3人の位置と自分の立ち位置の把握。近くにいる関係ない奴らに被害が出ないようにと考えていると

「やるなら牛鬼討伐後にして下さい。口が悪かろうが何だろうが、貴重な戦力には変わりありませんから」

冷ややかな声で意識を戻された。

自分の首筋に何かが突き付けられているのを感じて手を上げる。
そもそもギルド内での喧嘩は御法度だしな。

やつた奴らは問答無用で肅清。人格が変わるまでボコボコにされるとか、されないとか。

3人組もいつの間にかギルドの他の職員にナイフやらを突き付けられて固まっている。

「分かつてくれたようで何よりです。では、フレア様を前衛の、私を後衛の指揮官として、作戦でも「報告！ 牛鬼の群れがこちらへ向かって来ていますっ！ その数、およそ30！」……無理ですね」

慌ただしく入ってきた青年があまり嬉しくない報告をする。
レイナは大きく溜息を吐いてすぐさま表情を戻す。

「仕方ありませんね、出ます。万が一にもこの町に入らせるわけにはいきません。前衛は適当に2、3人で組んで下さい。死ぬ確立は随分と減らせるでしょうから」

単身で牛鬼1体を討伐することはそう難しいことじゃない。

大きな個体で精々中の上辺りだ。

だが、2体、3体となると話は変わってくる。

下手をすれば傷を付けることも出来ずに戦われる。

「ほら、行くよ」

コートを翻してフレアは先を行つた。
ひるがえ

数字を聞いても平常心か。流石としか言ひようが無い。

この中、じゅもう戦意を喪失している奴らだつていてのこま、その分頑張つてくるとするか。

フレアさん再登場ー。

果たして覚えている人はいるのだろうか。

男の人にとってちょっと痛い表現があるかもしれません。

宿の2階で「ロロロ」と時間を潰していると、外から慌ただしい声が聞こえるようになってきた。

ベッドに腰掛けて窓から見てみると、町一番の大通りで町の人たちが右往左往している。

まるで蜂の巣を突いたような騒ぎだ。

「何かあつたのかな」

隣に座っている蒼香は真剣な表情で町の人たちを見ている。ふむ、今この町の人を脅かす何かと言えば

「牛鬼……か？」
ミノタウロス

「多分」

それぐらいしか思い付かんな。

子供を連れて走る母親や、老人を負ぶつて行く青年まで様々な人が待ちの中心部の方へと向かっている。

蒼香の話によると、教会が避難所になつていていたそうだ。

「俺たちも避難するか？」

「うん。討伐はバルドスさんや他の人たちに任せよう」

蒼香は一応牛鬼くらいなら倒せるそうだ。

だから討伐隊の方に入つてもおかしくはないのだが、ヨーキを1人になると何をしてかすか分からぬ、と留守番側になつた。

正直、そんなにしたいことも出来ることも無かつたから俺一人で宿で待つてればいいと言つたのだが、何故かおっさんにもニヤニヤ笑いながら却下された。

「ほら、行くよ

蒼香はもう行く準備が出来ているらしい。結局いつもの格好とあまり変わりはないのだが。

俺も壁に立て掛けた剣を手にとつて部屋から出る。

「きやああああああつ！」

いや。出ようとしたが、甲高い叫び声を聞いて反転、窓へと走る。見れば大通りが真っ赤に染められて、その中につぶれたトマトの様なモノが転がっている。

瞬間にそれが何かということが分かつてしまい、吐き出しそうになるのを必死に耐える。

何が起きた！？

断続的に悲鳴は続いている。

方向からして町の人たちが避難している教会がある辺りからだ。

窓枠から身を乗り出して見ると、周りの人よりも倍近く大きな男が棍棒を振り回して町の人を薙いでいく。

あれが牛鬼か。でかくね？

現実逃避している場合じゃない。こうしている間にも殺されている。

「蒼香ー。」

「分かつてる、飛ぶよー。」

異常を伝えようと振り向くと、蒼香は既に俺の首根っこを掴んでいた

る。

そのまま窓の縁に足を掛けて

「え、ちょっと！」

躊躇^{ためらひ}いもせずに窓から飛び降りた。

あ、空が見える。

一瞬の浮遊感の後、大きな衝撃が

『風の槌^{メレウス・ウエンテ}！』

無かつたけど風で飛ばされそうです。

どうやら風の魔術を地面にぶつけて減速したようだ。

軽やかに着地する蒼香と、落とされるように手を放される俺。

文句の1つでも言つてやりたいが、今はそんな場合じゃないと慌てて立ち上がり、極力周りを見ないように走り抜ける。

「私は囮！　ユーキは怪我人を！」

「了解！」

情けないことだが、そっちの方が効率がいいのは事実だ。

もちろん、俺には治癒の魔術なんて出来ないから直ぐに誰かに見させなければいけない。

喧騒^{イノシテ}が大きくなつてくる。どうやら広場で暴れているようだ。そこへ入つてまず目に付いたのが、地面を染める赤。

惨劇、としか言いようがない。

真っ赤に染まつたものが嫌でも目に付く。

人の体に牛の頭を付けた化け物はこちらに背を向けて、動くものを見つけてはその手に持つた棍棒を振り回している。

『響け、青き氷！ 我が敵を凍てつかせよ！』

スカートのポケットから何かを取り出して握りこみ、詠唱する。同時に蒼香の体から青い光が溢れ出す。

『ヤクルム・グラキエース
霧氷の槍！！』

蒼香の周りに突如として現れた計6本の成人男性の腕ほどの氷の槍は、一直線に牛鬼へと向かって行く。

が、牛鬼は振り向きざまに手に持つた棍棒で3本叩き落す。残った3本は牛鬼の右足と地面を繋ぎとめ、右肩を凍らせ、左脇腹に突き刺さり凍結させる。

蒼香が牛鬼を引き付けている間に倒れている人に近づく。男の人は……。駄目だ、息をしてない。次！

小さな子供を抱えているおばさん。脇腹が抉れてる。くそっ！

子供ごと抱きかかえて教会へと走る。息も絶え絶えだがまだ生きている。

「あんた、この人を頼む！」

「あ、ああ。分かった」

教会の前でまごついていた兵士におばさんたちを押し付けて広場の全体を確認する。

あちらこちらにひしゃ上げた鎧や剣、それらを身に着けていたであろうモノが散らばっている。

生きていそうな人は……。3人、か？

他は原型を留めていなかつたりが大半だ。くそっ、吐きたい。

牛鬼は氷から抜け出して棍棒を振り回し、蒼香は牛鬼の懷で離れないよう攻撃を避け続け、小さな傷をつけていく。

「んだけ目が良くなってるんだか。」

「と、そんなことを考えている場合じゃない。早く他の人を助けないと。」

3人を手早く抱え、教会の人全員押し付けてから派手な音が鳴り響く中心地を見る。

『マヌス・トニトールス
『雷掌一.』』

牛鬼の真正面、懷に入った蒼香の手の平から青白い光が弾けて牛鬼の巨体に絡み付く。

電撃によって硬直した牛鬼に更に叩き込むために詠唱する。いつの間にか良くなつた目は牛鬼の腕が微かに動いたのを見逃さなかつた。

「蒼香、逃げろっ！」

「え？ つあつ！」

人と同じ形の、しかし比べようもない大きな手が蒼香の体を宙に浮かせ締め上げる。

それを認識した刹那のうちに剣を抜いて走り出す。重心は前に、滑る様に最短距離を。

牛鬼の約3歩手前。棍棒を持つ手を振り上げるが、遅い。更に体を倒して地を^{はじ}奔る。

狙うのは蒼香を掴んでいる腕ではなく

「その、汚いモンをぶら下げる蒼香に触つてんじゃねえっ！」

出来るだけ見ないようにしていった男の急所を、股下を駆け抜け様に斬つて地面を削りながら止まる。

噴き出す赤い血と、響くような咆哮。それは痛みだろうか、憤怒だらうか。

いや、どうでもいい。止まっているのであれば好都合。

踏み込んで、跳躍。一撃で断ち切るつもりで首に向けて体を回して剣を振るうが、刃が肉に阻まれてそれほど進まずに止まる。

ありえねえ、どんだけ硬いんだよ。

牛鬼の肩に立つような感じで食い込んだ刃を抜こうとするが、牛鬼が剣を掴む。認識したと同時に剣から手を放し牛鬼の肩を蹴りつけて飛び降りる。

勢いをつけて投げられた剣は減速することなく一直線に飛び、派手な音を立てて民家の壁に突き刺さった。

やべっ、武器が無い。

三十六計逃げるにしがず。距離を離すために後ろへ跳ぶ。途端に首の後ろが焼けるかのように熱くなる。

「オオオオオオオッ！」

地を搖るがすような咆哮、動き出す巨体。

鈍重に見えたそれは、一瞬で加速して迫つて来る。

避けられねえ！

加速した牛鬼の巨体が突き刺さる。

体が軋み、肺の空気が全て押し出され、世界が回転する。

せめて頭を打たないようにして、と体を丸めるが本当に出来ているのも怪しい。

ゴム球の様に吹き飛んでいたである程体が、堅い何かに叩きつけられて止まる。

「がつ！ げほつ、じほつ！」

息を吸つた先から咳き込んで吐き出してしまう。

こりや血も吐いたな。口中がべた付いてる。

なるほど、蒼香が近距離で纏わりついてたのはこれを見らわないようにな。

確信は無いが恐らくあばらが何本か折れている。

挽肉にならなかつただけましと思つてゐる俺はおかしいんだろうか。何とかして立ち上がろうとしていると、不意に影が差す。

牛鬼が俺を見下ろしていた。

手に持つた棍棒を振り下ろせば俺を殺せるといつのに、それをせず

に嗤つているような気がする。胸糞悪い。

でもまあ、あれだ。

「獲物を前に舌なめずりは3流がやること、だつたか」

牛鬼の後ろ、その奥で蒼香が右手に赤い光を、左手に緑色の光を迸らせていながらへ走つて來てゐる。

両手を合わせて、合成。熱風が吹き荒れる。

気付いた牛鬼が振り向くが、遅い。

蒼香の歩幅で3歩。そこは既に蒼香の間合いだ。

『フランク・ヒンシス
焼き払う剣』

蒼香はまるで鞘から抜くように右手を振つて炎で出来た細身の長剣を作り出し、その勢いで擦れ違ひ様に牛鬼の腹を一閃。更に振り向いて背中を縦に一閃。

燃え盛る剣で斬りつけた箇所には炎が残り、牛鬼の体を侵していく。

「オオオオオオオオオツ！」

天を見上げての咆哮。牛鬼の傷が急速に塞がっていく。
治癒というより、もはや再生と言つた方がいいだろう。
しかし蒼香は退かない。

連刃連撃。

足に、腕に、腹に、背に、顔に、炎の剣を高速で縦横無尽に滑らせる。

再生が追いつかずに、牛鬼の体は赤く包まれていく。
蒼香は燃え盛る炎をものともせずに突進。牛鬼の腹を剣で貫き、抉つて、即座に引き抜く。

蒼香の立ち位置は俺を背にして、牛鬼から庇うような形である。

「ツ、オオオオオオオオオオツ！」

突進。

炎に包まれその体を焼かれながらも蒼香を狙っている。
しかし目の前にいる少女は動かない。

そつと、剣を両手で握つて頭の上に掲げるだけ。

『オムネ・フランマ
全て焼却』

何の感情も聞き取れない聲音で死を告げながら、手に持つ剣を大上段から振り抜いた。

剣は牛鬼の体を肩から一直線に縦に裂き、溢れる炎が天へと駆け上がりその体を炭化させ、灰と化す。

あれだけの質量のものを灰にするってどんな火力してんだよ。
つーか蒼香が怖い。

後姿しか見えないが鬼気迫るものを感じる、気がする。

牛鬼の体が半分ほど灰になつて、ようやく鎮火し始めた。
蒼香がゆっくりと振り向く。

「大丈夫！？ 生きてる！？」

うん、いつもの蒼香だった。

先程までの気配はどこかへ放り投げたようで、俺の体を恐る恐る触つて怪我の具合を確かめている。

しかし、何だつたんだ？

生き物を殺すのはNGな癖に、ああも無感動に、それこそ作業の様に剣を振り下ろせるだなんて。

……一重人格、とか？

いや、そんな素振りは無かつたと思うんだけど……。

他に考えられることといったら……、感情を押し殺す、とかかね？自己暗示みたいな感じで。

それなら有り得ない話では無いと思うけど……。

俺の胸に手を当てて治癒魔術を掛けている蒼香を眺める。

「…………あのね」

「うん？」

蒼香が口を開く。

「私ね、ユーキに助けてもらつて嬉しかったの。でも、それ以上にユーキが傷付けられたことが許せなくて。その、気付いたらもう体が動いてた」

自分で何かを殺すつて嫌悪感よりも俺を傷付けられたつて怒りの方が勝つた、ってことか？

……不味くね？

自惚れじゃないが、どんだけ蒼香の頭の中を俺が占めてるんだよ。1週間ほどしか一緒にいない男への、依存に近いもの。

蒼香の、何かを殺すことへの嫌悪感はそれ程酷くないという可能性もあるかも知れないが、バルドスのおっさんと話していた態度からしてあまりそうも思えない。

俺が見ただけでも2回、今回を含めれば3回、蒼香は自分以外の何かを殺している。

「殺さなきゃ殺されるってことも分かってる。少なくとも前の2回はそうやって判断した。だけど、今回は！ 行き着くところはそこだけ、その前に私はつ、痛つ！」

蒼香が額を押さえて呻いている。

うーむ、筋力も上がってる所為か軽くテコピンしだけでも痛いのか……。

涙目で俺を睨んでいる少女。

これだけ見れば普通の女の子なんだけどな……。

「少し考えすぎだ、馬鹿」

「でも……」

蒼香に聞こえるように大きく溜息を吐く。

「ま、色々思うところはあるけどな。蒼香が助けてくれて、俺が生きてる。今はそれだけじゃ駄目か？」

「……する」

仕方ないだろ、お前が分からぬのに他人の俺がそう簡単に分かる訳ないんだから。

問題を先延ばしにするだけだが、いい加減休みたい。

殆ど痛みが無くなつた体を確認して、蒼香を避けて立ち上がりつと
した時、場違いな拍手が響いた。

Page24・事件と想いと（後書き）

申し訳ないです。更新遅くなりました。
もう不定期更新って言つた方がいいですよね！
いや、ほんとごめんなさい。

あ、少しつつお気に入り登録が増えて喜んでいます。ありがとうございます。
これからもヨーキと蒼香、その他大勢（笑）を応援して頂けると嬉しいです。
ではでは。

SHDE・BalduS

慌ただしく町の中心に向かつて走る奴らと、それとは逆に外に出る奴らを交互に目で追いながら速度を落とさないようにしてしっかりと自分も町の外へ向かつ。

ああ、めんどくせ。

それが俺の今のところの感想だ。

いやいや、町の奴らを護る為でもあるじこんなことを考えるのはいけねえ、んだが。

やはり気が滅入る。

「何をそんなしかめつ面をしているの、鉄槌さん？」

不意に、横から話しかけられた。

「ん？　いや、あの馬鹿共、がなにかしらやらかしかねないかと思つてな。あとその呼び方は止めてくれ。出来れば口調も」

苦笑しながら答えると横にいる女　フレアはクスクスと笑い出した。

少しだけ俺の眉間に皺が寄つた気がした。

「悪いね。あまりにも予想通りだつたから、ね」

これから牛鬼の討伐だつてのに緊張感の欠片もねえな、俺たち。俺が言った馬鹿共つてのもちろんフレアに噛み付いてきたあの3人のことだ。

大方自分に力があると勘違いしているんだろうが、あまりにも馬鹿らしい。

おつと、着いたか。

普通、ギルドはこういった魔物の強襲から町を護るために門の近くに建てる。ここも例外じゃないってことだな。

「門を閉めて下さいっ！」

俺たちの後ろで馬鹿でかい門が、これまた馬鹿でかい音を立ててゆっくりと閉まつていく。

ギルドの女 確かレイナ、だつたか が指示を出している。

「ここから少し離れた場所で戦闘を行います。情報では街道沿いの森を通りこちらへ向かってきてているということなので、後衛部隊が全力で攻撃、先制をした後に前衛部隊に任せます」

まあ、今のメンバーを考えれば妥当なところか。
細かく指示出してたつて、いつたい何人がパニックにならずに戦えるか分からねえし。

戦場にいるのに戦わない、戦えない奴ほど邪魔なもんは無い。
開けた場所で戦うのは……、まあこっちの戦力によるな。
……なんだ、この匂い？

「タバコ煙草？」

吸っている奴は直ぐに見つかった。というより隣にいた。

「ああ。駄目な人？」

「いや、そういう訳じゃねえが。あんたみたいな人でも吸うんだな、

と思つてよ

吸い慣れてないのか少し咳き込んでいるが、中々絵になつている。美人つてのは得だねえ。

「願掛け。今日も生き残れますように、つてね」

……それにしちゃあ吸い慣れてねえな。
フレアは少し早めに吸うのを切り上げて、指で彈いて前に飛ばした。

「おい、流石にどうかと思うぞ」

「大丈夫さ。跡形も残さないから」

そつ言つて、小さな火球を指先から落とす。
本当に小さな灯火だ。

火球が地面の吸殻に触れた瞬間、小さく燃え上がる。
後に残るのは焼かれた地面だけ。

「……無駄にすごいやな」

「無駄とか言つな。これでも苦労したんだからな」

膨大な熱量を圧縮した小指の先程度の火球。それをほぼ一瞬で作り出して制御する技術。

流石は称号持ち、つてところか。

言葉とは裏腹に感心していると悲鳴が後ろから響き渡った。

「どうしたつー!?

「とつ、突然牛鬼がつ！」

聞くまでもなかつたか。

目の前に今回の討伐対象がいるのだから。
全部で6体。

足元には何人か血で染まつて倒れている。

「オオオオオオオオッ！」

「散開つ！ 前衛部隊で抑おさえて下せつーー？」

言葉を無くすのも無理はねえな。
なにせ細い腕で牛鬼を殴り殺す女がいるんだから。

『焰ひきほ！』

言わすもがな、フレアだ。

後ろから見てもその強さがよく分かる。
つか、せめて指示くらい出してから行けよ。
いつも通りに足を地面に叩きつけ鉄槌を造り出す。

「全員、周りを確認しておけ！」

叫びながら牛鬼へ向かう。

フレアと12、3人が交戦中。他はパニックになつたり、それを抑える為に駆り出されている。

1体はフレアが不意打ち氣味に倒したから残り5体。斧を持っていたり、剣を持っていたりと様々だ。

「中途半端に距離をとるな！ 突進されるぞー！」

慌てふためいて右往左往している馬鹿共に向かつて怒鳴る。

「つ、潰れろつ！」

周りを確認していく避けられない状態の俺に突進してきた1体を、体を回し遠心力をつけて頭に槌を落とす。

グチャリ、と慣れてしまった嫌な感触と共に絶命するのが分かる。少し気を抜きすぎたか。

「ぎゃああああああっ！」

また1人やられた。

最初の襲撃も合わせると10人近くはやられてる筈だ。
対して、牛鬼は残り2体。
これ以上は殺させねえ！

「さつさと死んでおけ！」

他の冒険者を狙っていた牛鬼の背に、走った勢いをそのままに思い切り鉄槌を叩きつける。

なまじ筋肉の鎧で包まれている分、余計に肉を潰す感触が手に返ってくる。

しかし、牛鬼は止まらない。

痛みの所為か、手に持った斧をやたらめつたら振り回している。
突進してこないのはいいが、これじゃ近づけねえ。

横目でフレアの方を窺うと、向こうも似たような状況みたいである。
遠距離の操作は苦手なんだがな……。

鉄槌を両手で持つて、頭上で回転させ勢いをつけたところで地面に振り下ろす。

地面が叩き付けた鉄槌の下から一直線に盛り上がり、暴れている牛鬼の手前で止まり、

『地槍！』

そこから魔力で固められた円錐形の土が突き上がる。

槍は狙った通りに牛鬼の胸を貫いた。

人型の魔物は人間とほぼ同じ構造をしてるから弱点は分かりやすい。もう1体はどうしたかと見てみると、フレアが他の冒険者たちにお礼を言つているのが見えた。

「うあっ、他の奴に頼めばよかつたのか！」

普段1人で行動しているからか、他の奴らのことをすっぽりと忘れてた。

わざわざ苦手な魔術を使って魔力を無駄に消費する必要なんて無かつたじやねえか。

後頭部を乱暴に搔く。

生きてるのは……やつぱり30人くらいか。

戦闘に参加できる奴となるとそこから更に10人くらい減るな。とてもじやねえが討伐が出来るとは思えねえ。

「おーい、レイナの嬢ちゃん！ これからどうすつー？」

俺たち全員を囲むように宙に浮かび上がっていくつの魔術陣。魔術陣からそれぞれ1体ずつ牛鬼が現れる。

嵌められたつ！

構成をチマチマと考えている暇はない。

出来る限りの魔力を込めて地面を踏み締める。

『地槍壁!』

牛鬼の群れから遮るよつて槍を作り出して円状の壁にする。これで少しあは時間が稼げる筈だ。槌を放り出して地に震わ。くそつ、こんな大規模な魔術なんぞ使つたことねえよ。悪態を心中で吐くが、気付いた。

俺じやなくて他の奴にやらせればいいんだつた。

本日2回目である。

まあ、今日は仕方ねえか。周りが出来るか分からねえし。

「フレア様、バルドス様」

凛とした声でレイナの嬢ちゃんに呼ばれる。流石に冷静はあるか。

「申し訳ありません。こちらの落ち度でこのよつな「謝罪は後だ。」この壁も10分も保たず崩れるだらうからどうにかしようぜ」「……了解です」

罪悪感からか少し声に霸気が無い。

冷静ではあつても冷血ではないか。ほんとど関係ないから当たり前だが。

いかん、コーキに毒されてきてる氣がするな。

町に残してきた、連れの少女の尻に敷かれている少年を思い浮かべる。

さて、あいつならどうせこの場を切り抜けるか。

……嬢ちゃん次第だらうな。

嬢ちゃんの性格からして進んで困とかやりそつだもんないで、なんだかんだ言いながらそれに付き合つコーキ、と。万が一、嬢ちゃんが怪我してたら抱えて真っ先に逃げるな。

会つてそれほど時間の経つてない関係だが、何となく想像通りの気がする。

「へえ、笑つてられるだなんて大した胆力じゃないか。何か思いついたかい？」

フレアに声を掛けられた。

自分でも気付かないうちに笑つていたらしい。
この状況を笑つてたわけじゃねえんだが、まあいい。

「一点突破、全力で町に逃げる」

「妥当だろ？　ね。レインナさんは？」

「いえ、特に異論はありません。周囲に伝えておきます」

手早く話し合いを終わらせて準備に入る。
フレアはまた煙草を咳き込みながら吸っている。
いや、願掛けって日に何度もするもんじゃねえだろ。
心の中でツツコミながら気になつてていることを聞いてみる。

「魔術師、それも高位の召喚師が何の為にこんなことをしてると思う？」

「さて、ね。他人が考えることなんてアタシには分からぬよ

だよなあ。

分かることと言えば相手の実力くらいなものだ。
あれほど多くの召喚を一息でこなせる魔術師。

少なくとも称号持ち以上の実力がないと出来ない芸当だ。

1人でやつた場合、と頭に付くが。

「でも、まあ。はつきりしてるのは」

吸い終わった煙草を先程と同じように弾く。
違うのは地面に落ちる前に灰も残らず一瞬で燃えたということだ。
ほんとに無駄にすげえ。

「少しイタズラが過ぎたってところだね」

魔力が漏れ出し、辺りに熱気を撒き散らすほど怒り。
真っ赤な魔力が空へと立ち昇り、空間ごと染め上げている。
正直、傍に居たくないほど熱いんだが。周囲も何事かと騒ぎ出しているし。

「他の方は準備が終わりました。それと、協力していただける方がいました。……あと熱いです、フレア様」

フレアに気を取られてて気付かなかつたが、レイナが男女を引き連れて後ろに佇んでいた。

1人は栗色のショートカットでメガネを掛けたお嬢ちゃん。紺のローブを着込んで背丈に見合わない大仰しい木製の杖を持っている。言っちゃあ悪いが、鈍臭そうな娘っこだ。

もう一人は金髪のとっぽい兄ちゃん。オーソドックスな革鎧の上に枯草色のマントを着けて腰に剣を差している。ニコニコと笑っているのは何故だろうか。

「時間も無いし、とりあえず出来ることを言って」

「あ、えっと、ストーンゴーレム石人形を5体ほど……」

「攬乱くらいでですかねえ」

かくらん

フレアの言葉に慌てて答えるお嬢ちゃんと笑みをそのままに答える
兄ちゃん。

ああ、どうしようもなく不安だ。

「それなりに選別しましたので大丈夫です。……多分」

表情に出ていたのか、レイナの嬢ちゃんがフォローしてくるが最後
に不安を煽るようなことを呴いたので咎無しである。

「あと数分でこの壁が崩れるんだろ？ 気にしてられないよ。
とりあえず攻撃できる人全員で一点突破。そつちのメガネの子は石
人形出して後ろを押されて。青年はアタシたちと一緒に囮」

「わ、分かりました」

「了解でーす」

緊張感があり過ぎても無さ過ぎても問題だな。
上手く切り替えてくれれば何も言つことはねえんだが。
めがねの嬢ちゃんが何も無い所で躊躇ついて杖が宙を飛び、立っていた
無関係な冒険者の側頭部に突き刺されるのが見えた。
兄ちゃんはそれ見て笑ってるだけだし……。
ああ、不安だ。

「崩れるぞっ！」

程なくして魔力で構成された土の槍の壁がボロボロと崩れ始めてきた。

全員に緊張が走る。

各々が剣を、杖を、槍を、斧を、弓を構えてその時を待つ。やがて大きな音を立てて全てが崩れ落ちた直後、

「吹き荒れなさい『風精の螺旋矢』」エアリアル

レイナの嬢ちゃんが凜とした声で魔術を放つ。

轟音と共に風の塊が高速で俺のすぐ傍を通り抜け、前方の牛鬼を3体ほど巻き込んで吹き飛ばす。

「走れ！」

先導しながら叫ぶフレアの声で一斉に走り出す。

火が燃え盛り、風が荒れ狂い、地が隆起し、水が押し流し、氷が阻み、雷が駆け巡り、光が、闇が放たれ前に立ちふさがる牛鬼を打ち倒していく。

もはや小規模の戦争だな。

牛鬼の囮いを走り抜けて、少し距離をとつてから振り返る。
50強、ってどこか。

報告よりもはるかに大きい規模の群れ。

それに対してもこつちは俺、フレア、レイナ、メガネの嬢ちゃんととっぽい兄ちゃんだけ。
これで時間を稼げと。

「競争する？」

「あん？」

いつの間にか隣でフレアが不敵に笑っている。

「どうちが多め倒せるか」

「冗談。俺は数を倒すのは苦手なんだ。魔力の残量も少ないしな」

「そうかい。残念だ」

少しも残念そうには見えないが。
しかし競争ね。余裕あるじゃねえか。
それに比べて俺は何考えてんだか。
時間なんて稼がなくていい。

もともとあれこれ考えるのは性に合わないんだ。
後先考えずに突っ走つたつて構いはしないだろう。

「で、競争する?」

「いや。しねえ」

フレアが何か言っているが、まあ、いいだろう。
足元の地面から柵を作り出す。

「…つし、行くぞ!」

気合いを入れ直して牛鬼に向かつ。

「一応アタシが指揮官なんだけどねえ…」

隣で並走しているフレアがぼやいているが、聞く耳なんぞ持っていない

ない。

そつやつて言ひへりいだつたらそれらしことをしゃがれつての。

「アタシは右に行くよ」

「了解。俺あ左だ」

左右に分かれた直後、ちょうど俺たちを掠めるような形で風の塊が通り過ぎ、牛鬼たちを襲う。

着弾した風は、その力を爆発させて周囲を切り刻む。

……せめて貫通型の魔術を使って欲しいんだが。

下手したら巻き込まれてたな。

目の前、4体の牛鬼が迫る。

先頭の牛鬼が剣を斜めに振り下ろす前に懐へ踏み込んで、その手を槌で打ち払う。

体を魔力で強化しながら肩を突き出して倒れるように前へ。壁に当たったような衝撃が体に返ってくるが、それを無視してさらに踏み込む。

肩から感触が離れ、瞬間的に槌を振り降ろす。

倒れている牛鬼の胸に叩き込む。わずかな抵抗、しかしそれもすぐに消え失せる。

体を反転、槌を牛鬼の体から引き抜いて左右の2体を弾く。

バランスを崩した1体の肩に振り下ろして潰す。血が吹き出て体にかかるが気にしていられない。

すぐさま反転、そのまま横に槌を振り抜いて腹を打つ。

これではまだ殺せていない。

追撃を掛けようと踏み込むと、4体目の牛鬼が巨大な斧を振り回し向かってくるので後ろに飛び退る。

「うわってえっ！ ビナッ！」

斧を振り回す牛鬼に、槌を投げる。

手からすっぽ抜けるような形で飛んだ槌は、牛鬼の頭に吸い込まれるよう当たり、嫌な音を立てながら顔を潰す。

俺が素手だということを分かつてか、殺し損ねた牛鬼が突進してくる。が、甘い。

地面を踏み抜き、新たな武器を作り出す。

片手で扱うにはあまりに長大なもの、ラ・ンス突撃槍。

それを突進してくる牛鬼に合わせ 突き出す。

大きな衝撃とともに突き刺さり牛鬼は動きを止める。

これで4体。次は つ！？

左腕に衝撃。無様に吹き飛び地を転がる。
こりや、折れたな。

力が入らない左腕に意識を向けながら、体を起こす。
フレアとレイナの嬢ちゃんが同じ数殺してたとしても残りは40近く。

それよりも先に自分の体の限界の方が早いかも知れない。
一向に数が減ったように見えない牛鬼の群れ。
そこから少し離れてしまった。

俺を吹き飛ばしたであろう牛鬼が突進してくる。

「があああああっ！」

突撃槍は先程突き刺したままなので手元には無い。

また新しく武器 今度は柄が長めの戦斧バトルアックスを造り出し、体を使

つて右腕だけで振り下ろす。

ちょうど良く、唐竹を割るように頭に食い込み絶命させた。
これで5体か……。

相変わらず減つてるようには思えない。

折れた腕で庇ひまでも頑張れるかね。

……あ、めんどくせ。

マジで…おひさしだらり（後書き）

マズイ、少しへぎだぎだになつてきただらり（後書き）

鳴り止まない手を打つ音。

満面の笑みを浮かべながら近づいてくる男を見る。

「素晴らしい！ 風・氷・雷・炎・癒。5つの属性を使え、更にそれを合成とは！ 私がそれをここに放った甲斐があるというものだよ！」

男を一言で表すなら初老の貴族。何か付け加えるなら、見た目としては真っ当な部類の、と頭に。

黒いステッキにズボン。磨きあがれた革靴を履いてシルクハットなんぞ被っている。

手に持つた杖は歩行を補助するための物ではなく、ファッショントンとか、そういうたるものだろ？

そんな人物が倒れた牛鬼を挟んでいるとはいえ、直ぐ近くに、しかも突然現れたようになっているのだ。

……待て、さつきこいつは、何て言った？

それを、ここに、放つた？

尚も男の興奮したような声は続く。

「いやはや、私の自信作だったそれを壊されて憤慨したものだが、よくよく考えてみれば君の前ではこんなもの玩具に等しいな！ 君を基にすればさぞかし良い作品が出来そうだ！」

つまり、こいつが牛鬼をこの町に放つた犯人で。

「ああ、私が誰なのか言つていなかつたね。人の体をどれ程強く出来るか、その高みを目指して つと、危ないじゃ ないか」

「うるせえ、それ以上その口を開くんじゃねえよ」

この口振りからすると人間を材料にしてやがるッ！
男の演説を止めるために本気で殴りかかつたが、男は小さな音を立ててその場から跳んでいた。

「やれやれ。君には用が無いんだがね」

心底めんどくさそうに溜息を吐いて、^お居がかつた動作で首を振る。
彼我の距離、約8メートルといったところか。
それにも関わらず男の声が聞こえるのは、周りに誰もいないからであろう。

張り詰められた空気が重く感じる。

重圧、とでも言えばいいのだろうか。

男が纏う鈍色の魔力がさらにそれを助長する。

「……あんたの目的は？」

「そつきの玩具のテストだつたよ。実戦に耐え得るかどうかの、ね

生憎壊されてしまったが、と続けて小さく聞こえた。
感情が真っ赤に染め上がりしていくのが分かる。
それだけのために、こいつは！

「……さない」

後ろから呴かれた声に全身に悪寒が走った。
俺の感情など上から塗り潰していくような呪い声。

「許さない許さない許さない許さない許さない許さない」

「どこの病んでる人だ、てめえはー？」

そんな気持ちも露知らず、蒼香は声音と同じような昏い魔力をその身から噴き出させている。

吹き荒れる魔力の余波が地面、壁、さらには家をも破壊していく。その光景はまさしく

「暴走……？」

暴走と言つていい。

昏冥の輝きがさらに膨れ上がりあたりを蹂躪する。

「消えろおおおおつ！」

喉が潰れんばかりに上げられた声に合わせて昏い光が収束、長大な棒状へと変形させて男へと解き放つ。

暗闇色の光が目の前に溢れて。

音が、消えた。

「うあ……？」

何が起きた？

いまだに戻らない真っ白な視界、グラグラと揺れる頭を押さえ立
ち上がろうと力を込める。

……待て、何で俺は倒れている？

もやが掛かったように思考がはつきりしない。

少しずつ視界が戻つてくる。田の前にあるのは

「なつー?」

一瞬でもやが晴れる。

先程まであつた街並みは何かに一直線に抉り取られ、空虚な空間を作り出していた。

原因など考えるまでも無い。暴走した蒼香の暗闇色の魔術だらう。そうだ、蒼香はー? そして気がつく。

「あああああああつー!」

圧縮された嵐の中心で叫ぶ少女。

こつじてみると随分と吹き飛ばされたことが分かる。さつきまで1歩近づけば触れられる距離だったってのに、ちょっとした徒競走が出来るんじゃないか?

… 35メートルつてどこか。

距離を測るのが癖になつてるな、こりゃ。

苦笑しながら蒼香に向き直る。

蒼香の暴走は止まる気配がない。それどころか強くなつている気がする。

男の行方も少し気になるけれどまだまじつかずする……?

「はつ。ぶん殴つても止めてやるわ」

声に出して確固たる意思に。

はてさて、そつは言つたもののあんな状態の蒼香がそつ簡単に近づかせてくれるかな?

体勢を低く、暗闇色の嵐に向かつて駆け出す。

あと20。

まだこっちを認識していない。

あと15。

魔力の余波で飛んでくる力置の破片を、体を捻り最小限で避ける。

あと10。

足全体で地面を掴む様に、体は地を滑り一瞬で肉薄する。

0！

他を拒絶するように暴風が吹き荒れているが、関係ない。右の拳を握り締めて振りかぶる。

米神を狙つた拳が当たる直前に、鈍い音を立てて軋む何かに阻まれた。

壁のようなものがある。

それを認識したと同時に正面を向いていた蒼香の顔が少しだけこちらに向く。

マズイと思うよりも早く、全身を碎くような衝撃。

呼吸が止まり、天と地が回り、無様に叩きつけられる。

だが、問題ない。

手足が千切れたわけでもなく、ただ吹き飛ばされただけだ。

「……この頑丈さは一度調べたほうが多い気がするな

本気でそう思つ。

いつの間にか人間止めてましたじゃ困るんだけどなあ。

のんきなことを考えながら立ち上がる。ピリピリと肌を刺すような空気が痛い。

どうやら蒼香は俺を敵と判断したようだ。

動いてはいけないが、こっちをじっと見ている。

……動かれても困るけど、動いてくれないのも困るな。攻めづらいつたらありやしない。

体の中の歯車を噛み合わせる。

さて、行こうか。

腕をだらんと下げて、自然体に。

先程と同じ、約35メートル。しかし難易度はノーマルからハードへ、と。

馬鹿な思考を止め、縮地。一瞬で最高速度へ。

同時に蒼香からの攻撃。蒼香が纏う暗闇色の魔力が切り離されて、形を変えて飛来する。

数なんぞ数えたくもない。とりあえず雨霰あめあいりのよう、とはこんなことを言つんだろう。

スピードを緩めて左へ半歩、加速して右へ2歩、避けられそうにないものは魔力を込めた手で弾く。

後ろでちょっとした爆発のような音がしているが気にしていられない。

足は止められない。

左へ転がるように跳ぶ。右手で顔面に迫るものを弾く。半身になつて避ける。背中に掠つた。走る。左手で弾く。逆に弾かれてふらついた。腰の肉が削れた。関係ない。足元に着弾。無理矢理跳んで避ける。

きりが無い。

一瞬の合間を縫つて縮地で範囲の外へと逃げる。

行き着く暇もなく蒼香の纏う魔力が薄く引き伸ばされ、槍へと形を変えたものが踊りかかってきている。

足りない。

この嵐のような躊躇劇を前に、この程度では届かない。

さらに速く、さらに強く。歯車を最高速で奔らせ、なお上へ。

突き出される槍が体を掠める。関係ない。

再び蒼香に向かつて走り出そうとするが、無理矢理方向を変えて飛び退る。

今までいた場所の石畳に真上から大人の腕ほどの槍が突き刺さり、

辺りに石の破片を撒き散らす。

腕で顔を防ぐ。一瞬、しかしそれは今この時において十分過ぎる隙。

「がつーー？」

痛みは左足から。

確認してゐる暇など無い。 いまだに俺の左足を貫いているものを引き抜いて走る。

俺を追うように石畳に突き刺さり抉つていく槍。

こんなのがマンガやアニメでしか見たことねえつつの。

ふと、蒼香が何かを振りかぶつているのが目の端に映る。

蒼香から見て俺の後ろは・・・、広場だ。大丈夫だと信じたい。

左足の痛みを無視して全力で蒼香の前から逃げる！

「ぬおおおおおおー！」

跳ぶと同時に後ろで轟音が通り過ぎる。

余波だけでも吹き飛ばされそうになるが、何とか踏みとどまつて蒼香へと走る。

チラリと、横目で見て確信する。暴走したときに撃つたアレだと。

あんなもん当たつたら塵すら残らんわ！

心の中で叫びながらそれでも足は止めない。

追撃は、ない。

激痛が左足を侵すが、多分、最後のチャンス。

全力で縮地。目標は

「……？」

途惑つたような気配。

それもそうだろう。恐らく蒼香からは俺が消えたように見えるだろ

うから。

そもそも縮地つてそういうものだし。
ありつたけの魔力を集めて、拳を握り締める。

「！？」

気付かれた。だけど、遅い。

こつちはもう手前の真ん前だ、馬鹿野郎！

「おおおおりああああああああああああつー」

絶叫と共に拳を叩きつける。

壁に阻まれるが、問題ない。魔力で出来ているなら、それ以上の魔力で壊せる！

壁が軋み、ガラスが碎けるような音を立てて割れた。蒼香が何かをするよりも早く、襟を掴んで引き寄せる。

「いい加減、用え覚ませつー！」

鈍い音が響いた。

読んで下さっている方、お気に入り登録してくれている方。ありがとうございます。

いつもサポートが45,000を超えました。

ひとえに皆様のおかげです。

評価が無いのは・・・まあ書くのはなんですが普通ですかね。
頑張ります。

今更ながらですが、ここ変じじゃね?ってところがあれば報告をお願いします。

夕刻の一室で女が声ならぬ声を上げている。

その声は周囲にいる者を自分と同じ様にしようと睨っているようしか聞こえない。

全身が痛むはずだ、無理もない。その苦しみを誰かに訴えてみたいのだろう。

ふと、声が止む。

諦めたのか、それとも別の要因があつたのだろうか。それは当人にしか分からぬことだ。

静寂が空間を支配し、やがてそれを壊すよつて女がポツリと呟いた。

「……痛い」

「うひさい、黙つて寝てろ」

割れたガラス窓から心地よい風が吹き込んでくる。

どうやら蒼香を止めた後、力尽きて倒れてしまつたみたいだ。

今は魔力の枯渇と重度の筋肉痛のおかげで、治癒院の一室、そのベッドの上で俺と蒼香2人仲良くダ・ウンといったところだ。

大きな怪我はすでに治してもらつてるので問題は無いのだが、筋肉痛の方が酷いのだ。

牛鬼のときの反動、さらに蒼香を止めるために全力で動いたこと。それが重なりに重なつて俺はベッドの上で腕すら上げられない状態なのだ。

いくら身体機能が底上げされてたって、あんだけ人間離れした動きをしてれば筋肉痛にもなるよなー……。

チラリと横を見る。同じように腕すら上げられない蒼香がいる。

……まあ、いいか。

蒼香も無事、俺も無事。後はおっさんが帰ってくるのを待つばかりだ。

……あのふぞけた野郎が残つてたらこいつやつてベッドの上になんていないだろ？

思い浮かべるのはあの貴族のよつな男。

うん、思い出すだけでもムカツクな。止めよ。

ふと氣付いたが外からバタバタと走る音が聞こえる。なんだろ？ 確認したいが全身筋肉痛の俺にそんなこと出来る筈もなく、喧騒が通り過ぎていく。

いやー、平和だねえ……。

「い」めんね

小さく、しかし確かに聞こえた。

どうせ暴走のことだろうが、何を今更。

「俺も一回やつたし、おあいこだ」

「あー、そういうえばそうだつたねー」

声に出すと体が痛いから顔だけ笑う。

蒼香もきっとそんな感じだろう。

暖かい風が部屋に入ってきて、カーテンを揺らす。

気にしてなかつたけど季節つてどうなつてるんだろうな。寒いの苦手なんだが。

こっちに来てからは温暖な天気が続いていたので氣にも留めていな

かつた。

「バルドスさん、大丈夫かな？」

「おっさん？……殺したって死なないだろ、ありや」

本音である。

無駄に頑丈そудもんな、見た目的にもキャラ的にも。
ランクも上な訳だし、特に心配する必要はないとは思うけど……。
あー、でも牛鬼(ミノタウロス)の群れの討伐だつたよな。街にも牛鬼が現れて、しかもそれは人が関与して……。
ちょっと心配だな。

陽動？ そもそも、何のメリットが？

しかも実戦に耐えうるかどうかってなら普通おっさん達の方に行くだろ。意味分からん。

つてことは、別か？ 本当にただの偶然で群れになつたか、もしくは他の奴が群れを作つたか。

……いや。

今の俺じやあどうしようもないし。何より面倒ことに突つ込むのは蒼香だけで十分だし。

おっさんも良い人っぽいからなー。無理なものは無理って言う人だらうけど。

とりあえず動けるようになつたら手当たりしだい祭壇のこと聞いて、魔術の練習して……。

今後の予定としては、多分ここに当分はいるだろ。街の人人が許してくれれば、だが。

牛鬼を倒したのはいいが、街ぶつ壊したからなー……。

そこで思考を止める。廊下からも外からも慌てた様な声しか聞こえない。

「何だ？」

「聞こえる範囲では……、怪我人……危険……救援……無理……。
なんだか不安になるようなことばつかだね」

多分、牛鬼の討伐に行つた人たちだ。

つーかよく聞こえるな。俺には雑音のようにしか聞こえんぞ。

「えっと、召喚……囮まれた……囮になつて……逃げて……」

「召喚？」

感心していたらさらに情報が増えた。

召喚つてのは、あれだろ？ 俺がここに来たように、そこに無いもの呼び出す魔術だろ。

それが使われたつてことは誰かが呼び出したつてことになるよな。うわ、なんか嫌な予感がバリバリですよ。

事態が嫌な方向へと向かっているのを考えていると、乱暴に部屋のドアが開けられる。

首だけ回して（これでも辛いが）見ると、何やら怪我人が数人運び込まれてくる。

「患者いますけど！？」

「疲労と筋肉痛、魔力の枯渇だった筈だ。構わん」

看護師さん（女性）が叫ぶのを尻目に、濃い緑髪の白衣を着た態度が偉そうな女性がこちらへ近寄つてくる。
見たことのある顔だ、などと思っていたら、ベッドの上に寝ている俺を無理矢理蹴り飛ばした。

「~~~~~っ！」

蹴り飛ばされた痛みと床に落ちた痛み、さらには悶えたことによる筋肉痛が一気に襲い掛かってきて、声も上げられない。訳も分からず床の上で悶えるしかない。

「男だろ、それぐらい我慢しろ。ああ、そっちの女の子は丁重にな。それが終わったらこっちの男たちをざつとでいいから治療しておけ。私は他を見てくる」

「はい！」

そう言つて女性は看護師を残して去つて行く。
何この扱いの悪さ。
泣くぞ？ ドン引きするほどに。

「あの……、大丈夫ですか？」

さめざめと床で泣いていると、見かねたのか看護師さんが心配してくれた。
いい人や……。その優しさをさつきの偉そうな人に少しでいいから分けてやってくれ……。

あ、この人よく見ると犬みたいな耳ついてる。亜人……？
犬可愛いよな。狼はトラウマだけど。

「で、この人たちは？」

「あ、はい。牛鬼討伐隊の人たちだそうです。大勢の怪我人が出たつてことで……。すみませんがベッドを使わせて頂きます」

さつきの牛鬼の騒ぎでここが半壊してるので、ごめんなさい。と謝られるが、壊したのは俺達だし。罪悪感の方が勝るね。多分他の公共施設的なところだと教会か？も使われているんだろうし、俺が言つことは特に無い。

それよりも

「あの、背の高い男の人を見ませんでしたか？」

「大体2メートルくらいで、上半身裸です」

蒼香が先に聞いてくれたが、少し情報が足りない気がするので付けて足す。

あんな格好の人はそういうだろ。

「すみません。私は見てないです……」

「そう、ですか」

蒼香の声のトーンが少し落ちる。
流石に見てないか。

何人入ってきてるのか分からぬし、看護師がこの人だけって訳でもないだろうからな。

まあ、死んでなければちゃんと帰つてくるだろ。

大体、俺らは動くだけでも労力が必要な状態だつてのに何をしろつて話だよな。

一息吐いて、部屋を見回す。

ベッドが6つ。その全てに怪我人が寝かされている、と思う。見えないので何とも言い難いが。

自分が寝ていたベッドを占領している人を見るが、見た目的には重

傷と言つ程でもない。

ふむ、足や腕、肋骨辺りが折れてるのかもしれないな。もしくは内臓が傷ついたか。

治癒の魔術で治せるんだろうが、魔力も無限ではないしなあ……。

「くそつ……」

「痛えよお……」

小さな呻き声が聞こえて来る。

うん、俺も痛いよ。筋肉痛だからあんたたち程ではないと思つナビ。ちょっと張り合つて、不謹慎なことをしたと自己嫌悪。窓下の壁に寄りかかつて体と頭を冷ます。

「えいっ」

「……つー?」

掛け声と共に、腕をポンと叩かれた。それだけで何とも言えない痛みが走る。

痛みに悶えると他の箇所にも痛みが走る。以下ループ。なんという悪循環。

その引き金を故意に引いた馬鹿を睨みつける。つーか何でお前は平気になつてんだ。

「少しば楽になつたでしょ?」

「ん……?」

言われてみて気付いたが、少し痛みが引いている。

例えるなら筋肉痛2日目みたいな感じ。

「さて、と。いつまでもここにいたら悪いし、宿に戻る?」

「んー、まあ、そうだな」

一応俺たちも怪我人なんだが、ここにいたら迷惑だよな。
立ち上がり埃を払い、ミシミシと音を立てる体に不安を覚えながらゆっくりと伸ばしていく。

うん、大きな傷は大体塞がってるし、大丈夫だろ。
荷物などを一通り確認し終わり、思い出した。

「剣が無い……」

「え?」

牛鬼に投げられてどこかの民家に刺さったままだらう。
手元にあつた方がいいよな。

「悪い、先に剣取つてくるよ」

「あー、いいよいよ。私も一緒に行くから」

面倒そぞだから先に戻つてくれていいんだがな。
とはいえたのもなんなので一緒に行くことにした。
……べ、別に一人で行くのが寂しいわけじゃないんだからな!　と、
一人ツンデレしてみる。即座に後悔する。

うつむ、ツンデレ自体そんなに好きでもないからな……。
なによりも俺がやつたところで、なあ……。
病室を出て、受け付けへ。

今回の治療費は、俺たちが牛鬼討伐の人たちと重なつてしまつて放置気味だつたので少しだけ安くしてくれたそうだ。ナイス。

「ん？　お前たちまだいたのか」

「あ、さつきの」

治癒院から一歩外に出たその場所に、煙草を吸う不良医師がいた。白衣のまま吸うんじゃねえ、臭いが染み付くだろうが。煙草の臭いが嫌いな人だつているだろうに。多分、相当酷いしかめつ面をしていたのだろう。医師は手元の煙草と俺の顔を交互に見て笑つた。

「これが。市販の煙草じゃなくて私が作つた薬みたいなもんだ。魔力の循環を少しだが早めてくれる」

臭いも酷くないだろ、と笑われた。
カラカラと笑う顔が快活な感じを際立たせる。

……ああ、誰かに似てるかと思えば、前の街の治癒院の先生だ。性格はフレアさんの方が似てるだろうが、笑つた顔は先生にそっくりだ。

「なんだ、人の顔をジロジロと」

「いや、前の街　　「オルドセイムね」　　そんな名前だつたのか。
そここの治癒院にいた先生に似てると思って」

治癒師は顎に指を当てて少しだけ考えて、やがて納得したように口元と頷いた。

「確かにそれは私の……姉だつたか、兄だつたか」

「分からぬのかよ！？」

肉親にも分からぬとか、あの人はどんだけ隠してゐるんだよ！ますます得体の知れなくなつた人物は、俺の頭の中とてもいい笑顔を浮かべていた。駄目だこりや。

「ふむ、後遺症などは無さそうだな。……魔力の枯渇はいい、お前の魔力タンクが小さいだけだ。だが筋肉痛の方。あれは不自然だ。まるで外部から無理矢理力を加えて動かされたような跡がある」

いきなり話始めたことに驚き、そして話す内容も意味がよく分からなかつた。

そんな感じはしなかつたと思つんだけど。
無理矢理力を加えられただなんて、そんな操り人形みたいなこと。何を考えている？ だつてそれは当り前じやないか。彼女ガオレノ
背ヲオシテイルノダカラ

「つあー！」

まずい。なんか電波を受信してたような気がする。
俺は普通の人。俺は普通の人。俺は普通の……。
ぶつぶつと言つていたら蒼香に気持ち悪いと言われた。ひどい。

「ああ、そいつえばお前たちが言つていた男な。宿に戻つてゐる筈だぞ」

「え……。本当ですか！？」

……なんであんたがその話を知っている。その話をした時にはいかつたよな？

目を白黒させて考えていると、治癒師は「ひらり」を横田でチラリと見て笑った。

「治癒以外にも出来る」とはあるんだぞ？」

そう言つて頭をポンと叩いた。いや、頭じゃなくて耳、か……？

……盗聴？

先生の透視といい、どうしていつもプライバシーを無視するようなもんを……。

「淑女の嗜みだよ」

「盗聴が嗜みの淑女なんざ豆腐の角に頭をぶつけろ」

「ふむ、遠慮させてもらおう」

最後にカラカラと笑つて院内に入つていったしまつた。

あー……、お礼を言うのを忘れてたな。また今度会つた時でいいか。不意に誰かに袖口が引っ張られる。

とはいってこの場には俺と蒼香しかいないのだから、誰かと言ひ今までもないのだけれど。

「どうしたー、つづりおつー！」

「よつ」

袖を引っ張っていたのは確かに蒼香だったが、その後ろの大きな男が声を掛けてきた。

まあ、おっさんなのだが。

「服を着ているだと……？　つーか怪我酷いな」

「俺だつて年中裸な訳じゃねえよ！　怪我は掠り傷だ。心配するほどのもんでもねえさ！」

そう言つて笑つているが、俺の目には結構な怪我に見える。左腕はギブスで固定して首から吊り下げてあるし、右手には松葉杖を持つて体を支えている。土色のインナーをよく見てみれば包帯によつて出来た凹凸おうとうが見て取れる。

「まあ、俺のことはいいんだ。お前ら街の中で大立ち回りしたそうじゃねえか！」

おおぐ、いきなり大きな声を出すなつての。しかし大立ち回りね。そう言えなくもないけど、その結果が一部半壊した街つてのはどうなのよ？

そう言つてみると、それはそれ、これはこれ。と言われてしまった。「死んじまつた人には悪いが、運が悪かったとしか言ひようがねえ。だが、お前らのおかげで助かつたつて言つてる人も多いつて話なんだ。それは胸張つていいことだろうさー！」

おっさんのその言葉がやけにあつさりと胸に落ちて。自分が助けられなかつた人たちのことを悔いでいるのだと、初めて気付いた。いかん、ちょっと泣きそつだ。こんなに感傷的な人間だつたかな？少しだけ目拭つて、誤魔化す。

……胸を張ることは出来ない。そんなことをしたら隣の馬鹿が全部

背負つてしまつだらうから。

いやはや、難儀なもんだね。素直に喜べもしない。

でも、まあ

「おっさん、ありがと」

この人にお礼を言つのはまた別の話つてね。

気にすんな、と大きな声で笑うおっさんに感謝しつつ広場へ到着。無残に抉られた家屋と石畳が痛々しい。

「おーおー、派手にやつたな！」

「あんまり言わないで……」

大笑いしてゐるおっさんと対照的に、蒼香はげんなりとしていた。うん、まあいい気分ではないよな。

だが蒼香の暴走による被害は街だけで、怪我人はいないとのこと。怪我人なんぞ出してたら確実に自虐やら何やらをしていたことだろう。

「おお、随分高いところに刺さつてんな！」

おっさんの言葉に2人して頷いて、民家を3人で見上げる。2階の屋根付近に根元辺りまで刺さつてているのが見えた。

「どうやって取るのや」

うむ、どうしようか。

随分高いところにあるわ、根元まで刺さつてるわで、俺じや抜けないんじやないか……？

ふと、おっさんが壁を触りながら剣を見上げている。

「おっさん？ 何してんだ？」

「まあ、見てる」

そう言つておっさんは壁に手を走らせた。途端に黄色の稲光が壁面に迸り、円を描き、複雑な紋様を浮かび上がらせ、一つの陣を形成していく。

それが完成したと同時に強く発光し、民家の壁の一部が崩れだした。ガシャン、と重く鈍い音を立てて剣が落ちた。

「魔力が少ない状態なら、こんなもんか」

「へえー」

感嘆の声をあげる。魔術って色々な使い方が出来るんだな。捨い上げて刃を見てみると細かな傷があるものの、大きな罅のよつなものは無いので安心した。

おっさんは剣を見て、鍛ち直した方がいいかもしないと言つが、生憎とおっさん自身も怪我をしているのでそれもままならない。とりあえずやることは終わつたので蒼香とおっさんに呼びかけて宿へ戻ることにする。でも剣を取るために壁を崩すつてのもどうかと思つんだが……。気になつことにした。

「やついたら、バルドスさん。牛鬼の討伐は

「……運が良かつた、ってところなんだね？」

宿へ戻る途中、蒼香が思い出したように言つた言葉は最後まで発せられることなく、おっさんの言葉に焼き消されてしまった。事の概要は、召喚によつて呼び出された牛鬼の群れに囮まれ、それを脱するためにおっさんたちが囮になつた。しかし数の暴力には勝てず、死に掛けたところで突然牛鬼たちが倒れたというのだ。

「そうだな……。まるで、操り人形の糸が切れたよつな、そんな感じだつた」

誰かが操つていたつてことか？
いや、まあ、心当たりがあるけれども。

「召喚師の姿は見てないの？」

蒼香が尋ねるがおっさんは首を横に振るばかりであつた。

んんー？ 魔術のことはよく分からないから何とも素人考えになるんだが、姿が見えないくらい遠くから召喚つて出来るもんなのかね？ イメージ的には術師の周りにしか出来ない感じなんだが……。さつぱり分からん。

兎にも角にも、誰も犯人を見ていないとの事なのでギルドの方もどうしようもないらしい。

「まあしばらくはここで休養だらうから、難しい事なんぞ後でいいじゃねえか！」

そつと笑つて笑つむつさんのおっさんの姿も、ビリとなく寂しさを感じるものであつた。

今日も快晴。

晴れ渡る空の下で少しづつ歯車が回りだす。

申し訳ありませんっ！

色々ゴタゴタしてたつてのもあるんですが、筆が乗らないといふか、指が動かないといふか、そんな感じでした。

関係無いけれど、最初の一行だけ読むと妙に口（←y

燐々さんさんと降り注ぐ光。木を叩く小気味いい音が辺りに響き渡る。他の場所からも音は響き、まるで合奏のようにも聞こえる。街の人々が大忙しと駆け回る中、民家の口陰に青い髪の少女たたずみが佇んでいるのが見えた。

「いやー、今日もいい天気だねえ」

「明後日の方向を見ながら突っ立つてないで仕事しやがれ」

滞在2日目。街の修理を手伝っている俺たちである。

「そんなに時間も掛からずに直りそうだねえ」

「流石魔術と言いたくなる光景だな」

何せ木材で形を整えた矢先に土や石が次々と形を変えて積み上げられていくのだから、こっちとしては荷物運びくらいしかすることもない。

その荷物運びもつい先程終わってしまって、手持ち無沙汰な状態なのである。

街の人の半分位は魔術が使えるから人手にも困らない上に、牛鬼討伐隊の中でも比較的傷が浅かつた人も駆り出されている。

「あ、魔術で思い出したけど、私“闇”的属性も使えるようになっ

たから

「少しその才能をよこせ」

いやもう、割と真面目に。

どんだけ才能の塊なんだよ、お前は。と呴くが本人はどこ吹く風。
これっぽっちも気にしていないようである。

いや、まあ。使えるようになつた経緯を考えるところでもないが。
うーむ、俺にも何かないだろうか。

そう思いはすれど、ようやく安定して光の玉を作れるようになった
俺が、新しく魔術を使えるようになる訳もなく。
つて、そりゃあ。

「“無”の魔術……」

全く気にしていなかつたけど、どんなもんなんだろうか?
つーか何をイメージすれば使えるようになるんだか。

むむむ、と唸つていると轟音と地面が揺れる。

なにかが落ちたような感じだな。それもかなり大きくて重いものが。
音の位置としては多分ギルドとかある街の入り口の方だろう。
うん、魔術は後回しでいいや。

とりあえず野次馬になつてみよつかな。

予想通り。丁度ギルドの前に人壁が出来ている。

小人族や巨人族などもいるから一概にそうとは言えないが、こっち
の世界の人の身長の平均は180くらいだと思つ。

170ほどしかない俺には前が見えん。

「報酬があれだけってのはどういふことだつて…？」

怒鳴り声が聞こえる。

いやもんつけてんのか。こんな時にやることないだらう。そんなことよりさつきの音はなんだつたんだろうかと思つてみるとコートの袖を引っ張られた。

「あれ」

蒼香が指差した方を見ると、納得。

溶けかけの大きな氷が道に鎮座していた。

うつすらと青く光っているので魔術で創り出したものだと分かった。

魔術すげえ。

「うん、鍊度が足らない」

氷を見て頷きながら呟く蒼香。

どこぞの職人か、貴様は。俺には魔術で創つただの氷の塊にしか見えん。

「なんていうか、こう、粗削りというか急場で創つたハリボテといふか。見せ掛けだけの脅し用?」

さいですか。

俺には分からない見分け方の様なものがあるんだろ。それは置いといて、要するに。

「依頼をこなしたはいいが、報酬が少ないから騒いでる感じか」

「だらうね。でも基本的に報酬は事前に決まつてた筈だけど」

ふむ、確かに成功報酬だといった問題が多々あるから事前に報酬金額が掲示されているとかなんとか。

「先程から説明しているように、この街の復旧のために経費を割いているのです。それでも十分な報酬を用意した筈です」

凛とした声が聞こえてくる。

牛鬼討伐依頼のことか。

……街の被害つて俺たちが原因じやん。

蒼香もそれが分かつているのか少し身を縮こまらせている。張本人だし、仕方ないね。

「あれだけのことをやらせておいてあの金額じゃ割りに合わねえつつてんだよ！」

「色でもなんでもつけやがれつ！　このクソアマ！」

「それともあんたが体で払つてくれるか？　ああ！？」

ちょっと強引に前の人を押しのけて騒ぎを起こしている人を見た。1人じゃなく3人。どれも似たような柄の悪い男。ついでに言うと頭も悪そう。

その中でも1歩前に出ているリーダー格の男が青い魔力を纏つているのが見える。

対峙しているのはギルド職員の制服を着ている銀髪の女性。怒鳴り声を右から左と言わんばかりに澄まし顔で口を開いた。

「申し訳ありませんが、金額を増やすこともあなた方に体を委ねる

「とも出来ません。気持ち悪いです、嫌悪感しか湧きません、人生やり直ってきて下さい」

つらつらと言葉を重ねるその姿を見て少しだけ相手に同情した。
しかし奴さんたちがここまで言われて黙つている筈も無く、米神に
青筋立てて今にも爆発しそうな感じである。

「てめえっ！」

もう爆発した。

取り巻き2人が襲い掛かる。

フワリ、と風が歌い、次に確認できたのは荒れ狂う嵐に巻き込まれ
吹き飛ぶ取り巻きたちであつた。

「近寄つてこないで下さい、虫唾むじずが走ります」

彼女が手にしているのは翠色みどりの大型の『』。

それを構える姿は凜々しく、一枚の絵のようである。
などと思つていたら足を踏まれた。ブーツだからそれほど痛くはないが。

ジロリと田線で蒼香に抗議するが、取り合つてくれなかつた。
別にどんな感想を持とうが人の勝手だろ。元気

「くそつ、称号持ちは伊達じゃねえってことか」

「一応、実力でしか認められませんから当たり前です」

なにかやりとりしているが、蒼香の機嫌が少し悪いのでこつちはそれどころじゃない。

とこうか何度も言つが普通に人の思考を読み取るんじゃねえよ。

「いや、なんていうかヨーキは分かりやすい」

さいですか。

蒼香とそんなやりとりをしているうちに事態は進展。

ギルドの人とリーダー格の男が派手に魔術の打ち合いをし始めた。

周囲も巻き込んで。

氷塊と風の矢が乱れ飛びそれぞれ相殺し合うが、流れ弾がこないなんてことはない。

周りの人たちと一緒に退避。尻尾を巻いて即座に離脱。

「つーか誰も止めないのかよ！？」

「誰だつて巻き込まれるのは嫌でしょう？」

「いや、それにしたつてなあ……」

建物の陰に隠れたところでそこから少しだけ顔を出す。

嵐の中心にいる2人はどちらも1歩も動かず、眼前の敵を討とうとひたすら魔術を使用するだけだ。

青と翠が打ち合い、響き合い、消えてゆく。

命を奪うためのものだと分かつていても、その幻想的な光景に目を奪われずにはいられなかつた。

その状況で気付いたのは恐らく偶然。

目の前を飛んで行く氷と、視界の端に映つた小さな人影。

即座に陰から飛び出して踏み込む。

流れ弾と、それに気付いていない女の子が目に入る。

何もしなければ間違いなく直撃コース。

ガチリ、と歯車が噛み合つ重い音が聞こえた気がした。

加速。

目に映る光景から色が失われてゆき、雜音は耳に入ることはない。時間が流れるのが遅くなるような感じを受けながら理解した。

届かない、と。

確かに追いつける。だが、それだけ。

自分の身を割り込ませるには少し遅い。腕一本で防げるような代物じるわざのにも見えない。魔術で固めてあるだらうからそう簡単に斬ることも出来ないだらう。

どうすればいい。

いくら遅く感じているとはいって、時間が止まることはない。

こうしている間にも視界の中で氷弾が少しづつ少女に向かって行くのだ。

どうすればいい！

掴む？

無謀

魔術で

見殺し

救えない

無謀

剣を

不可能

無黙

無理

斬つて消してしまえばいい。

不意に頭をよぎった言葉のままに躊躇いなく剣を抜いて掬うよつこすく
斬り上げた。

さしたる抵抗も響くような音が鳴るわけでもなく、モノクロ無色無音の世界で砂が流れるような音色が聞こえただけであった。ゆっくりと世界に色と音が戻る。

同時に自分が何をしてかしたのかも少しずつ理解してきた。

いつの間にか地面に座り込んでこちらを凝視している田の前の少女を助けるためとはいえ、至近距離で剣を振り抜くってのはどうなのよ。

混乱していく俺の目の前で、少女の田の端に雫が溜まつてゆく。

「ふえ……」

あ、これはマズイ。泣かれる。

「あー、いや、その、これは……おぶつー。」

どうかして宥めようと葉を探していると、いきなり誰かにコートの襟を掴まれて地面に引き倒され、同時にすぐ近くでガラスが割れるような音がした。

「坊主、よくやった！」

地面に押さえ付けられたまま、野太い声と共に乱暴に頭を撫でられる。

ちょっ、顔が地面に擦れて痛い！

「あつちも凄いが坊主の方が凄いな！」

「まあ兄ちゃんがやらなくても俺が颯爽と助けてただうがな！」

「反応すら出来なかつた奴が馬鹿言つてんじゃねえよー。」

何この状況。

俺は押さえ付けられたままだし、頭上でドンパチ聞こえるわ、誰かも分からぬ人たちの笑い声が聞こえてくるわで意味が分からん。

* * * * *

* * * * *

SIDE : Aoka

よかつた。

ユーキに流れ弾が行つたときはどうなることかと思つたけど、ユーキも女の子も無事みたいだ。

気になるのは、日に日にユーキの反応速度や身体能力が上がっていること。

私の才能が、ヒューキはいつも言つが、逆だ。

自惚れではないが、自分が多才であるということは何となく思う。だけどそこから先に進んでいる感じはあるでしれない。同じ場所で足踏みをしているような、そんな感覚。

ユーキの方がよっぽどそれに溢れているだろ？

いや、まあ、ユーキの覚えが悪いといつこのには頷かざるをえないけれど。

「いのつ、いい加減にしやがれ！」

決闘まがいの乱闘はまだ続いている。

いい加減終わらせないと本当に被害が出そうだ。

まあ、私は自分とユーキとその他一般人に被害が降り掛からなければまだ許容できるけれど。

乱入しても誰も何も言わないよね？
よし、行こう。

『歌え、緑黄の風土。羽よりも軽く、鉄よりも鋭く。紡ぎあげるは
敵討つ牙！』

一直線に嵐の中心に走り出し、いつものように呪文を語りあげる。
左手の人差し指に付けた指輪によつて少しだけ自分の負担が軽減さ

キーワード

れる。

必ずしもイコールではないけれど、魔術の構成は綿密になればなるほどその魔術の強度が上がる。

だから私は謳う。より堅牢に、崩れないように。元通り。

……まるで私自身のようだ、と思ってしまった。

『シフス・ドウオノワクラ
『旋風の双刃！』

両手に生まれた双振りの短剣を滑るように振るつてゆく。
甲高い音色が連続して響く。

「てめつ、ガキイ！　ぶつ殺されえのか！？」

何か怒鳴つてゐるけど、関係ない。

「30秒でいいです。少しだけ時間を下さいませんか？」

「30秒だろうが1時間だろうが頑張りますけど…？」

女の人の良く通る声が後ろから聞こえたので適当に返しておべ。
正直、向かってくる氷弾の数が多くて返事をするのも一苦労なのだ。

いくら手数を重視して風をメインに武器作つたからつて私の技量が
着いて行くかは別問題。

いくらセンスや才能があるからといって、経験と努力によつて裏打ちされた実力には遠く及ばない。

攻めに關してはセンスがあると言われたこともあるが、逆に守りは
褒められることも少なかつた。

チツ、と音を立てて腕を掠めた氷弾。

ああ、集中しなきや。考え方をしながらだなんて、私がそんなに器

用なわけないじゃないか。

『私は誰にも囚われず 貴方は誰にも縛られず
我らは鳥 何にも属すことない自由の象徴』

後ろから聞こえる澄んだ声。

それに合わせて踊るように、双剣を振るう。振るう。振るう。
絶え間無く襲い来る氷弾を視界に入ってきたものから順に斬り落と
してゆく。

ひたすら防戦に徹するがそれでもジリジリと押され始めてきた。
流石にギルドの職員に喧嘩を売るだけのことはあるようだ。魔術の
行使の間に隙がない。

こっちの双剣は少し削れてきているといつのこと、これじゃあ直して
いる暇も無い。

『彼は何にも拘らず 彼女は何にも侵されず
彼らは雲 誰にも捕まることない奔放の象徴』

ビシリ、と魔力の土と風でできた双剣の1つに罅^{ひび}が走り崩れてゆく。
やっぱり耐えられなかつた。ここまで良く持つたとも思える。

2つの属性 1つは固定する力を強めるもの で固めたといつ
ても私ではこの程度だろう。

残る1本も時間の問題だろう。

とはいってもこのままでは手数が足りずそのまま押し切られてしま
う。

あと10秒、かな。

イメージは水。

詠唱を省略。簡略式で速度を重視、刀身は固めずに基本性質の強さ
を上げる。

射出型、回転数と数を上げるために単発の大きさを小さく。

『アキュリス・アクア
穿つ水短槍！』

水と氷がぶつかり合うが、水はなすすべなく^{おか}蹂躪^{じゅうりん}され^{じゆ}てゆく。
まあそれだけでは終わらせないけど。

『^{エルシオン}
侵食！』

氷弾に纏わり付いた水が、その魔術構成を侵し頑強な造りを脆くさ
せる。

これなら簡単に斬れ

「ないしいつ！？　ああ、もうー　いくら出力が弱いからって得意
分野で負けるな、私っ！」

無理だった。

残っていた剣も3つほど斬り捨てたら普通に折れた。

あ、これマズイ。

視界を埋め尽くすほどの氷弾。そのどれもが私を貫き後ろにいる女
性を巻き込むには十分な代物。

詠唱を省略して魔術を撃つても焼け石に水。結果はほとんど変わら
ないだろう。

それでも足搔くけど！

詠唱を破棄。“闇”の属性を展開。性質“収束”による魔力の圧縮。
力技で刹那の間に込められるだけの魔力を注ぎ込み、発動！

適当に放たれたそれは耳障りな音を立てながら数個の氷弾を逸らす
ことには成功した。

無理矢理行つた魔術行使の代償で右腕に激痛が走つてているが関係な
い。

更に撃とうとして　爆炎と、土の壁によつて阻まれた。

「え……？」

「まるで狙つたようなタイミング。もっと早く来い、と言いたくな
りますね」

声に振り向くとそこには異様なものがあった。

先程まで持っていたのは女の人と同じくらいの大きさの『たこたん』
今見ているものはそんなものではない。

「魔術式攻城用超大型固定弩。『喰らい尽くす大嵐』」

「そんなもの街中で展開しないで――!?」

名の通りの見た目と大きさである。

いかにも 前はあるものは全部さわらせていいのです！ みたいなそ
の形状を従える女性。

ପ୍ରକାଶିତ

る。
土の壁が崩れると同時に、限界まで張り詰められた弦が解き放たれ

「ぐ、そがあああああ！」

対峙していた男はいつの間にやら創つていた氷塊を撃ち出しが、翠色の矢はものともせずに貫き男を

男には当たらず、引つかれるよつた形で空へと消えていった。

……なにこれ？

後に残されたのはやつきた顔をしている女性と空を見上げる私だけ。

「快適な空の旅へ。1名様、ご案内します。出来れば世界の裏側からここまで行つて欲しいのですが」

クルリといきなりへ向き直り深々と頭を下げてくれた。

「助力のほど、感謝いたします。どちらにも決闘まがいのよつた戦闘は苦手で」

「ああ、いえ、そんな。偉そなこと言つておいてこんな様ですし」

1時間ぶりにか約束の30秒も無理だったのに。

しかし、女性は首を横に振つてくれた。

「それでも、あなたが来てくれなければ被害は増えていたでしょうから。この街の一員として礼を言うのが当然でしょう」

他人にお礼なんて言われ慣れてないからちよつといわばゆい感じがする。

多分、私の顔は赤くなっていることだろ。

ヨーキの足を踏んでおいてなんだが、微笑まれて少しどキッとしたのは私だけの秘密にしておいつ。

「さて、言葉だけというのも少し味氣無いですし、お金はありますんがちょっとした物を差し上げます」

?

さて、何が貰えるんだろうか。

街の惨状は目に映らないよう、少しだけ上を向く私であった。

* * * * *

* * * *

ウラガタニ

「おい、いいのか？」知り合いなんだろ？」

乱闘していた場所から少し離れた建物の陰。覗き込まなければ見えないような位置。

した女 フレア に話しかける。

こいつも随分と怪我をしていたが包帯の1つも巻いていない。

ともに魔術の効きが他人よりも顕著らしい。

「いいのさ。見送りまでして1ヶ月も経たないうちに再会だなんて
かつこ悪いじゃないか」

影でよく分からなかつたが、そう言つて軽く伸びをしながら笑うフ
レアの横顔はさっぱりしたもののように見えた。

「ま、あの子たちを頼むよ。任せたはいいけど少年も中々に危なつかしいからねえ」

「そりやあ、かまわねえが」

そんなに心配なら付いてくればいい、と言おうと思つたが止めた。
俺がそんなことを言つて付いてくるくらいなら、最初からそうした
筈だ。

ふむ。

「じゃあ、達者でな」

背を向けたフレアに声をかけると振り返りもせずに右手をプラプラ
と振られた。

路地の奥へと消えていくのを見送つて、壁に寄りかかる。

「はあ……」

病み上がりにあんなどせんじゃねえよ……。

ユーキも嬢ちゃんも正義感というか、出たがりというか。
2人とも1歩間違えば確實に死んでたじゃねえか。

柄じやねえが年長者として言つておかないと不味いだろうか。

ヒヨイと顔を出して2人の様子を盗み見る。

先程まで命を落とす危険があつたにも関わらず、2人は笑つていた。

……まあ、いいか。

気を配るのも大人の役目つてな。

いくつか気になるところもあつたが、まあ、今はいいか。

あいつら自身でどうにもできなくなつたら少し手を貸すくらいでい
いよな。

本日、第3都市にて”無”の発動を確認
またひとつ、歯車が進む

本当に申し訳ないです！
やりたいことが多すぎたこの様ですよ。
生きています。一応。

随分長いこと書いてなかつたので色々おかしいところがあるかも知
れません。
もし見つけたら感想にでも書いて下さい、お願ひします。

空が茜色に染まる頃。

俺とおっさんはギルドの休憩室の一隅で顔を突き合わせていた。いつも、まだ顔がザリザリしているような感覚が。

「つか、結局どこに行きたいんだ?」

体に比べて小さなカップを持つたおっさんが聞いてくる。
ありや、そういうえばおっさんは詳しいことは言ってなかつたか。
まあ、最終的な目的地とすれば……

「前に聞いた祭壇。現状として手掛けりも何も無いけどな」

「どこのにあるのかも分からぬ場所が目的地、ねえ」

「なんだよなあ……。

あの野郎、それ以外何も言わずに行つて行きやがつたからこいつしては手探りで進まなければいけない訳で。

「何の話ー?」

ギルドの女性に礼の品とやらを貰いに行つていた蒼香が帰ってきた。
蒼香の手には……一冊の本?

「次はどこのへ行くかって話だ。つつても決まつてゐるようなもんだが
な」

「ん？ どうこいつ」とだよ」

蒼香は手に持つ本を膝の上に抱えて椅子に座り、おっちゃんに続きを促した。

バサリ、とテーブルに地図が広げられる。

「この街がここかな。んで、歩いて10日前後か。北に行くとするとどうしてもここ」

トン、と一点に指を置いた。

「ここの山に登たる」

大陸を上下を分ける様に存在する線がある。
さて、山ねえ。それを超える手段つていうと
……山登り？

「いや、そんな顔すんなよ。別に山登りなんぞしねえいつの

「え？ じゃあどうやって山を……？」

おっちゃんが言つやんな顔とはどんな顔か、知りたくもないのでもそこ
はスルー。

そして俺の代わりに蒼香が尋ねてくれた。
山を登らずに越える方法？

「トンネルとか？」

「いや、あそこのは鉱物も取れるから坑道はあるが抜けるような

もんはねえ。ま、鉱山で栄えた街があるがな

「んー?」

蒼香と2人で首を捻つているとおっさんに大きな声で笑われた。
そして目の前に突き刺さる翠色の矢。

「もう少しお静かに」

「……おう、すまん」

こんなに小さく見えるおっさんも初めてだな。
叱られた子供のようである。

まあ俺も平氣な顔してるけど背中は冷や汗で酷いことになってるけ
どな!

音も立てずに消えていく矢。

残るのは穿たれたテーブルと地図だけである。

「おっかねえなあ

「もつといつ、物静かな女性^{ひと}だと思つてたんだけどな」

「いやいや、街中であんなもの展開する人がそんなどつたら私は偽
者かと疑つよ」

ヒソヒソと3人で顔を近づけて物凄く失礼なことを話し合つ。

「……一応言つておきますが、聞こえますからね」

「「「」めぐなさ」「」」

即座に3人そろって謝りました。

山越えの方法は現地で見て驚け、と言われてやることも無くなつてしまつた。

蒼香は貰つた本を読んでいるし、おっさんは傷ついた体を解すため柔軟をやつている。

自分も軽く魔術の練習をするが、どうにも上手く歯車はぐが回らない。仕方がないので蒼香が読んでいる本の詳細でも聞こうとした、そんな時である。

「……何か鳴つてる？」

それに一番に気付いたのは蒼香だつた。
微かに響く音。恐らく振動音だ。

俺たちの荷物の中から聞こえている。

「……なんで携帯が

適当に自分の荷物を漁ると、使わていなかつた自分の携帯が振動していた。

恐る恐る開く。

電波は圈外のまま。しかし確かにメールを受信していた。

「何それ？」

蒼香が聞いてくるが、こつちはそれどころじゃない。

充電が残つてるとはいえ、動く筈のないものが動いているのだ。
どこのメリーさんからでも電話が来たのかと思つたつつの。
いや、まあメールが届いただけでも十分怖いんだが。
呪いのメールではないことを祈りながら確認してみる。

そこには差出人も件名も無くただ簡素に文が書かれているだけだった。

『セレスバルナッソス』。その酒場“ひと時の楽園亭”。一番奥
のテーブル
アカツキのツルギ』

意味が分からん。

”アカツキのツルギ”が何かは分からないがキーワードか何かとして覚えておけばいいだろ？

このメールの送り主は、まあ、あいつくらいしか思いつかない。俺たちに何をさせたいんだかな。

心の中で悪態を吐くが、そんなことをしても何が変わる訳でもない。

「無視しないで」

頭を鷲掴みにされ無理矢理首の向きを変えられる。
とりあえず叩はたいて掴むのを止めさせる。

「で、何なんだ？」

「ん、まあ簡単に言うと遠くの相手とも連絡が取れる機械。ここじや
や使えない筈なんだけどな」

柔軟を止めて興味深く聞いてくるおっさんの間に答えるが、携帯を蒼香に手渡してやると物珍しそうに見ている。

「携帯は無いんだよな、」*ヒヒヒ*。どうやって送つてきたんだか。

「ねえ、バルドスさん。この”セレスバルナッソス”って次の街だよね？」

「おう！ 別名、鉱石と風の街だぜ！」

蒼香の問こと、おっさんの答え。

蒼香が何を気にしているのかは分からぬが、おっさんが言つた街の別名にちょっと興味が引かれた。

山が近いから風の街なのかねえ。

それとも何か魔術に関係していることだらうか。

「何か、薄気味悪いね。まるで全部見られてるみたいで」

「まあちょっとタイミングが良すぎると氣もするが、山を越えるならここが一番安全だしなあ」

一応別のルートもあるのか。

流石に山登りなんてしたくないし、何より安全な道を行きたい。いや、その街で白でもその使いでもが待つてるのであれば是非とも別のルートを行きたいが。

「ま、考えても分からんよ。気楽に行こうぜ」

考えることを放棄する。

もしもを考え出したらきりがない。

樂觀的すぎるかも知れないけど、俺はこれくらいで十分だね。

難しい」とは分からんよ。

「やのとーーつーー」

「は？」

壊れるのではないかと思つて、大きな音を立てて誰かが入ってきた。
その姿を見て、すぐさま脇に立て掛けたおいた剣を取る。

「あなたは、どうしただ？」

「おー、ユーキ？」

病的なまでに白い肌、膝までの髪、飾り気も何もない白いドレス。
上から下まで真っ白なその姿。

夢に出てきたあの姿と同じ。アレと違うのは大鎌を持つていないと
ころか。

「ん、ああ。仕方ないか。姉さんにやらされたものねえ」

「あなたがアレじゃなって証拠は」

いや、証拠もなにもない。

そもそもアレだつたらこんな悠長に会話が出来る筈がない。
困ったように首を傾げる白い女を見て、そつは思つが、体が完璧に固
まってしまつてゐる。

「んーと……、あんなに愚痴を言つた仲なのに、私のことは遊
びだつたのね！」

「愚痴を言つてたのはあんただけだし、誤解を招くような言い方をするんじゃねえ！？」

両手を合わせて良い笑顔になつたと思えばこんな発言をしてくれた。確かにこの人は先に出てきたほうの人だわ。

先程まで緊張していた自分が馬鹿らしく思えて、一気に脱力して椅子に座り込んだ。

「で、結局なんなの？」

「……俺にも分からん」

それにしても蒼香よ。誰なの、じゃなくてなんなの、とは酷いな。いや一連の流れを指しているんだつたらなんなのでいいけど、明らかにあの白い女性を見ながら言つたし。

「じゃあ血口紹介しようかな」

大笑いの余韻を残す表情で女が口を開く。

黙つていれば綺麗なんだよな。黙つていればの話だけど。

「うーん、そうね。イリスト呼んで。魔術は光で広範囲殲滅型。スリーサイズは上から」

「アレーラとの関係は？」

関係ないことを言い出したので無理矢理ぶつた切る。
少しの沈黙。

「……戦友、が一番近いかな」

イリスの眼はどこか遠くを見ているようだった。

想いを馳せているのか、こちらのことを忘れてしまったかのようだ。
視線は中空を彷徨つていて、さまよる。

蒼香はあまり面白くなさそうな顔をしている。

お父さんは、別段意見は無いんだね。

「で、そのイリスさんは何のためにここに来たの？」

棘を含んだ蒼香の言葉。

機嫌悪くするなよ。後々面倒なんだし。

蒼香のジトッとした視線を受けながらも別段気にしていないようある。

「まあ、あなたたちのお手伝いみ

「手伝い？」

「そりゃ。姉さんとか、アキラとか大変だつたでしょ？ 私がいれば少しは収まると思つし」

確かに大変だつた。でもなんでそれはアンタがいれば収まる？
くそつ、分からぬことが多いすぎる。

情報を整理していると、突然テーブルが派手な音を立てて跳ね上がる。

「お父さんはなんでヨーキを狙つたのー？」

「……今はまだ教えることが出来ないわ

蒼香が拳を叩きつけたらしい。

噛み付くように身を乗り出した蒼香の体から赤い魔力も漏れ出して
いるし、少し落ち着かせないとマズイか。

「何を言つて　！」

「じゃああいつらの目的は？」

蒼香を遮つて質問する。

あと、少し声を抑えないとまた射たれるぜ？
肩をすくめながら蒼香に視線を送つてみる。
まだ何か言いたそうな顔をしているが椅子には座つてくれた。

「『めんなさい。 それも駄目なの』

ふむ。

今、俺たちが知つたらいけないってのはなんでだ?
自分の口からでは言えないなら分かる。だけどイリスは今はまだ、
と言つた。
知られたら困ること?

「まだ物語は始まつたばかり……」

「？」

イリスが小さく呟いた。

物語？

序盤だから話せないこと？

……その物語の核心へと至ること、もしくは核心ネタバレそのもの、かな。

なんか、こう、最後の扉を開く鍵を持つてるけどその扉がどこにあるのか分からぬような感じだな。

面倒なことになつてきたな、と椅子の背もたれに体を預けて天井を見上げる。

「じゃ、そういうことだから私も一緒に行くからね」

「却下。得体の知れない人を近くに置いておきたくはない」

ああもう。また蒼香が囁み付いて。

まあ確かにこれ以上ないつてくらいに怪しい人だけどさ。

でもどう考へても鍵を握る人なんだよな。

おっさんを見ても肩を竦めるばかりで何も言わない。

「得体の知れないって……。ただの魔術師よ」

ただの、ねえ。

ぼんやりと天井を見ながら会話を聞く。

「私が今言えるのは、あなた達に死んでもらつては困る。それだけ」

死んでしまうと物語が進まないから。

そしてこの物語が進まないと、もしくは終わらないとイリス自身が困るということ。

「あなたに言われないでも死ぬつもりは全くないよ」

「一番危険な職業に就いてるのに、絶対に死がないと言えるの?」

……駄目だな。情報が少なすぎる。

目的も何も分からぬからこれ以上の推測は無駄かな。
とりあえず今やるべきことはこれの收拾をつけることか。

「なあ、おっさんは？ 賛成？ 反対？」

蒼香とイリスにも聞こえるように話しかける。

話しかけられた当人は露骨に嫌な顔をしたけれども。

「俺あ元々お前たちにくつづいて来たようなもんだからな。正直に
言えばどちらでもいい、だ。会話の内容が8割方分からねえし」

「そつか。蒼香」

「……何？」

物凄く不機嫌な顔と声音で返された。

「アキラさんのことについて、俺らは何も知らないようなもんなんだ。
多少不審な点があろうが来てもらつたほうがいいんじゃないの
か？」

「それは、そうだけど……」

「まあ、あれだ。俺は別に問題ないと思つてゐ

そもそもこの人じやなくとも俺たちについてくるメリットが無いし。
ついてきても何も得るもののが無いのであれば、そういうふうに近寄つてこないだろ。

「……一つだけ誓つて

「なあ」「？」

「裏切らないでね」

ゾッとするような聲音で蒼香が囁いた。

おっちゃんも雰囲気に呑まれたのか少し腰が引けている。

「創世の神の1柱” フォルモント” の名に誓つわ。どんなことがあっても、私は、あなたたちを裏切らない」

真剣に、蒼香を真っ直ぐ見つめてイリスは誓いを立てた。
蒼香とイリスは視線を逸らさず、ただ互いを見ている。

「……了解。一緒に」

沈黙を破ったのは蒼香だった。

正直、ホツとした。ここで折れてくれなかつたら今後の方針をノーヒントで決めなきやいけなくなる。

「しかしあ、あのイリスつて嬢ちやんもすげえ名前出すな

「うん？」

「”フォルモント” つつたら満月を象徴とする誠実さを表す女神だ。それだけ本気なんだろうよ」

「へえ。誠実さねえ。

どっちかってーと俺は創世の神の方が気になつたんだが、まあ後で聞こうじやないか。

「じゃあ、これからよひへー。」

花のような笑顔、と言えばいいんだらうか。

自分の語彙の少なさに困るが、まあよしとしよう。

「ああ、わいこや。これ、何の」とか分かるかね?」

イリスに携帯を渡す。

「アカツキのツルギねえ。懐かしい合言葉……」

「合言葉なのか?」

おっさんがあ話に参加していく。よほど暇だったんだらう。
まあおっさんは蒼香の親父さんにも合つてないから話が分からな
つてのも当たり前なんだけど。

「やけ、私たちの旅団だった”ピースメーカー”でアキラが使つた合
言葉」

ピースメーカー
平和を作る者たち、ねえ。

それに私たちの旅団だった、ね。

「……”ピースメーカー”? 待て待て待て。あれか? お前らが
使つアキラつてのは鈴谷暁のことか?」

「ん、そりだよ。蒼香の親父さん。つか知つてるんだな」

「馬鹿野郎! 冒険者や傭兵でその名前を知らねえ奴がいたらモグ

りか世間知らずだ！

凄い剣幕で怒られた。

そんなに有名な人物だったのか、あの男。
で、それに狙われる俺って何さ？

「そうか。あの人は今行方不明って話だったが、ちゃんと生きてる
んだな」

おっさんの言葉には多分、憧れとか尊敬とか、そういうものが含
まれているんだろう。

命を狙われた俺としては全くもつて複雑な気分ではあるが。

「ま、感傷はそれくらいにして準備とかしましょう。歩くとしたら
結構かかるし」

「……そうだな。ちょっと商人ギルドの方に行つて手続きとかして
くるわ」

そう言っておっさんは出て行つた。

準備に一番時間がかかるのはおっさんだからな。

「ヨーキ、イリスさん、私たちも

「ん？ もう」

「はいはーい」

蒼香に連れられてギルドを出る。
もう外は暗くなつてきていて店もしまつてゐるだろうから、明日陽

が上がつたらすぐに出発といつ訳にはいかないだろ？

今から出来ることと言つたらせいぜい身の回りの物を整理すること

くらいだろ？

蒼香もそのつまつのように宿へと足を向けていく。

「勇輝、蒼香ちやん」

「うん？」

「何？」

イリスの声に振り返る。

言い出しつくいのか少し沈黙が続く。

「ありがとう」

真っ直ぐな言葉。

言つた本人は照れくさいなどと言つたりしづらをまともに見ようともしないが。

ふむ。その言葉が何に対してなのか、はつきりしていないけど素直に受け取つておこうじやないか。

蒼香は頷いているだけである。

一緒に行くこと云々についてだつたら打算的なことが大きいから少し罪悪感湧くけど、必要としている、ということなら同じだし。

「じゃあ勇輝と同衾しようかなつ

「その白い服を真っ赤に染めますよ？」

ドーキンが何を指すのかは知らないが蒼香がこんなこと言つんだか

らまたアホなことを言い出したんだろう。
蒼香とイリスが言い争いをしながら先を進む。
なんだかんだ言って仲良いんじゃないかな?

そんなことを思つ夜の一幕。

同衾 同じ夜具で一緒に寝ること。主に男女が一緒に寝ることを
いう。

「やおおおおおーーーー！」

街道に無駄に響き渡る俺の声。

言つまでもなく魔術の練習である。

昼に街を出た後、蒼香に昨日貰っていた本の詳細を聞いたところ、なんと基礎魔術書の写本だつた。どうやら前のギルドの奥には書物庫のようなものがあるらしいへ、そこにはあつた魔術書をお姉さんが『』したもののがひらしてある。

「しかし、やれどもやれども上手くならねえなあ

おっせん、うつせこ。

人が気にしてることを言つんじやない。

「てええええー！」

指先に灯る光はまるで切れかけの螢光灯のように点滅していく。あ、消えた。

ここまで持続が出来ないとは、泣きたくなつてくる。

みんなにコツを聞いてみたが、蒼香は「搾り出すよつてーーー」、おっさんは「練習しかない」、イリスに至つては「気合ーーー」、などと全く当てにならない答えが返つてきたのでお手上げ状態である。だけどまあ、折角聞いたのでイリスの気合とやらを実行中。結果は……無残なものである。現実は非情である。

楽なものではないと分かつてはいたが、基礎でここまで躊躇^{つまづ}くとは……。

「続けてれば結構簡単に出来るようになつたりするよ」

蒼香から励ましかがなんだかよく分からぬ言葉を貰つた。
そういうものか、とも思つが蒼香が出来たからつて俺が出来るとも
限らないので必死になつてやつてゐる。

……まあ、おっさんの言つとおり、上手くなる気配が全く無いのだが。

「イリスの魔術の腕前ってどんなもんなんだ？」

軽く休憩がてら質問してみる。
確か広範囲殲滅型だつたか。

「例えるなら敵だと無駄に強かつたライバルが仲間になつた感じ?」

「弱体化!?

しかも分かりにくい!

まあ、あるよな。

敵だと猛威を振るつていたライバルとがが味方になつた途端物凄く
弱かつたりしてな……。

詐欺だろ、あれは。

と、そんな懐かしい思い出に浸つても仕方ないので方向修正。

「もしくは前作で壊れだつた格ゲーキャラが修正入つて最弱にされ
ちゃつた感じ?」

「少し分かりやすくなつたけど使えねえ」とこの上無いなー。」

……ん？

違つ。そういうことを聞きたいんじゃない。

「聞き方を変えよ。どんなことが出来るんだ？」

「えー？」

あれでもない、これでもないと考え始めるイリス。
そんなに考えるようなことだらうか？
まさかこれも話してはいけないことに入るのか？
いや、イリス個人の力量に関することだからそんなことはないか。

「全盛期でも国一つを相手にして壊滅させるくらいしか……」

「あんたはどうまいでいけば気が済むんだよ！？」

個人で国を相手に出来るってビビの最強キャラだよー。
そんな奴がそちらにいたら世界が成り立たないわ！

「まあ今じゃ全力出しても1個中隊相手に出来れば良い方じゃない
？」

あつさり言うが、それでも規格外な氣がする。

戦闘スタイルというのもあるんだろうが、それにしたって……。
蒼香の父親も強かつたが1人で軍隊相手になんて……。
出来そうだな。

あの剣が飛ぶのが魔術だとして、その射程がどれくらいかにもよる
けど、少なくとも戦場を引っ搔き回す程度なら出来そうだ。
なんでこんな人外たちに狙われなきゃあかんのか。

「さてさて、私の話はいいから、ゴーキの魔術の練習しようつか」

イリスが言つ。

「ゴーキは持続が壊滅的っぽいから、他のどけを伸ばしてみようか」

「どうしようか？」

「形変えんのも持続が必要になるしなあ」

「ま、順当に考えて瞬間火力でしよう」

持続とは真逆の、一瞬の火力と質を高めること。

「お手本ね」

荷物を置いて、なにも無い草原へと向かう。イリスの全身から白い光が湧き上がり、それはゆっくりと消えていく。

いや、違う。消えているのではなく、その全てがイリスの右手に収束されていつている。

ビリビリと圧力のようなものが感じとれる。量だけなら暴走した蒼香と同じくらいであるが、特筆すべきなのは、その輝き。

蒼香やおっさんでは比べ物にならない。

満円の光がそのままそこにあるような存在感。

『開放』

光が放たれる。

視界を埋め尽くすほどの白は、一瞬で消えてなくなる。残つたのはイリスを始点として薙ぎ倒された草原だけである。

「なにそれすぐえ」

「わ、私だつてできるよー」

「張り合わんでもえつついで」

俺の言葉を聞かずに蒼香はイリスと同じ様に草原へと向かつ。蒼香も白い光を纏つが、やはりイリスほどの輝きはない。鍊度が違うだけでこうも変わるものなのだろうか。

上手く言い表せないが、何か根本的に違う部分がある気がする。

『開放!』

ゴウ、と風が吹く。

だが蒼香が放つた光は、イリスのそれと比べると半分ほどだひつ。事実、草原もそれほど倒されていない。

「とつあえず俺の目標は蒼香に追いつくことかな」

「そうね。さすがにいきなり私に追いつけとは言わないわよ

とつあえずはやってみて体で覚える、だな。

* * * * *

「セヒ、蒼香ちゃんはなぜどうつか？」

「え、私も？」

ヨーキーが集中し始めた頃、イリスさんが話しかけてきた。
いくらお父さんと同じギルドにいたからって、それほど実力は離れてないと思つていたけど、大違いらしゃい。

さきほど魔力の放出を見れば嫌でも思い知らされるところのものだ。

「そりや当然。勇輝だけが頑張つて、蒼香ちゃんは見てるだけってのは不公平でしょ？」

「まあ、確かに」

鍛錬を怠つていればすぐにもヨーキーに追い越されるだろ？
それは、なんとこゝか、マズイ。
プライドなんて上等なものではない。
ただ、もう少しくらいお姉さんぶつていてみたいのだ。
と、そこまで考えてイリスさんがニヤニヤと自分を見てくる」という気が付いた。

「……なんですか？」

「べつにいい？」

イラッとする言い方だ。

もちろんじゅれあい程度のことなどうが、一いちの考え方を見透かされているよつで少し気分が悪い。

「あ、懸ふやけせ」の辺にしておいて今から鍛錬内容を説明します

す

「……はあ、了解」

「蒼香ちゃんは出力が足らなくていいとなので、少し無理をしてもりこまか」

「こんばんはふぱふーとやる気の無い感じでイリスさんは合この手を入れる。

無理、とはいつこいつだらうか。

人並み程度のものなら苦もなく出来ると自負しているが。

「まあそんな感じなことを考えているんだらうたゞ、息するのも辛くなるだらうから気を付けて」

「うあつー？」

肩に手を乗せられると同時に、全身に重圧がかかる。私はそれに耐え切れずに膝を付いた。

ほんとに呼吸も出来ないし！？

「集中して！ 体の中にある魔力を少しづつ吐き出して！」

なるほど。今私の中にある魔力の8割方はイリスさんの魔力だ。要するにこれは、魔力容量を増やすための荒療治。

自分でやろうとすれば無意識にセーブをかけてしまつから、いつでもしなければ容量はなかなか増えない。

「蒼香つー？」

「嬢ちゃん、大丈夫か！？」

「だ、い……じょ……ぶ……」

ユーキとバルドスさんが気が付いてくれたらしい。
声を出せないことがこれほどもどかしいとは思わなかつた。
汗が吹き出る。

酸欠で意識が曖昧になつてきている。

気を抜けば体が破裂してしまいそうな感覚。
手放しそうになる意識を、奥歯を噛み締めて必死に繋ぎ止める。
少しづつ、ゆっくりとでいい。しかしそう思つほど焦つてしまひ。

「蒼香つー。」

ぼやけた視界の中、ユーキの顔だけははっきりと見えた。
ユーキの右手が私の額に当たられる。

冷たくて気持ち良い。

最初に会つたときよりも少しだけ固くなつた掌。
私のことを引っ張ってくれる、優しい手。

縋り付いてしまつてゐるのも分かつてゐる。
依存しているのも分かつてゐる。

だけどこれくらいの夢を見たつていいじゃないか。
じわりと涙が滲み出る。

私だつて女だ。

男を好きになつてもおかしくはないだろ？
なんで普通でいられないのや。

……よし。ちょっと気分的に楽になつた。
四肢に力を。顔を上げて。

チマチマとなんかやつていられない。

呼吸を整えて、魔術を使つもつりで一気に

「……あれ？」

いつの間にか普通に呼吸をしていた。

……なんで？

「……呆れた。これも愛の成せるものなのかしら」

イリスさんが何か言つていて「う」とにしておこう。

食べ過ぎのような感覚でちょっと気持ち悪いけど、息もままならない状態よりはましである。

腕、大丈夫。脚、ちゃんと動く。視界も良好。

まだイリスさんの色に染まっている部分もあるけど魔力も問題なく循環している。

「蒼香、本当に大丈夫か？」

「え、あ、うん。少し苦しくくらいで他は何も……」

むしろ魔力の循環に関しては平時よりも調子がいいくらいだ。

「無茶しやがるなあ！」

「いのでもしないと短期間で魔力容量を増やす」とは出来ないから、仕方ないことね

簡単に言つてるけど1歩間違えれば死んでてもおかしくないんだけどなー……。

「わい、じゃあ先を譲りますかー！」

「まだ、最寄の村まで結構あるからなあー。」

イリスさんとバルドスさんが大きな声を上げて前を行く。
え、私のことは放置？

「ほれ

「？」

ユーキが屈んで背中を見せる。
えーっと、これは、その。

「まだ気分悪いんだろ？ 背負つてやるから」

……。

つまり、それは、おんぶっこい? と?
ボツ、と顔から火が出るよ! て熱くなる。
さすがにそれは恥ずかしい。
いや、肩を貸したり（事故だけど）押し倒されたこともあるけれどー。
あ、思い出したらまた顔が……。

「じゃあ、失礼しまーす」

これ以上ボロを出さないよ! セリフを口にせずに、
うん、見た目よりも大きく感じる。

そういうえば、お父さんに一回だけ負ふつてもうつたことが、あつた、
よつ、な……。

蒼香が背中で寝息を立て始める。
あんだけ元気だったのがこれだけ消耗するのか。わざわざこんな道
の途中でやらんでもいいだろつに。

……まあしかし役得って事で

一 ほれ、荷物持つてやるよ」

「おっさん、ナイス」

いくら身体能力が上がつてゐるからつて自分の荷物 + 蒼香と蒼香の荷物は流石に重い。

「さすがに無茶しすぎたわね」

「まつたくだ。次からは気を付けてくれ」

イリスの言葉に即座に返す。

「ありや？ てつきり次からは『こんなことはすくなつて』言われるか
と思つてたんだけど」

「詳しい」とは分からんが必要な」となんだろ? 蒼香もやる気は

あるんだ。俺がどういっても仕方なこと

「これでもイリスのことは信用、いや信頼していると言つていい。

「なあおっさん。 ”ピースメーカー”について知つてゐることを教えてくれよ」

「俺じゃなくて本人に聞きやあいいだろつが」

「一般的な認識も知つておきたいんだよ」

「あー、そうだな。”ピースメーカー”のメンバーは6人。
”剣聖”鈴谷暁。“聖女”イリス。”魔淨”のヴェルン。”亜竜”
”ティーロ。”暴流”荒神。”悪食”のアニメ。 であつてるよ
な?」

おっさんがイリスに確認を取る。

「なんだろう。名前からして強キャラ臭がする」

「実際強いんだよ。それこそ次元が違う。6人揃えば世界中を相手
にしても勝てるって言われてたほどだ」

さすがに誇張しすぎだとは思つがな、と続けた。

「20年前、だつたか。俺がお前らくらいの時だつたからよく覚えてる。

海の向こうの小さな国同士が、自分たちのところの資源がなくな
りそつだから領土”と寄越せつづつてな。始めのうちはよくある小
競り合いでた。

だがでけえ軍事国家がそれに参加してからどんどん戦火が広がつていった。……それこそ世界を巻き込むくらいに」

ふむ？

その軍事国家も資源が少なくなつていたつてことかね？
周りが勝手に疲弊してくれたから横から搔つ攫つていくかみたいな感じで？

じゃあなんで海を越えて戦火が広がつたんだ？
周りの国から奪つただけでは満足できなかつた、つてところか？
いまいちピンとこない。

「だが、それも突然終わりを告げる。無名のギルドがたつた6人で戦争を止めた」

「それが、ピースメーカー」

確信を持つてそう言ひ。

「そういうことだ。戦争が終わつたあとにそのギルドの連中が普通に依頼を受けるようになつてメンバーの名前が分かつた、と。一般的に知られてるのはこのくらいの筈だ」

……なんだか釈然としない。
出回つてる情報が少なすぎるのか……？

そもそも、戦争を止めたつてくらいだから各方面から怨まれているだろうに、なんで姿を現した？
いや、これは考えても仕方がないことだな。

「イリス、話せることだけでいいから今の話の補足を聞かせてくれないか？」

「んー？ あんまり話せることがないなあ。強いて言えば私たちだけ戦争を止めてはいないよ。

さすがに個人の力じゃ出来ることが限られるし

「そんなもんか」

あまり期待はしていなかつたので特に何も言わない。

「まあ、属性とかだけなら言つてもいいかな。

暁は……まあ特殊だからおいといて。ヴェルンが”闇”。テイー口は鍊氣師だから無し。荒神は”火”、“風”、“雷”。アニマは”水”、“土”、“氷”に”闇”。私は”光”と”癒”」

「見事にバラバラだな」

バランスが取れていると言つた方がいいだろうか。
しかし、特殊ってのはどういうことだろうか？

俺の”無”と同じ様なもんか？

「あと、鍊氣師ってなんだ？」

「魔術を使わない、気を使った戦闘をする奴らのことだ

「”使わない”のか”使えない”のかは人に寄るけどね

おっさんとイリスが説明してくれる。

魔術に気。

そのうち「合成して最強！」みたいな奴が出てくるんじゃなかろうか。

改めて思うが、ほんとにゲームや漫画の中の世界だな。

「2つの違いは属性の有無とあり方だけだ。それ以外は殆ど変わらねえ」

「あり方?」

「魔力は大体の動植物がその身に含んでいる。それは、大気中にある魔力を体の中に取り込んでいるからで、自発的に生み出しているものではない。比べて、気は生命力みたいなもんでどんな生き物だろうがこれが無いってことはあり得ない」

「本気で使いすぎると氣絶じやなくてそのまま死んじやうから氣をつけてねって」と

「折角説明してんのに身も蓋も無い言い方すんじやねえよー?」

生命力と精神力ね。

おっさんとイリスが漫才しているのは放つておいて、考える。どうにもこういう話は楽しくてしょうがない。
何も出来なかつたあつちに比べて、選択肢の多いこと。
ファンタジーに憧れるのも分かる気がする。
まあ、代わりに賭けるものが命なんだがな。

「……死ねないよな」

死ぬわけにはいかない。

家に帰りたい。

家族に会いたい。

友人に会いたい。

蒼香を悲しませたくない。

「参ったね、どーも」

酷く軽い少女を背負い、2人の声をBGMに街道を進む。ひとつの一想いを胸に抱えながら、つてね。

道中にある村に立ち寄つて補給しながらおよそ1-2日。山のふもと一帯と少し登つたところにまで広がる街並み。

鉱石と風の街、セレスバルナッソスまでやつてきた、のだが。

「……飛竜？」

明らかに鳥ではない大きさの生き物が山の上空を飛んでいる。
それも複数匹。

「ワイバーン」の名物の翼竜だ。あれで山を越える

まじかよ。

事故とか無かつたんだろうか。
主に翼竜に食べられるとか。

「ワイバーン」の翼竜は生まれた時から人と一緒にいるから自分から人を襲うことはないんだってさ」

蒼華が街に入る時にもらつたパンフレット片手に説明してくれる。
山と翼竜のおかげで観光名所でもあると

「生まれた時からつて……。そんな前から続いてるのか？」

そもそも人と竜じゃ寿命が違うだろ?」。

今山の上を飛んでいる竜だつて100年くらい軽く生きてそうだし
な。

「人と竜がこの街を創つたんだとよ。こことの関係はこの街が出来た時から続いてる」

人と竜がねえ。

竜つてのは多分長生きなんだろうし、知識を蓄えて人と意思疎通ができる奴がいたんだろうな。

そのうち人の言葉を発する竜つてのも見れるかも知れないな。

「ほれ、まずは宿だ。呆けてねえで行くぞ！」

おっさんには背中を叩かれて歩きだす。

蒼香は見たことのない風景に目を輝かせながらお上りさんの様にキヨロキヨロと忙しなく辺りを見回している。

俺もやりたい気持ちは山々あるが、蒼香を見ていると少し恥ずかしいので自重しておこう。

「宿の後は酒場か」

「ひと時の楽園亭だね」

携帯に送られてきたメッセージ。

それの意味するものは何か。

トラブルじゃなければいいんだけどな。

「……俺は外しておいた方が良いか？」

「変な氣使わなくてもいいつの」

おっさんが恐る恐る聞いてきたので答えを返す。

思えばおっさんはまるで関係ないんだから巻き込む前に別れた方が

いいんだろうか。

うーむ、後でおひさんに意思確認しておかないとまずいな。
やれやれ、面倒事が多すぎたつ。

ギイ、と見た目通りの古びた音を立てながら木製の扉が開く。
中から聞こえてくるのは随分と楽しそうな声だった。
昼間だからなのかも知れないが、あまり酒場という感じはしない。

「いらっしゃい！　あ、初めての人ね。席は自由にどうぞ」

看板娘というやつだな。

顔良し、スタイル良し。87点。

そんなことを思っていたら蒼香に小突かれた。
俺はそんなに分かりやすいんだろうか。

「ゴウキ。言ひすいやあなんだが、見すぐだ。俺でも分かる」

「ああ、なるほど」

それは相手にも失礼だし、気をつけよう。
さてさて、件の一番奥のテーブルは、ど

昼間から酒盛りしている男たちや遅めの昼食を取っている女性たち
を横目で見ながら店の奥へと進む。
いた。

見た目は少女。黒を基調とした「スロリ？」の服を着ている。
髪の色は薄い紫。黒猫を抱きかかえて大変可愛らしいとは思つのだ
が……。

キモチワルイ。

少女の佇まいといふか、雰囲氣といふか。

あの黒に少しだけ青が混ざつた様な色の魔力も。

何と言えばいいのか分からぬが、少女に近付くことを体が拒絶している。

「ユーキ？」

誰かが俺を呼ぶが、それに反応することが出来ない。今すぐにでもここから逃げ出したい。だがそれをなんとか押し込んで踏み止まる。

俺を呼ぶ声に反応したのか少女がこちらに視線を向けて、静かに囁いた。

「あ……。 オイシソウ」

ツ…！

一瞬にして総毛立ち、声にならない叫び声を上げる。後ろへ跳んで、強く何かにぶつかる。関係ない。

少しでもあの少女から離れないと

！

「こーら、止めなさい」

イリスがやんわりと少女の肩を叩いて止める。

少女は些か不服そうではあるが、イリスに向き直つて話し始めた。

「大丈夫か？」

すぐ後ろから野太い声がする。

どうやら先ほど後ろに跳んだときにおりさんの方に突っ込んだようだ。

肩を抑えるよつとして支えられていた。

「……大丈夫じゃねえよ」

それだけ返す。

むしろなんでおっさんや蒼華が平氣なのかが分からん。

蒼香は俺よりも少女に近いところにいるのに不思議そつに俺を見て
いるだけ。

「……冗談。……からかっただけ」

少女がポツリポツリと言葉をこぼすが嘘にしか聞こえん。
本気で食われるかと思つたつつの。

「……でも、美味しいよつていうのは本當」

「勇輝、この子と一人きりにならないほうがいいわよ。性的な意味
とそうでない意味の両方で食べられるから」

イリスの言葉を聞いて吹き出した。

そんな見た目11・12歳の少女に襲われて死ぬエンディングは嫌
だぞ。

「……嬉しい？」

抱えている黒猫と一緒に首を傾けて聞いてくる。

これだけ見ればただの少女なんだけどな。

まあ質問の内容は少女がするもんじやないが。

「いや、そうでもない」

「……残念」

本当に残念そうに眼を伏せるが、「殺してあげるよ、嬉しい?」などと聞かれて嬉しいと答える人は、「く少数なんですよ。

「ほりほり座つて座つて。あ、アニメ一人だけ?」

「……違つ。荒神、一緒……」

イリスが少女の隣に座り、俺たちにも座れと促してくれる。
そんなことより、今アニメって言つたよな?
それにその当人も荒神つて。
これつてもしかしなくても。

「血口紹介、遅れた……。ピースメーカー、“悪食”のアニメ、です

「ああ、うん。ユーキです」

「蒼香です」

「バルドスだ」

先ほどのやり取りが普通の様に思える。

やつぱり何か突出して凄い人つてのはどいかおかしかつたりするんだろうか。

しかし、人も食つのか……。恐ろしい。

「あ……、誰彼かまわづ食べるわけじゃ、ない、よ?」

「どうしてそこで疑問形になるのか」

しかも安心できるような内容じゃねえし。

はた、とそりいえば普通に会話が出来る。

抑えてくれればやはり普通の少女と変わりないといつことか。

「おーれーの一さーけーはーっと。うん?」

呑気な声が近付いてきた。

180後半の身長に浅黒い肌。白いタオルを頭に巻いて、一見すると土方のバイトの兄ちゃんである。だが、男から立ち昇る鮮やかな紅色の魔力が俺でも分かるほど実力者ということを示していた。

「おじおじおい、俺が便所行ってる間に随分と大所帯に」

声の主が一瞬止まる。

視線はイリスに向かつている。

「なんだアンタがここに……」

「細かいことは言いつこなしよ。あ、お酒来たわよ?」

イリスが示した通り、先ほどの看板娘さんが盆に料理とお酒の入ったグラスを乗せて近付いてきた。男は随分と固まっていたが、やがて諦めたようで椅子を他所から持ってきてドッカリと座った。

「イリスがいるってことはそういうことだよな。荒神だ」

「あ、お姉さん。」のコム肉のシチューとオレンジジュースを。パンをセットで

蒼香よ、空氣を読もうな。

リムといつのはこの地方特有の羊と牛が混ざった様な動物で、肉は臭みもあまりなく、柔らかくて、安価であると、3拍子揃つて庶民の食卓のお供らしい。

「俺はコーラ、そつち蒼香。」つちはバルドス。あ、俺はリム肉のステーキをライスで」

「俺もリム肉のステーキとライス。あとエール」

「おー、そうか。で、そのコーラキ達がどうしてこんな所に？」

肉に齧り付きながら聞いてくる。

「アカツキのツルギ」

「……ほう？」

荒神の雰囲気が変わった。

陽気な感じが無くなり、冷ややかな田でしきりを踏みみするよう見てくる。

それに気圧されまいとこからも睨み返してやる。

「オーケー、びつかりマジみたいだな。俺もここで待つてた甲斐があるつてもんだぜ」

「待つてた？」

「ここで？
俺たちを？」

まるで来ることが分かつてたかのようない方だな。

「まあ、後で話してやるよ。今は飯だ！ 姉ちゃん、酒持つて来て
くれー！」

……なんというか、しっかりしてる時としてない時の落差が酷い。
良く言えば切り替えがしつかりしてるってところなんだろうが、目
の前の姿を見てるとどうにもそつは思えなかつた。

……しかし、若いな。

ピースメーカーのメンバを見て思う。

イリスは20位に見えるし、荒神はいつても30、アーマに至つて
は12歳位。
おっさんのが言ってたとおりならこの人たちは40後半位じゃないと
計算が合わないんだが……。

「あんまり歳のこと考えてると、お姉さん怒っちゃうでー？」

「…… イエス、マム」

対面からイリスにナイフを突き付けられた。

口元は笑っているが、目が笑っていない上にハイライトも見えないので余計に怖い。

さて、なんやかんやありながら食事が無事に終わり、食後のお茶を

飲みながらのお話である。

「で、待つてたつて？」

先ほどのことを荒神に問う。

「言葉通りだ。こいで待たされてた、つて方が正しいがな
誰に、とは言わない。恐らく奴だろ？
しかし、何のために？」

「ま、俺の役割は道案内つづーか、道を示すことだ。特に考える必要はねえよ」

「……あんたたちが敷いたレールを進めつてか」

自分たちが思い描くルート以外は進んで欲しくないか、それともクリアまでの道のりを教えてくれるのか。
どちらにせよそれに縛すがるしかないのだが。
俺の言葉を聞いて怒るどころか不敵に笑みを浮かべて、

「やつこつことだ。ちなみにレールから逸れると谷底へ真っ逆さま
だつてことを教えておいてやろう」

そんなことをのたまいやがつた。
俺らには選択権もねえってか。
嫌な感じだ。

「ま、あれだ。罠に嵌めようとか、そつこつのはじゃねえからそこ
安心しきけ

「安心も何もないと思つんだが」

確かめる術はないわけだし。

もし分かつたとするならそれは罷にかかつた後の話だ。意味がない。

「えつと、荒神さんたちはなんで、お父さんと？」

「お父さん、つてことはお嬢ちゃんがあの時のチビちゃんか。大きくなつたもんだ」

こんなに小さかつたんだぜ、と親指と人差し指を少しだけ広げて笑つた。

いくらなんでも小さすぎだ。胎児か。

思わず突つ込みを入れそうになるが、ここは我慢しておく。
話が逸れても困るしな。

「他の奴らは知らねえけど、俺はグータラしてたところを拉致られた」

「……はあ？」

理解できない。

「別の地方で山賊稼業やって食つてたんだが、それにも飽きてな。
住んでた小屋で自堕落に生きていたら偶然通りかかつたあいつに強制的に連れて行かれた」

「はあ……」

蒼華が気の抜けた返事をする。

うん、俺もそんな気分だ。

「そんな俺が、二つの間にやら国まで相手にして。馬鹿かつての」

悪態を吐いてはいるが、荒神の顔は笑っている。

口で言つても、といふところか。

さて、二つ聞くとますますヤツの人となりが分からん。

「ま、んなことはどうでもいいわ。とりあえずこれから先のヒントを出しておいてやる」

肩を竦めて話を打ち切り、先のことについてを話すと言ひ。もう少し話を聞きたいが打ち切ったといふことは聞くな、といつことだらうか。

「放雷花の園、つぼみ薔薇は未だ咲かず」

また知らない単語が……。

「ホウライカ?」

「ある地方の一部でしか咲かない放電現象を起しす稀少な花の名前だ。魔術の触媒として重宝される」

おっせん、解説ありがとつ。
しかし放電する花って危ないことこの上ないな。
その園つて。危険地帯にでも行けと?」

「俺が言つのはここまでだ。後は自分たちで考えな」

「ああ、あつがとう。やっぱ分からなこたど、じつが元がしてある

」

「あつがとひるがこまか

蒼香と2人揃つて頭を下げる。

「で、アンタだアンタ。なんでここにいる?」

「もういえば、なんでアーマーにならなかったの?」

「一人は、寂しかった……」

半眼で睨みつける荒神をひとりと流してアーマー躍りイリス。

その問いに緩々と首を振つて小さく呟くアーマ。

先ほどのやつとりがなれば本当に、ただの少女なのだが。

「あと、お金なかつた……」

「切実過(あつめくわ)だらー?」

「二つの場合、報酬の8割が食費に消えるからな

もつ悪食じやなくて暴食のアーマに改名しよう。

と、こうか俺たちの生活費つてどこから出でんだ?

クルリと蒼香の方へと回へ。それに運動するみつて蒼香の顔があつさんの方へと向く。

「……路鎧はぬきたど?」

「ああ、うん。本当にスマン」

おっちゃんに頼り切つてたのか。
もしかしなくても不味いだろ。

「緊急会議ー！」

「働く。以上」

「会議終了ー！」

おっちゃんの一言により5秒で終わつた。
久しぶりにギルドに行つて依頼を受けてくるしかないか。

「うし、じゃあ解散だ。イリス、アンタは残れよ?」

「仕方ないわね」

荒神に言われてイリスが少しだけ浮かせた腰を下ろす。
アニメも動こうとしてないから残るんだろう。

おっちゃんが代金の一部をテーブルの端に置いて立ち上がる。

「ありがとうございました！　また来てくださいねー！」

店員さんに見送られ、店の外へ。

振り返つて見上げれば翼竜が茜色の空を舞つて山の上を行つたり來
たりしている。

そのあまりにも幻想的な光景を、少しだけ見慣れてしまつた自分が
いることに気付いて苦笑い。

ファンタジー

「何？ 急に笑つて」

「いや、なんでもなこれ」

蒼香にやつ置いて、ヒントのことを考える。
放雷花の園つてのはおっさんか言つてたある地方つてところに行けば、まあなんとかなるだらう。

薔は未だ咲かずつてのはそのままの意味だらうか。分からん。
面倒なヒントだ、と溜め息を吐く。
まあ、どちらにせよ金がなければビリしようもない。
俺でも出来る仕事があればいいのだけれど。

「で、どうこいつことだよ」

荒神が問つ。

悠輝たちと話していた時の様な感じはなく、ただ真剣に。

「止めたいのよ。分かってこるんでしょ？」

それに返すイリスも普段の雰囲気はなく、真面目なものである。

「……イリスは、それでいいの？」

「あつがとう。でもいいのよ、終わつたことだもの」

不安そうに話しかけるアーマー、イリスは微笑んで返す。

「チツ、わあつたよ。手え貸してやる」

面倒なことになつた、と荒神はぼやく。
アーマーは無表情で沈黙を保つている。

「『』みんなさー、私たちの問題に付合わせてしまつて

小さく、しかしふつかりと頭を下げる。

「それを言つならお嬢けやんたちこ、だろ?」

「やつ、ね。あなたに言つて損したかしり?」

「アンタな……」

げんなりとした声音で批難の声を上げるが、2人共[冗談だと分かっているのでそれ以上はない。

「……アーマーは?」

「私は……、うん。イリスの、味方

少しだけ考えるが、やがてしつかりと宣言した。
その言葉を聞いてイリスは胸を下ろした。

「……ありがと?」

「うし、じゃあ俺らの目的は

「

暁達を、止める」と。

今ピースメーカーのメンバーが、2つに別れた。

遅くなりました。

一応ネギまの一次創作もやっています。
よろしければそちらもどうぞ。

にじファンの方でズックで検索していただければ出ると思います。

森の中、剣戟が鳴り響く。

目の前には小柄な生き物。

そいつは器用に片手剣を振るひてきた。
ゴブリン。

肌は茶色く、背は前述の通り小さく腰くらいまで。

襤褸のような布の服を着て手に持つたものを振り回す。

1体1体は力もありなく危険ではないが群れで行動するため厄介な魔物。

「おおおおおおおつー」

思い切り踏み込んで相手の剣に自分の剣を打ち付け、振り抜く。衝撃に耐えきれなかつたのか、ゴブリンは剣を手放してしまつ。首を口掛けて、刺突。嫌な感触が手に伝わる。

剣を引き抜くと勢いよく血が吹き出る。気持ち悪い。

血の臭いに顔を齧めながら辺りを見回す。

10を超えるゴブリンの死体。どうやらゴイツで最後のよつだ。剣を一振り。血振りをして鞘にしまう。

「終わったか」

「おつかれ……」

後ろから声を掛けてきたのは相変わらず上はシャツ一枚のおっさんだった。

ただし、今はそのシャツに赤い染みが所々に付いているのだが。その赤い何かをあまり見ないようにおっさんの顔を見る。

「戦闘音がなくなつたから嬢ちゃん達の方も終わつてゐるだろ。森を出るや」

「……おつ」

力のない返事をしているのが分かる。
いや、分かつてる。

こんな感情は無駄だという事も、これが危険に繋がるという事も。
だけど……。

赤い池の様になつてゐる地面を見る。
相手は人ではない。人型の魔物だ。

魔物、というのは往々にして人に害を成す者たちのことと言ひり
い。

増えてくれば討伐の対象にもなるし、おっさんのように皮や骨など
のために狩る人もいる。

とはいへ、命を奪つたことには変わりない。

「蒼香は、大丈夫かな」

「……芯はしつかりしてゐからな。人のこと心配してねえでまづは
その酷い顔をなんとかすることを考えろ」

「……おつ」

おっさんが酷い顔と言つのなら、多分、俺が想像してゐるよりも大
変なことになつてゐるんだろう。

蒼香にそんな顔を見せたらきっといらぬ心配を掛けるだろう。自分

のことを棚に上げて。

一度だけ振り返って胸の前で小さく十字を切る。

こっちの祈り方なんぞ知らないし、形なんてなんだつていい。ただ、自己満足のために。もつ振り返らない。

「あー……」

蒼香の唸る声が俺とおっさんに宛がわれた宿の一室に響く。おっさんは鉱山を見てくると言つて外出中。イリスは……、よく分からぬ。

といづか人のベッドに勝手に寝つ転がるなよ。あとスペツツ見えてる。

……別にいいのか、スペツツだから。

というか蒼華が気にしてないなら別にいいんじゃないかな?

流石に下着が見えたら不味いとは思うが。

「むー……」

多分だけど、蒼華が唸っているのは命のやり取りをしたことに対してじゃない。

いや、少はあるのだろうが。

それが主な原因なら唸りもせず、枕に突つ伏してると想つ。んー……。

「さつぱり分からん」

「それだけっ！？」

蒼華が飛び起きる。

時折、「ロロロ」と転がっていた所為か、髪が大変なことになっている。

「もつといへ、心配するとか、優しく声を掛けるとか！ あるじやん！」

「いや、大丈夫そつかなど」

これだけ吠えてりや十分だな。きっとやせ我慢なのだらうけど。

蒼香から見えないところで拳を握り締める。

肉を貫く感触。真っ赤な血飛沫。その臭い。断末魔。

眼の奥に焦げるような痛み。恐らく幻痛。

こりや蒼香よりも参つてるかも知れない。

牛鬼の時はいっぱいいたから、考えなくて済んだんだが。

「ふう……」

いかんいかん。

このままだと頭も体も腐る。

一回外でも回つて氣分転換してくるか。

「蒼香ー、外行くけどどうする？」

「行くー」

枕をモフモフとこねくり回して遊んでいた蒼香が反応する。

大体青が多めの服を着ているから、オレンジ色のパークー姿は少し新鮮である。

一応剣も持つていいくか。なにかあつた時に困るし。

若草色の「コード」をハンガーから取る。

大丈夫、血の臭いなんてしない。ちゃんと洗つたし。

「せり行ひつをあ行ひつ卑く行ひつ」

「押さんでも行くつとの」

なぜかとても元気になつてゐる蒼香に押されて宿を出る。
まだ空は青いがもう1時間もすれば夕焼け色に染まるだらう。

「どり行くの?」

「……まあ、適当に」

新しく来た街といふことで結構なんでも面白く見える。
酒場、宿屋が多いのはこゝが山を越えるための街だから、とこゝことなんだろう。

あとは製鉄所や武具屋、武器工房などがちらほらと。
山に上がつた方はまだ見ていないが、恐らく鉱夫たちのための宿舎
などが多いんじゃなかろうか。

「武器専門店だつて。覗いてみる?」

「あー、おっさんから貰つた剣も少し刃毀れしてゐるんだよな

良く見ると細かい傷がびつしり入つてたり。

この街ならおっさんに研ぎ直してもらえるかね。

「ここにわざわー」

「……ついでに果物ナイフは置いてないぜ？」

「いや、剣を見たいんだけどいいかな？」

明るすぎず暗すぎず、壁が見えない程に武器がずらつと立て掛けている。

こんな風に武器しかない店はこっちでも始めてだから面白い。剣はもちろん、槍にハンマー、斧に棍^{こん}、弓矢に杖などもある。一部、誰が使えるのかと思うくらいに大きい剣やハンマーが置いてあつたが小人がいるのだから逆があつてもおかしくないな。

「蒼香はナイフはいいのか？」

「そんなに使ってないからねえ」

蒼香の戦闘適正距離が近く中距離とはいっても多彩な魔術と魔力強化の石があるからそういう使わないといふことらしい。

というかそもそも魔術特性が武具だからこうのもあるんだろうな。魔術でナイフくらいなら作れるし。

だから蒼香にとって本物のナイフを使うのは本当に最後の手段なのかもしれない。

「あ、これなんていいんじゃないかな？」

「また特殊なもん持つてきやがって……」

蒼華が手に持っているのは戦輪^{チャクラム}である。

真中に大きく穴をあけた金属の円盤の外側に刃を付けた投擲武器。ブームランのように戻つてくる」とはない、と思ひ。

「消費物だからかと張るが」

「えー、じゃあこれ」

ジャラリと音を鳴らして持つてきたのはこれまでマニアックな武器。分銅付きの鎌。

「鎖鎌は……、うん。 相当練習しないと扱えないイメージ」

「あー、やつぱり?」

せつまつていそいそと元の場所に戻す蒼香。
面白半分でなんでも持つてきたりするから」こいつとの買い物は時間がかかる。

「せめて剣の範囲内にしてくれ」

「えー、じゃあこれ」

波打つ刀身が特徴的なフランベルジH。持つてみると馴染まない。

おっさんに貰つた剣をずっと持つてたとはいえ、握った感覚が違います。

柄は交換できるんだよねけど、重さとかのバランスが何とも言えなくくらいに自分に合わない。

「一言で言つとすれば、

「持ってるだけで気持ち悪い」

「えー、なにそれ怖い」

「これはダメ、と蒼香が元の場所に戻す。やつぱりおっさんに頼んだ方がいいか。手間は掛かるかも知れないが、金はそんなに掛からないだろ?」

「ハハハハ! 刃毀れとかも魔術でパツパツパーと直せないのかねえ?」

「出来るよ? 打ち直すのとじつちが良いかは別として」

「出来るのか。いやまあおっさんなんか魔術で武器作ってるんだから当たり前のようだよ! 出来るか。」

「でもバルドスさんはユーキの剣はちゃんと鍛え直したいんじゃないかな?」

「おっさんも大概に職人気質だからな……」

「さつき街に出来る時も生き生きとしてたもんね」

良�の笑顔を浮かべていたおっさんの顔を思い出す。

「これ以上ないつてくらいに良い顔してたもんなー……。」

さて、冷やかしでもいいんだが店長のこっちを見る目が少し怖いことになつていてるのもうつづつ触つてみて、駄目なら出るか。

無難にショートソードやロングソード、ブロードソードを手に持つてみる。

うーん、いまいち……。

ちょっと振つてみたいが、場所はないんだろうか。

いや、でも振つてもあんまり良い方向に変わるとは思えない……。

「まあ縁が無かつたつてことでいいんじゃない？」

「だな。あんまりいても悪いし」

自分の身を守るものだからこれだけは妥協できない。
命わないと思つたなら絶対に持つな、とはおっさんとの言葉だ。

「おひ、どすまん……ってなんだ、お前らか」

店主の視線から逃げるよひ「アを開け外に出ると店のすぐ傍に見
知つた顔がいた。

「荒神さん」

「どひした、お嬢ちゃん。デートのお誘いか？　5年は早えぞ？」

「いえ、さつぱりその気はないので。イリスさんは？」

「あいつならアニメと一緒に買い物だ。時間掛かると困るぜ」

「アニメと買い物……？」

駄目だ、全く想像できない。

あのどよんと沈んだ人とキャラッキヤウフフとか考えただけで寒気が
するわ。

「荒神さんは何を？」

「俺はそつひの坊主に用があつてな。借りて行つていいか？　まあ

お嬢ちゃんも付いて来てもいいが

「俺に……？」

さて、なんの用があるんだろうか。

首を捻つて考えてみるも思い当たることなどひとつもない。

「魔術の使い方を軽く教えてやる。じゃねえとお前死にそうだし

「ああ、そう」

何かと思えば、魔術の話か。

面貸せよ、とかじやなくて本当に良かつた。

いや、そんなことはないと分かってはいるけれども。

「どうに行くんだ？」

「街はずれの広場だよ。付いて来い」

そう言って、軽い音と共に荒神の体が宙へと浮き上がった。

宙に浮いた荒神の足元には緑色の魔力の球体があり、それを爆発させて推進力を作っているようだった。

緑の魔力は風の属性だったな。

空を飛ぶことも出来るようになるのか、と感心していると蒼香に引っ張られた。

「いいの？ 見失つちゃうよ？」

「あ。ちよ、行くぞ、蒼香ー。」

屋根の上を結構な速度で飛ぶ荒神の姿は飛び上がったときによつやく見える程度に離されていた。

幸い方向だけは分かつてるのでどうにでもなるが、遅く行つて何か文句を言われるよりかはさつさと行つた方がいいだらう。こちらに来て身体能力が上がつていると言つても家を飛び越えるだけの脚力は無いので、ひたすら家屋の隙間を縫つよつに走る。

狭い路地。前方から人。

止まつてなんていられない。

膝を曲げ、体を沈ませる。

「面倒だ。蒼香、跳べ！」

「ん、分かった」

膝を、体をバネのよう、力を一気に解放し空へと跳ねる。

「ほじつと

頭上から声が降つてきた。

成人男性を軽く飛び越えているであつた俺の頭の上に蒼香の頭が逆さになつてそこにあつた。

結構無茶な要求をしたと思つていたんだが、

「手、貸して」

「ん」

言われるままに手を差し出す。

蒼香は俺の手を取つて緑光を全身に纏い、そこに地面があるかのように空を踏みしめ少しだけ高度を上げた。

さっきの荒神と同じことをしているのだ。が、

ただ、俺という荷物があるのと、蒼香の魔術鍛度が荒神ほどではないから子供が飛び跳ねる程度しか上がらなかつた。

「むー、真似てみたけどこれだけかあ」

「そんなもんだろ」

むしろ一発で何でも出来ると思つたら大間違いだ。

「風靴よ、降ろして」

重力に少しだけ逆らつて着地。同時に疾走。

大通りを行き交う人達にぶつからないよう蛇のように合間を縫つて走り抜ける。

路地に入る直前、後ろから小さく音が聞こえた。不意に掛かる影。見上げると靴を緑色に輝かせた蒼香が先程とは比べ物にならないくらいに空へと飛び上がつていた。

……どうことだよ。

「せえー、つのー」

ダンッ、と蒼香のそれとは正反対のけたたましい音。

蒼香のように跳ぶことは出来ない。

だが、この路地でなら、両脇に壁があるこの場所でなら俺だって屋根に上ることは出来る。

即ち、三角跳び。

「ふつー。」

「んなこと子供の^{ガキ}ころに遊びでやつてたくらいだが、ソレでならゲームみたいな動き出来るな。

誤算は思ったよりも辛かつたってことか。

一息吐いて、一歩を気にしながら屋根を跳ぶ蒼香に行つてい、と手を振る。

あんにやる、本気でチートくせえな。

一度しか見てない魔術を模倣？ 複製？

なんにせよ習得の早さが異常な気しかしない。

実はそういう魔術師なんじゃねえの？

まあ蒼香の能力なんぞ俺にはあまり関係ないと考えながら、よつやかに目的地に着いた。

荒神は壁に寄りかかり、蒼香はストレッチをしている。こちらに気付いたのか、荒神は軽い足取りで近づいてきた。

「よう、遅かつたじゃねえか」

「アンタが速いだけだろ？」「……」

しかもアンタはほとんど空飛んでた様なもんだし。
こつちは走つてたんだぞ、チクシヨウ。

「お前これで速いつつたら本職の風の魔術師に笑われるぞ？」

「本職ねえ……。見たことないからどれだけ速いのか想像もつかんわな」

そもそも周りが多芸すぎて属性が一つしかない魔術師なんていたかも分からん。

俺でさえ2属性持ちだしな。

こうなると逆に1属性持ちの方が珍しいんじゃないだろ？

「さて、お前の相手はこいつだ」

「……何だコレ」

荒神が差し出した掌に、赤く透き通ったクリオネのような生き物が乗っていた。

「人工精霊、かな？ 私も初めて見たけど……、綺麗……」

宙に浮くそれは、蒼香の言ひとおり宝石の様な輝きを放つていて幻想的であった。

「ルールは簡単だ。こいつに一発叩き込めばいい。……んだがまあ、なんだ。死ぬ気で逃げる」

「は？」

景色が歪む。違う。

熱気による陽炎でそう見えるだけだ。
急激に上がっている周囲の温度。

人工精霊の周囲に浮かび上がる赤い陣、陣、陣。

出現した全ての魔法陣が壊れた機械のような不快な音を立てながら輝きだした。

おいおいおいおい、ちょっとシャレになつてねえぞ？
閃光が、弾けた。

SIDE・Aoka

目前で広がる火炎の大惨事には田を背けて荒神さんをチラリと盗み見てみる。

その視線は確かにヨーキの方へと向かっているが、どこか違う場所を見ているような気がした。

「えっと、お父さんのことを聞いてもいいですか？」

「ん？ まあ話せることはないかもしけねえが」

声をかけてみるとしつかりと反応してくれた。
どうにも切り替えは上手らしい。

「その、お父さんって、どんな人でした？」

一番聞きたいことを聞いてみる。

イリスさんにも聞いたけど、どうにも抽象的というか子供っぽい言い方しかしなかったからさっぱり分からなかつた。
うん、まあ。大切に思われてたっていうのはよく分かつたんだけれども。

「あー……、そうだな。始めは変な奴だつて思つた
「次はおせつかいな野郎だつて変わつた
「最後はやっぱり変な奴だつた」

「変な奴つて……」

自分のイメージからすれば変とは真逆の位置にいたので少し困惑してしまつ。

「変な奴さ。腐つていくだけの俺を拉致つて、旅して、戦争を止めて」

「……」

荒神さんはさつきみたいに遠い田をしていた。
ここではないどこかを思い馳せているのだろう。

少し、安心した。いや、こんなことを思つるのは私的にはあんまりよろしくなかつたりするのだが。

自分の父親が、どんな理由かも分からず友人の命を狙つているだなんて話は信じたくない。

この眼で見ているとしても、だ。

だから安心したというのはやっぱり私の偽うざる本心なのだろう。

「まあ、出会いはいいか。メンバーは知つてるよな？ アイツにイリスにヴェルンに俺とアーニマとティーロ。……冷静に考えてみりやスゲーメンバーだな。馬鹿みてーに力を持つた3人と人外2人に俺か」

なんかもう突っ込みを入れたい。

「そりそり、イリスとヴェルンは双子だつたか。似てるけど似てない、似てないけど似てるみたいな奴らでな。あいつらの喧嘩を静めるのは暁の役目だつたな」

双子？

……たしか、あのときコーリーは。

「イリスとか性格はあんなんだけじ、見た目は美人だろ？だから最初にあの姉妹見たときは女神が直々にお迎えに来たのかと思つたぜ。……そんな幻想はぶち壊されたが」

ああ、それは素直に共感できる。

見たことも無いような美人さんが色々と口無しな言葉をポンポン口に出すのだ。

でもそんなことは基本的にコーリーの前でしか見なかつたけど。

「思えばいろいろなところ行つたな。山を越えて、海を越えて。ビルギヤの国の王様の寝室に忍び込んだこともありますたな。山の上の龍に会いに行つたりもした」

話す内容はどれもまるで絵本の物語のようである。

「暁は生真面目な奴でな。よくイリスとヴェルンに遊ばれてたよ。他の奴等はその姿を見て微笑ましく思つたもんだ」

思わず顔が綻んだ。

小さな頃の記憶も殆ど薄れ、強烈に記憶に残っているのはコーリーに向けた剣と拒絶する背中、押し殺した冷たい声だけだから。

「だが、ある日を境に変わつていった

荒神さんの壇のトーンが一段落ちる。

「暁の奴、寝てなかつた、いや、眠れなかつたんだろうな。且つき

が田を増す」とに悪くなつてこつてよ。そのついコスとガホルンの口数も減つていった

「……」

そこには押さえ込んだ怒りのよつた感情が秘められていて。

「あいつらが、そんな状態でも笑うんだよ。何でもない、心配ない、つてよ。……まあ、素直に話してくれたつて、俺らには何も出来なかつただろうがな」

同時に、どうしようもない悲しみを含んでいた。

荒神さんが空を見上げるのに釣られ、同じ様に顔を上げる。

「……」

「……」

沈黙。

嫌な沈黙ではないけれど、空気が少し重いのも確かである。

「悪いな、なんか嫌な話になつちまつて」

「いえ……、今話してくれたことも、私は何も知らなかつたから…」

最後に何があつたのか話してくれなかつたけど、荒神さんにしてても私にしてもいい話ではないのだろう。

眼を閉じて、まぶたの裏に映し出されるのはほんやりとした記憶。書斎で父の背中を見つめる私。

隣へ駆け寄つて、手元を覗き込んで、びつしりと書き込まれたメモ帳のようなものを持つていて。

「私は気付いて向けた顔は　泣いて、いた？」

「いやあ、ないかなー」

「？　どうした？」

記憶への否定の言葉が口に出でていたみたいだ。
荒神さんに変な目で見られてしまつた。
はあー、でも記憶のなかでもお父さんが泣いてるつてありえないと思つただけどな。捏造でもしたかな?
……逆に考えて私のお父さんに対するイメージは泣くことなんてありえないって思つてているんだから本当にあつたことなのかな?

「まあ、パツと言えるのは「んなもんか。細かく話すとなると俺の頭じゃまとめきれないしな」

「魔術のほうに割合引いてすぎなんじゃないですか？」

「あー、有り得なくもない、か？」

「冗談を言つてみたのにちよつと深刻な表情で返された。

「さすがトップレベルの魔術師、日常に支障が出るほどいの魔術馬鹿だとは……」ってそんなこと考えてたりするか？」

「あんまり自分でトップレベルとか言つものじやないと想います。事実ですけど」

おちやらけた雰囲気に戻った荒神さんは先程までと同一人物とは思えないほどに気を抜かしていた。
ここまできると切り替えが上手すぎるのもどうなのか悩むところだね。

「さて、あいつは、案外頑張った方か

「え？ あつ！？」

地面は抉れ、焦げた臭いと熱気が立ち込める中に倒れた姿。
慌てて駆け寄り口元に手を当てて呼吸をしているかを確かめる。
……大丈夫。息もしているし脈も弱くはない。

ただ服に焦げ目が目立つから、体の方も火傷があるかもしれない。

『柔らかな白。水と混ざり彼を癒したまえ』

体の中で透き通った白と水色を混ぜ合わせるイメージ。
イメージはそのまま確かな形となつて効果を表した。
癒の魔術の練習をしといて良かったと思つ。

今はイリスさんがいるからそれほど心配していないけど、彼女と別行動になつたときとかのために暇なときにやつていたのがこんなにも早く役に立つとは思つてもいなかつた。

「……そうだよな」

「はい？ 何か言いました？」

「いや、なんでもねえよ」

荒神さんに視線を向けて尋ねてみるが溜息とともに返されてしまつ

た。

何か呟いていたと思ったんだけど、気のせいだつたのかな?

「ん……、んあ?」

「あ、起きた。大丈夫? 私のこと分かる?」

ユーキの顔の前で手をひらひらと振つてみる。
まだボーッとしているようだけど火傷は大体治つているはず。
やつぱり、と言つべきか手加減はされていたみたいで体にはそれほどダメージはなかつた。

「んん? つかしーな。結構本氣で術式構成組んだんだが……」

「はい?」

今のは本當だとすると、手加減されて怪我が少ないんじゃなくて、
ユーキが頑張つたつてこと?

「で? わた、どうだつたよ?」

「あー……、死ぬかと思つた」

そりゃあそうだろつ。

これで余裕とか言つたらどんな化け物かつて話だよね。

「というかどのあたりが”魔術の使い方を教える”なんだよ。ただのイジメじゃねえか」

「荒療治のほうが俺も面倒じゃねえし。なにより死に物狂いで頑張

るしな」

確かにそっちの方が効果はあると思つけれども、死んじやつたら元も子もないんじやないかなとも思つ。

「で、他に気付いた事とかねーのか?」

「……あんたら相手に抵抗レジストもクソもねえな。紙の様に吹き飛ばされただけだ」

まあ、ユーキはド素人だしねえ。

出力上げたってどうしようもないでしょ。

「だらうな。お前らと一緒にいたでけえ男くらじでよつやへまともに機能し始めるつひとことかだら」

「くそつ、手詰まり感が半端ねえな。自分で防具を装備できないRPGやつてるよつなもんだぞ」

「?」

ユーキはたまによく分からぬことを言つ。

とはいえてそこそこ慣れたし言及もしないのだけれど。

「一撃貰つたら死ぬゲーム……。攻撃を避けるか、攻撃される前にやるかしかないか」

「お前に今ある選択肢はその2つだな。ソリモでレベルが違うと基本的には小細工すら無意味だ」

「……やられるまえに殺れ、だな

何かを諦めたような表情で溜息を一つ吐き、その顔を凜とした表情に変える。

うん、いつもして真面目な顔をしていればかっこいいのにね。

「決まりだな。瞬間火力上げるための練習法教えてやるよ」

「……イリスと同じ内容だったたら思いつきり笑ってやるが」

おっと、私もユーキの話ばかり聞いてないで自分の練習しなきゃ。

「えーっと、まず集中」

まずはなによりもこれだそうだ。

集中さえ出来ていれば多少構成が無茶苦茶であってもビックリかかる、だそうで。

「次にイメージ」

結果を思い描くことが大切だと書いていた。
自分には出来ると思い込むこと。

「魔力の練り上げ」

深呼吸をしながら、自分の中の一一番奥深くでゆっくりと魔力を燃やし続ける。

「留めて」

練り上げた魔力を右手に移動させて漏れ出でなによつに留める。

ギチリ、と腕が軋む感覚。

まだ。イリスさんに魔力を無理矢理流し込まれたときのよつに限界を超えるつもりで。

歯を食いしばる。

腕が張り裂けそう。

もう、限界っ！

『放つー!』

自分が出来るギリギリまで小さく絞つた魔術陣を指先に展開して一気に魔力を吐き出す。

全身の力が抜けてしまい、思わずへたり込む。

教えてもらつてから初めてやってみたけど、こんなに辛いものとは思わなかつたなあ。

いやいや、駄目駄目。

こんなことくらいで弱音を吐いてたらヨーキに示しがつかないし… 負けられないし！

「……私はなにと張り合つてるんだか」

1つ溜息を吐いて肩を落とす。

荒神さんとなにやら話をしているヨーキを見る。

ヨーキは無茶をしているし、きっとこれからもそういうだらう。

支えてあげたい。

頼つて欲しい。

「私だって、力になりたい」

脚に力を入れて、立ち上がる。

燃え上がる。

凍りつけ。

吹き荒れる。

なんだつていい。

ユーキたちの、ユーキの力になれるなら　　！

「なんだつては出来ないけど、出来る範囲内ならやるんだから
っ！」

この思いを全部。

集中しろ。

練り上げろ。

絞れ。

全部、魔力に乗せて吐き出してしまえっ！

突き出した手の先の魔法陣から放たれた光が視界を染める。
光は一瞬。

すぐに今まで見た光景が目に映し出された。

我に返つたせいか、どつと疲労感が押し寄せてくる。

うん、もう無理。立つていられない。

尻餅をつくようにその場に座り込む。

……なにやら視線を感じる。

ここにいるのは私たちだけ。

つまりはあの2人だと思って顔を向けると呆然とこちらを見ていた。

「……えっと」

「いやいやいやいや、なんでもない」

ユーキは首を横にブンブンと振るだけであった。

「荒神さん」

「まあ、なんだ、その、悩みとかあつたら誰かに相談するといふと思つぜ……？」

「なんでそんな話が出てくるんですかーー？」

集中してたときになにかやらかしてしまつたんだろ？
ユーキと荒神さんの生暖かい視線が痛い。

視線から逃げるよう顔を背けると田の前の惨状が眼に映つた。
山に面していた広場で、私の田の前はその山の壁面だったのだがそこ
に浅くない穿つた様な穴が空いていた。

……なにこれ。え、これやつたの私？

さつきの練習でこんな風になつたつてこと？

一応間違いがないかユーキたちに振り返つてみる。

2人とも頷くだけである。

……どうこうことなのさ。

首を捻つて考えてみるけれど分からぬ。

まさか、さつきのモヤモヤとした状態で撃つたのがこんなに威力が
出るだなんて思えないし。

……うん、見なかつたことにしよう。

いや、この穴はもともと空いてたんだよ。きっと、たぶん。

「でも、悩みか……」

1人だけで悩んでたつて仕方ないこともあるけれど、別にそんなに
大きな悩みは……。

と、そこまで考えてユーキをチラリと見る。
うん、まあ色々な意味で悩みの種ではあるけど相談できるようなこ
とでもない。

といふか相談したくない。からかわれる事が分かりきつている。

「おい蒼香、大丈夫か？ 目が死んでるぞ」

うふふー、と虚ろな笑いを浮かべていたら本格的にコーキに心配された。

いけないいけない、だいぶコーキに毒されてきてるね。

……うん、まあ。

もつけひつと親密になれたら、相談しても、いいよね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7979g/>

俺の異世界譚

2011年10月11日17時41分発行